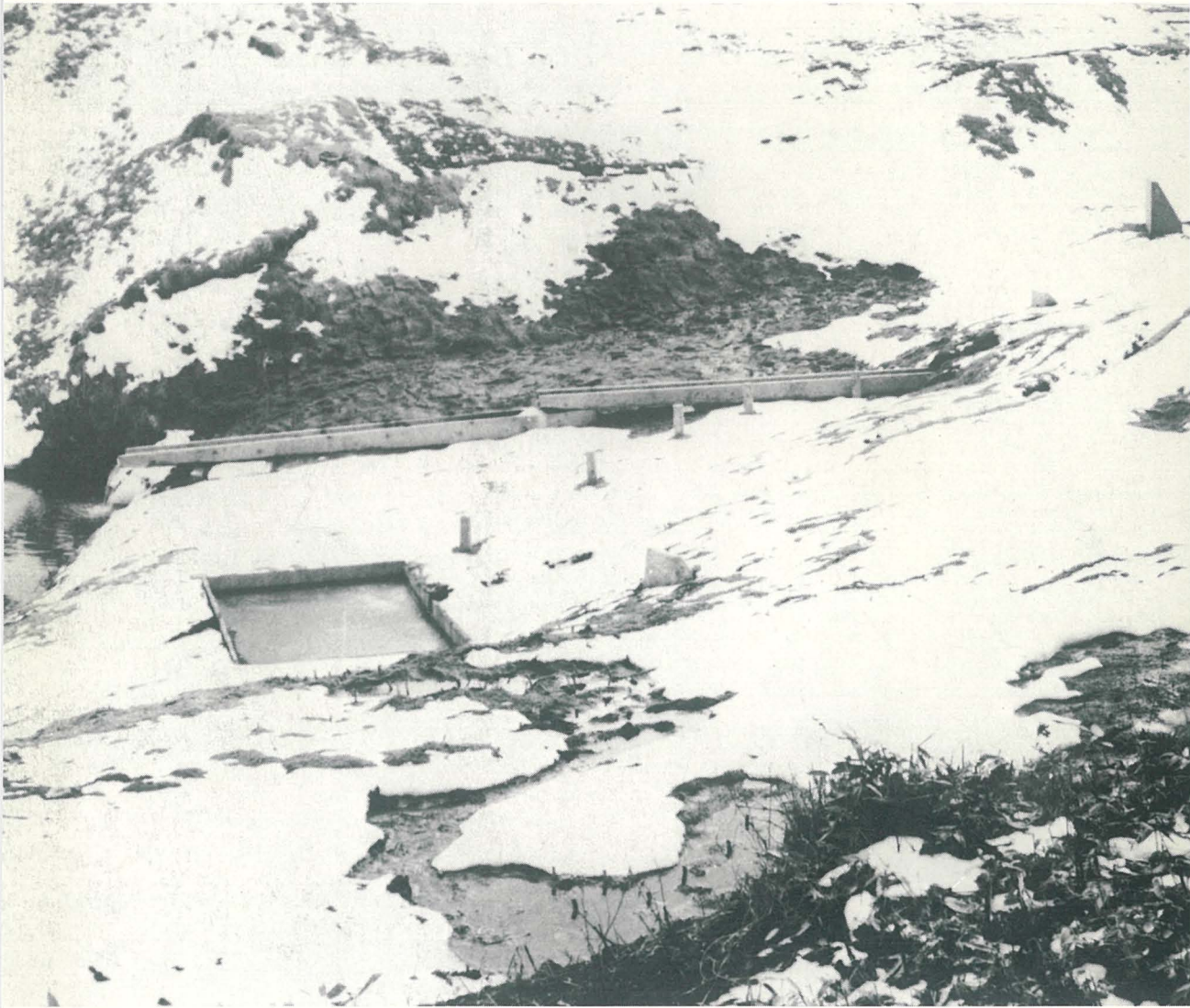


史 跡

上之国勝山館跡 VIII

—昭和61年度発掘調査環境整備事業概報—



1987・3

上ノ国町教育委員会

史 跡

上之國勝山館跡 VIII

—昭和61年度発掘調査環境整備事業概報—

序

国指定史跡上之國勝山館跡の遺構確認調査及び環境整備事業は昭和54年以来本年で8か年を経過することとなりました。

この間遺構確認調査により各種建物跡、空壕、柵列、墓所等またこれに伴う豊富な遺物が検出され漸次当時の勝山館の姿が判明してきました。

昭和61年度は昭和59年度に引き続き館の東南隅に位置する侍屋敷跡の調査を行ないましたところ段により地割区画された建物跡が12軒発見され、さらに北側へ延びる事が判明しました。

また整備は昭和58年度検出されました寺の沢地内用水施設跡の木樋、井戸の復元、及びこれに至る園路、その他空壕跡、墓所、貝塚等の表示板、説明板の設置を行ないましたことにより以前にもまして勝山館の姿の一端が回顧できるようになりました。また館中央部を中心に草木等を伐採して仮整備を実施したところ館の景観が一新し、大手部分も推定され、改めてこの館の規模の大きさ、重要性等を知らされることになりました。

今後の上ノ国中世史跡公園計画の着実な前進を願いこの事業の継続推進にさらに決意を固くする所存でございます。

文化庁はじめ関係諸機関、諸先生方の一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

昭和62年3月

上ノ国町教育委員会

教育長 布 施 潤 一 郎

本文目次

序

本文目次／挿図目次

例言／引用参考文献

I 調査概要	1
1 調査	1
2 基本層序	1
3 保存処理	1
4 環境整備	1
II 遺構確認調査	3
1 発掘調査	
1 土塁・石列	3
2 第14号地割面	7
3 第15号地割面	11
4 第16号地割面	15
5 第17号地割面	16
6 第18号地割面	19
7 第19号地割面	24
8 第20号地割面	27
9 第21号地割面	27
小括	31
2 地形測量	33
III まとめ	40
IV 保存処理	42
V 環境整備工事	44
VI 結び	49

挿図目次

第1図 調査位置図	2
第2図 土塁セクション図・出土遺物	4
第3図 土塁・集石・石列平面図	5
第4図 第14号地割面遺構平面図	8
第5図 第14号地割面セクション図	9
第6図 第I期掘立柱建物跡想定図	10
第7図 第II期掘立柱建物跡想定図	10
第8図 出土遺物	11
第9図 第15号地割面遺構平面図	12
第10図 第15号地割面南北セクション図	13

第11図 集石セクション図・出土遺物	13
第12図 第I期掘立柱建物跡想定図	14
第13図 第II期掘立柱建物跡想定図	14
第14図 出土遺物	16
第15図 第16号地割面遺構平面図	17
第16図 第I期掘立柱建物跡想定図	18
第17図 第II期掘立柱建物跡想定図	18
第18図 第17号地割面遺構平面図	20
第19図 掘立柱建物跡想定図	21
第20図 第18号地割面遺構平面図	22
第21図 第I・II期掘立柱建物跡想定図	23
第22図 第I・II期掘立柱建物跡想定図	23
第23図 第III期掘立柱建物跡想定図	24
第24図 セクション図	24
第25図 焼土・ローンプロック平面・断面図	25
第26図 炭化物集積平面・断面図	25
第27図 出土遺物	26
第28図 第19号地割面遺構平面図	28
第29図 第II期掘立柱建物跡想定図	29
第30図 第I期掘立柱建物跡想定図	29
第31図 セクション図	30
第32図 土壌・出土遺物	30
第33図 第20号地割面遺構平面図	31
第34図 第21号地割面遺構平面図	32
第35図 出土遺物	32
第36図 出土遺物	33
第37図 木製品重量変化グラフ	43
第38図 木製品重量変化グラフ	44
第39図 環境整備概要、表示板説明板正・側 ・平面図	46
第40図 説明板詳細・木樋井戸復原正 ・側・平面図	47
第41図 説明板詳細	48

表目次

表1 出土陶磁器集計表	34
表2 柱穴観察表	35
表3 柱穴観察表	36
表4 柱穴観察表	37
表5 柱穴観察表	38
表6 柱穴観察表	39

写真図版目次

- P L . 1 園路・用水施設整備状況
- P L . 2 用水施設整備状況
- P L . 3 仮整備
- P L . 4 侍屋敷跡昭和61年度調査区全景
- P L . 5 出土遺物
- P L . 6 勝山館跡遠景
- P L . 7 調査区調査前
- P L . 8 土塁調査（土塁セクション他）
- P L . 9 土塁調査（土塁下部集石・出土遺物）
- P L . 10 第14号地剖面・出土遺物
- P L . 11 第15号地剖面・出土遺物
- P L . 12 第16号地剖面・出土遺物
- P L . 13 第17号地剖面・出土遺物
- P L . 14 第18号地剖面・出土遺物
- P L . 15 第18号地剖面出土遺物
- P L . 16 第19号地剖面・出土遺物
- P L . 17 第19号地剖面出土遺物
- P L . 18 第20号・21号地剖面出土遺物
- P L . 19 保存処理完了遺物
- P L . 20 環境整備（用水施設・園路）
- P L . 21 仮整備

附図目次

- 附図1 侍屋敷跡地内昭和61年度調査区遺構配置
図
- 附図2 侍屋敷跡地形図

例 言

1. 本書は史跡上之国勝山館跡の昭和61年度発掘調査及び環境整備事業について概要をまとめたものである。環境整備工事並びに遺構調査については文化財保護審議会特別委員をお願いしている北海道大学 足達富士夫先生・文化学院 鈴木亘先生から御指導をいただいた。
2. 本年度の発掘調査は次の体制でのぞんだ。
調査主体者、上ノ国町教育委員会 教育長 布施潤一郎
主管 上ノ国町教育委員会文化課 課長 関登志夫
修景技術専門員 山崎重任（上ノ国町建設課長）
発掘担当者 学芸員 松崎水穂
調査員 学芸員 斉藤邦典
3. 本書の編集は松崎・斉藤が協議の上斉藤が行った。本書はⅠ・Ⅱ・Ⅳを斉藤・Ⅲ・Ⅴを松崎が執筆し、それぞれ文末に文責を示した。尚Ⅴは環境整備工事設計施行管理を委託した柳田・石塚建築計画事務所に依頼した。
4. 挿図作成は執筆者が行い作業員が補助した。
5. 挿図の中で示した北方位は真北を示す。
6. 調査にあたっては次の関係機関と各位に多大な御指導と御援助を賜わった。（順不同）
文化庁記念物課 加藤允彦 佐藤信、北海道教育庁文化課鈴木清士 森田知忠 鎌田幸彦 伊藤庄吉、虻田敏夫、北海道教育庁松山教育局 大山武士、山形大学 仲野浩、北海道大学 足達富士

夫、文化学院 鈴木亘、大阪市立大学 粉川昭平、東京大学 石井進、勝俣鎮夫 東京女子大学 大隅和雄、神奈川大学 網野善彦、埼玉大学 荒木伸介、宮城学院大学 工藤雅樹、函館大学 榎森進、北海道教育大学 佐々木馨、奈良国立文化財研究所 沢田正昭 光谷拓実、元興寺文化財研究所 内田俊秀 松田隆嗣 渡辺智恵美、東京国立文化財研究所 江本義理、東洋文庫 渡辺兼庸、九州陶磁文化館 大橋康二、国立歴史民俗博物館 小野正敏、日本習字連盟 石原渉、北海道開拓記念館 三野紀雄、山田悟郎 海保嶺夫 小林幸雄、東北北海道史研究会、Drデービス、Drゲリー クロフォード、北海道理蔵文化財センター 大沼忠春 畑宏明 長沼孝 佐藤和雄 三浦正人、松前町教育委員会 久保泰、乙部町教育委員会 森広樹、南茅部町教育委員会 小笠原忠久、虻子千代志 鈴木正語 宮宏明 小田川哲彦 松本尚久

作業員

- 伊勢敏子 大坂志保子 笠谷奈智子、川口泰子 工藤恵美子 斉藤綾子 佐藤祐美子 沢村豊子 下倉美代子 薄田百合子 田畑日出子 辻都茂子 辻美保子 永田トモエ 七尾美也 八田揚子 浜田寛子 福田真貴子 布施末子 布施幸美 宮上幸子 森恵美子 山崎洋子 若狭孝子 鷺田フミ子
7. 遺物の写真撮影について、鈴木正語氏に御助力を賜った。

引用参考文献

- 中世住居址 伊藤鄭爾 1958年
標準色彩図表A 日本色彩研究所 1970年
上之国勝山館跡Ⅰ～Ⅶ 上ノ国町教育委員会
1981年～1986年

I 調査概要

1. 調査

本年度調査対象地区は館後方部空壕地区の東側に位置する通称侍屋敷と呼ばれている台地の一部である。調査は台地中央部に位置する幅1m、高さ2m程の鉤の手状の土塁附近約470㎡を行なった。調査期間は6月9日より10月9日までである。尚埋め戻しは各地剖面毎に段を復原した。調査方法は24G～22Gの20m×20mの大グリッド南北ラインを基準線として4m×4mの小グリッドを設定した。次に当地区での土層堆積状況、遺構の有無確認のため台地の東側及び西側に2m×16mの南北トレンチを設定し掘り下げた。その結果柱穴群が確認されたため周囲を拡張したところ建物を区画する地割段が確認されたため1区画ずつ調査を行なった。尚調査は各地割毎に柱穴配置略図を作成し柱穴間の重複、覆土の状態等を観察しながら柱穴を掘り下げていった。尚焼土、炭化物等は半載しセクション図作成後掘り下げフローテーションのためのサンプリングを行なった。土塁は構築時期を明確にするため東西に2本、南北に2本のトレンチを入れた。遺物取り上げはⅠ・Ⅱ層は4m×4mグリッドを4等分した2m×2m毎の一括取り上げ、Ⅲ層以下は実測図作成後レベルに附して取り上げた。尚当侍屋敷跡は昭和59年度今年度調査区より南側の台地一世帯約1,100㎡を行い13の地割段により区画された建物群が検出されているところである。そのため各地剖面の名称については昭和59年度に引き続き発見順に番号を附していった。

6月 24G 9、14、19、区、24G 2、7、12、17区に2m幅トレンチ設定。同セクション図作成。遺構確認調査。24G 16～19区東西セクション図作成。14号地剖面柱穴配置略図作成。同調査
土塁地形図作成。同トレンチ掘り下げ。調査
7月 14号地剖面写真撮影、平面実測。
15号地剖面柱穴配置略図作成、同調査。写真撮影
平面実測
土塁調査及び附近の集石実測、写真撮影
8月 16号地剖面柱穴配置略図作成、同調査。写真撮影。平面実測
17号地剖面柱穴配置略図作成、同調査。写真撮影。平面実測

9月 18号地剖面柱穴配置略図作成。同調査、写真撮影。平面実測
19号地剖面柱穴配置略図作成。同調査。写真撮影。平面実測
20号、21号柱穴配置略図作成
北側末調査区地形図作成。
調査区全面清掃。写真撮影
10月 埋め戻し、終了

2. 基本層序

本年度調査区の層序は以下のとおりである。

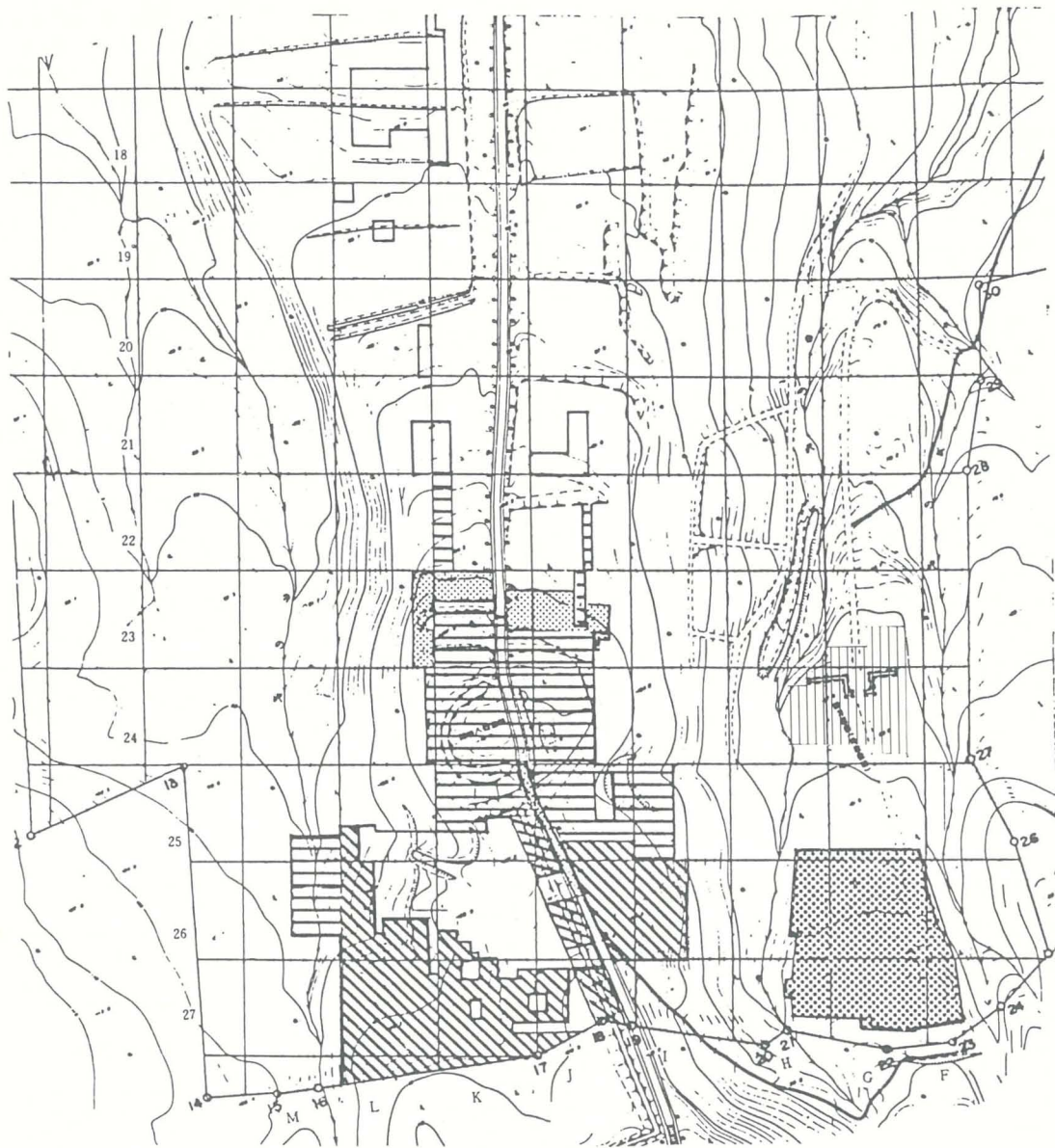
- Ⅰ層 表土層。10Y R^{2/6}黒褐～10Y R^{4/6}暗褐
- Ⅱ層 館廃絶後の自然堆積層。10Y R^{4/6}褐～10Y R^{2/6}灰黄褐。炭化物、OS-a混入。細分されOS-a純層が含まれる。
- Ⅲ層 館機能時の整地盛土層。10Y R^{4/6}褐～10Y R^{2/6}黄褐。ソフトローム粒30%、炭化物等多量に含有する。細分される。
- Ⅳ層 縄文期から館が機能する直前までの自然堆積層である。
- Ⅳa層 10Y R^{1/6}黒 縄文期以後より館が機能する直前までの自然堆積層である。
- Ⅳc層 10Y R^{2/6}明黄褐 縄文期包含層。
- Ⅴ層 ソフトローム
- Ⅵ層 ハードローム







3. 保存処理

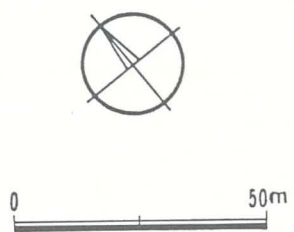
昭和58年度より国の補助を得て勝山館跡より出土した鉄製品、木製品、漆器の処理を行っている。今年度は600点の鉄製品を合成樹脂減圧含浸処理、1,240点の木製品を恒温水槽等を用いてのPEG含浸処理、20点の漆器をアルコール、キシレン樹脂法により処理を行なった。

4. 環境整備

今年度は昭和58年度検出の用水施設跡内の木樋、井戸の立体復元、それに附属する説明板1基、表示板2基、さらに御代参道路より用水施設跡への園路。また昭和59年度整備された空壕Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに説明板1基、表示板5基、土葬墓に説明板1基、表示板1基、室町期貝塚（遺物廃棄場所）に表示板1基。昨年度環境整備を行った柵列、土塁、石積み階段（旧道の一部）に表示板3基、昨年度発掘調査により検出された搦手門跡、それに続く橋跡に表示板2基を設置した。（斉藤）



-  54・55年度調査区
-  56年度調査区
-  57・58年度調査区
-  59年度調査区
-  60年度調査区
-  61年度調査区



第1図 調査位置図

II 遺構確認調査

1. 発掘調査

〈調査目的〉

調査概要で述べているとおり侍屋敷跡約1,100㎡の調査が昭和59年度行なわれ13に地割区画された建物群が検出された。建物群は小規模な住居様のもとの総柱の倉庫状の建物2棟1対となっていた事が判明した。しかしその入口あるいは出口については未解決のままであり、侍屋敷跡地内中央部に位置する鉤の手状を呈する土塁がその役割を果たしているのではないかと考えられてきた。また昭和59年度土塁のすぐ北側に鉤の手状に伸びている石列が検出され土塁との関係が考慮されてきた。このためこの土塁の構築時期、土塁と石列の関係、石列の構築時期、それらの果たした役割を知ること。さらに昭和59年度同様地割区画された建物群が存在するのかが等明らかにすることを目的として土塁周辺部の遺構確認調査を実施した。

1. 土塁、石列

(1) 位置、概要(第3図)

a 土塁 東西に対称形をなすように構築されている。東側は24G 3、4、8、9区にまたがる。24G 8、9区より北東方向へ約5.5m程伸びほぼ直角に屈曲し南西方向へ約6m程のびる。最大幅2.5m、高さ1.5mである。西側は24H 5区、24G 1、2、7区にまたがる。24G 7区より北東方向へ約5.5m程伸び屈曲し南東方向へ約8m程のびる。最大幅2.7m、高さ1.3mである。東西いずれの土塁も一端は台地の肩まで達している。

6 石列 土塁よりやや北側に位置し土塁と同様、東西に対称形をなす形で構築されており鉤の手状をなす。東側は23G、24区、24G 3区にまたがっている。24G 3区より北東方向へ約3.4m程伸びほぼ直角に屈曲する形で南東方向へ約8mのびる。東側は23G 21、22区、24G 2区にまたがる。24G 2区より北東方向へ約3.4m程伸びほぼ直角に屈曲する形で南東方向へ伸びる。東西の石列はいずれもその一端は台地の肩に達し、さらに南へ2m程屈曲する。

(2) 層序

S P A～Áについて(第2図)

土塁の構築時期及びその堆積状況及び両土塁の

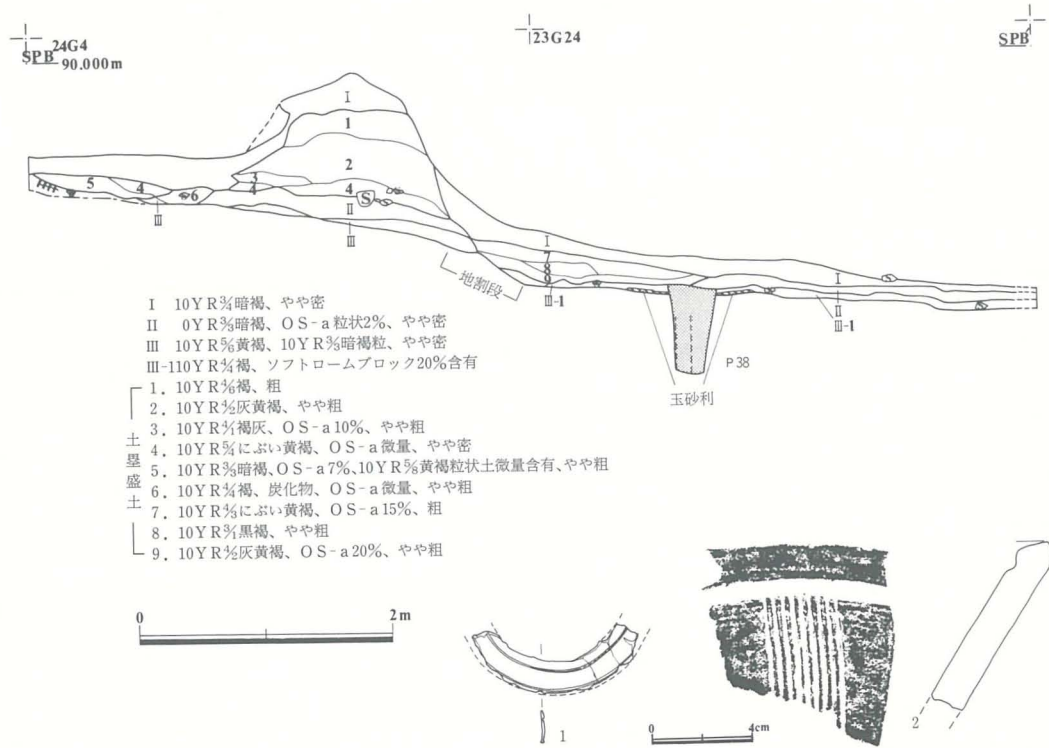
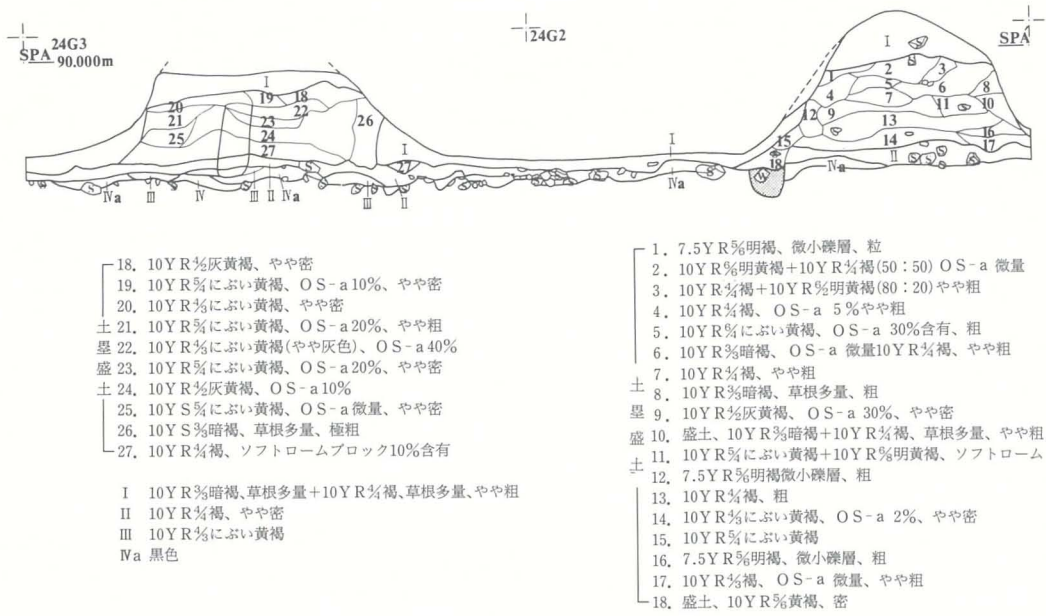
間の通路の存在を把握することを目的とした。東西両土塁はI層及びo s—aが混入するややソフトな盛土層からなっておりその下部にはプライマリーな堆積を示すII層がある。II層は所謂館廃絶後の自然堆積層である。その下部には館機能時の整地盛土層であるIII層の堆積が一部みられることより東西両土塁はII層堆積後の構築と考えられ、侍屋敷跡に存在する地割区画された建物群よりはるかに新しいものであることが判明した。しかし第2図上左にあたる東側土塁中央部には土塁を形成する盛土を掘りこみ面としている柱穴様のものが観察され、土塁に関わるものであると考えられる。また東西両土塁中央部が平面図上では台地中央部にあたるため通路の存在を予想し、その立ち上がり部分を探したが明瞭にならなかった。

S P B～B̄について(第2図)

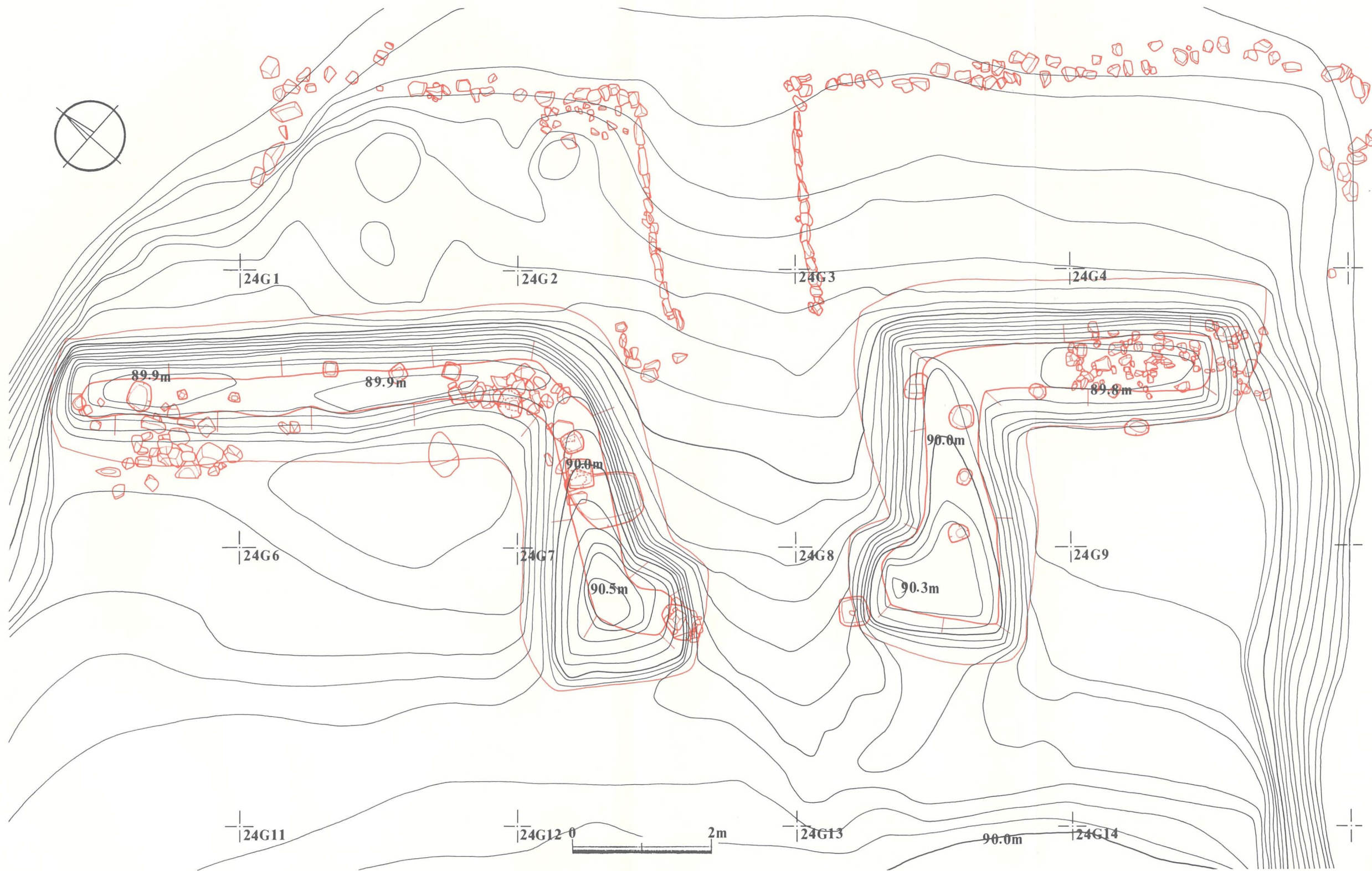
東側土塁を南北に縦断したセクションである。S P A～Á同様土塁の構築時期を把握することを目的とした。24G 4区右端部分(図上中央部)にはIII層を掘りこみ面とした地割段が確認され、23G 24区にはIII—1層を掘りこみ面とした柱穴が確認される。土塁を構成する盛土は柱穴覆土上部にありII層よりも上部に堆積していることより明らかに土塁は新しい時期に構築したものであることがわかる。柱穴掘りこみ面III—1層下部には玉砂利の堆積が見られ、第28図によると23G 24区にその広がりがあるようである。

(3) 検出遺構

a 門 24G 7区、8区東西両土塁の南先端部内側にて柱穴様のビットが確認された。東側土塁のビットは40cm×40cmの規模で方形をなし深さ23.6cmと比較的浅い。西側土塁のビットは60cm×50cmの不整形をなし深さ27.2cmと浅いがビット周囲に8cm～30cm程の円礫があった。東側土塁のビットは柱痕がつかめず柱の太さが判明しなかったが西側土塁のビットは柱痕が20cm×20cm程の不整形である。尚この二つのビットの確認面はIV層上面である。ビット確認面がIV層上面ではあるが隣接する地割面の建物跡を構成する柱穴には使用されないこと。覆土の状態が極めて粗であり建物跡を構成する柱穴の覆土の状態が全く違うこと。東西両土塁南端部に1対になって存在してい



第2図 土壘セクション図・出土遺物



第3图 土壘・集石・石列平面図

ること等より東西両土壘に附属する門柱跡である。

b 柱穴 東西両土壘頂部にはほぼ土壘形状に沿うように配置される。東側土壘柱穴には6つ検出された。南から3つは北東方向に柱間90cm程で規則的な配列をするが他の3つは頂部より若干はずれており規則的ではない。大きさは30cm×30cmの方形あるいは不整形円形を呈する。深さは南端の柱穴が63.5cmの他は20～30cm程である。西側土壘柱穴は10ヶ検出された。ほぼ土壘頂部に存在するが柱間等に規則性がない。大きさは東側土壘柱穴とほぼ同様であるが、深さは17cm～80cm程とばらつく。第1図セクションSPB～B̂で観察される柱穴は東側土壘頂部の柱穴のうちの一つである。これらの柱穴はいずれも柱痕跡をもたない打ち込みのものである。掘り込み面は土壘を構成する盛土面であることより土壘と同時期に機能していたものと推され、土壘の上に塀のような施設が考えられる。

c 集石 東西両土壘の下部にありⅡ層直上にて検出された。東側土壘では24G 1、2区土壘中央部、及び24H 5区南西端の2カ所に分かれてある。いずれも確認面はⅡ層上面、東西両土壘盛土直下にあり、その散布範囲等より見て土壘の根固め石かと考えられる。

d 石列 第24図のセクションでは西側の石列の一部を切っており図上中央部ピットの上部の礫がそれである。礫はⅠ層にくいこんだ形になっており図中央部地割面内の建物跡を構成する柱穴より上部にあり新しい時期のものである。また土壘とほぼ同形態の鉤形を呈し土壘に併走するように北側にあることより土壘とほぼ同時期と考えてもよいと思われる。

(4) 出土遺物註1 (第2図、PL9の1～5)

3点の陶磁器が盛土内より出土している。PL-1は瀬戸・美濃系の鉢か大皿で内外面とも施釉される。釉調は6Y0、8.5の1Sブラウンみの白、内面には6Y0、4.5の7Sつよい青の呉須絵の唐草文が入る。器壁は1cmと厚い、胎土はやや荒い。18世紀以降幕末までの時期のものである。PL-2は関西系の窯で焼かれた袋物で外面は施釉され内面には鉄泥が塗られる。釉調は8Y6.5の3Sグレイみの黄である。内面鉄泥は6Y0、4.5の3Sグレイみのブラウンである。器壁は約

3mmと薄い。胎土はやや荒い。18世紀末～19世紀明治初頭までの時期のものである。PL-5は肥前系磁器の染付か白磁の皿で内外面とも施釉され貫入が入る。釉調は6Y0、6.5の1Sブラウンみのグレイである。器壁は約3mmと薄い。胎土は密であるが、焼にむらがあり、ところどころに小穴が見られる。18世紀以降19世紀明治初頭頃までの時期のものである。第2図2は表採品である。勝山館Ⅲ群に属する越前系播鉢である。16世紀中葉～後葉の年代に属する。

(5) 小括

調査の結果鉤の手状を呈する東西二つの土壘は館廃絶後に構築されたものであることが判明した。土壘南端には1対2個の門柱があり土壘上面には柱が立ち並び塀のような施設があった。また土壘北側の石列もその位置等から考えて土壘と同時期のものであって差し支えないようである。土壘構築年代は一部16世紀代の播鉢もあるが土壘盛土内出土の陶磁器より18世紀～19世紀明治初頭頃までの年代を得た。しかし検出された遺構の中には門柱等があることより何らかの施設の入口かとも考えられるが今年度調査区内でのそのような施設は検出されず、次年度以降の調査に期す所存である。

2. 14号地割面

(1) 位置・概要

調査区南端24G13、14、18、19、23、24区、標高90～90.5mの緩斜面に位置する。地割面の規模は短軸3m、長軸3.5m、面積10.5㎡である。段により区画された建物跡が2棟検出された。註2

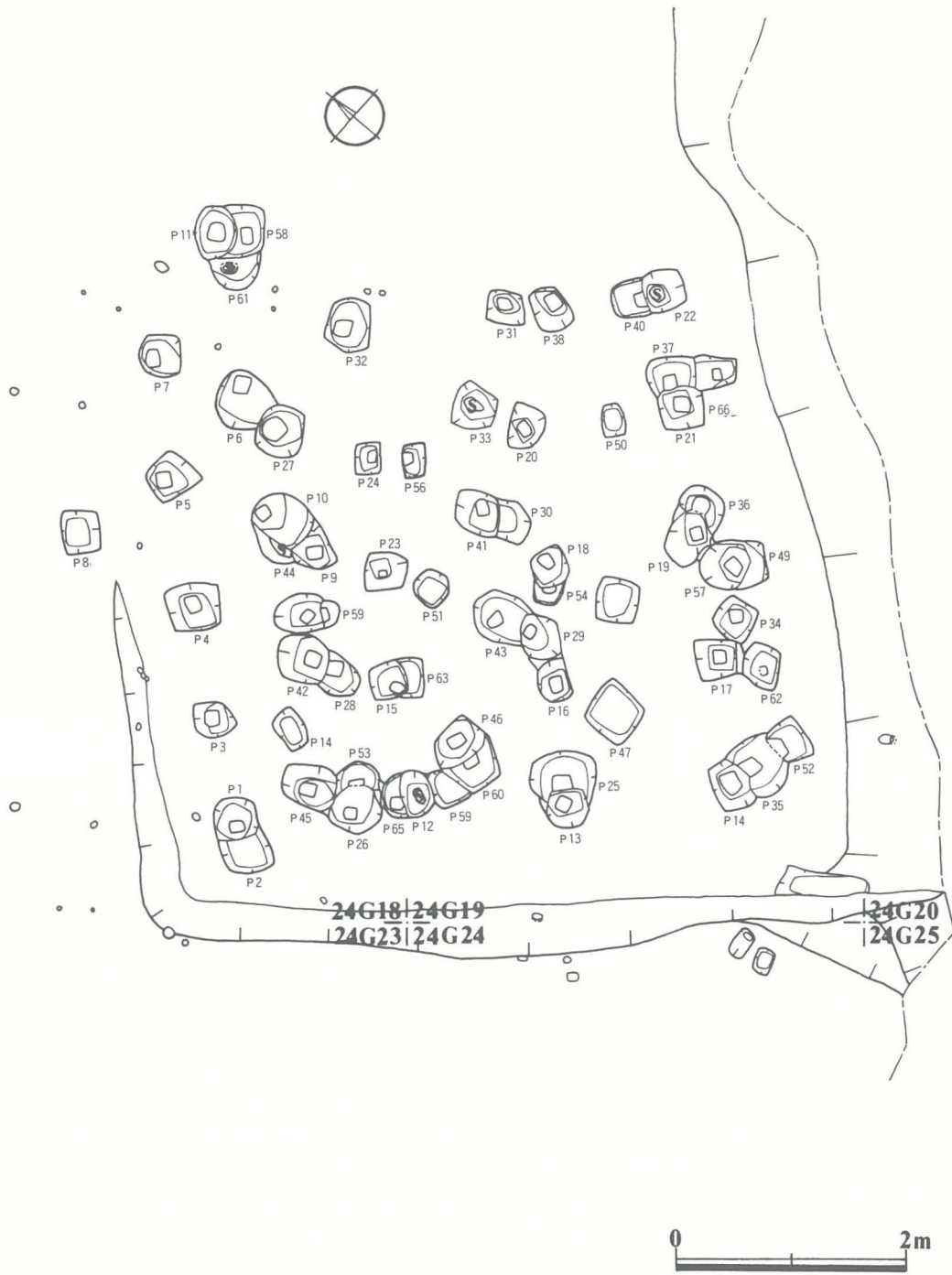
(2) 層序

SPC～Ĉについて (第5図)

地割段の有無、昭和59年度調査の際確認できなかった通路の検出を目的とした。地割段は図上中央24G23区内においてⅢ-1層を掘りこみ面として確認された。通路は24G17区ではⅢ層を掘りこみ面とした落ちこみが通路路肩かと思われたが、もう一方の側溝が確認できなかった。また通路面となる整地面も確認できなかった。このことより当時の通路は整地をし路肩をもつような整備されたものではなかったのだろうと推測される。

SPD～D̂について (第5図)

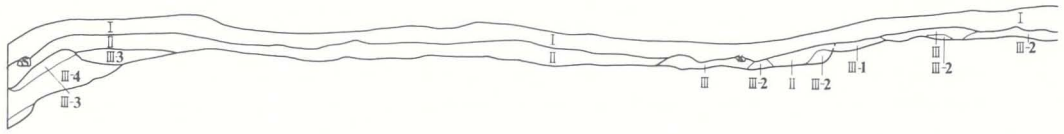
地割段の有無及び地割面推積状況観察を目的とした。地割段は24G19区、24区交点附近にて確認



第4图 第14号地剖面遺構平面図

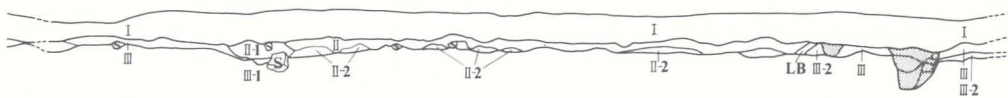
24G19
SPC 90.200m

24G18



24G17 | 24G16

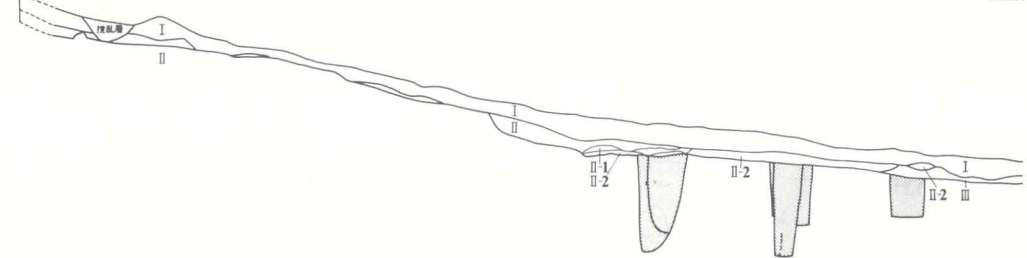
SPC



- I. 10Y R%暗褐、やや粗
- II. 10Y R%暗褐、OS-a混入、暗褐～灰褐、やや粗
- II-1. 10Y R%、にぶい黄褐、OS-a 50%混入、密
- II-2. 10Y R%灰黄褐、OS-a ソフトローム粒、やや密
- II-3. 10Y R%暗褐、粒状、極粗
- III. 10Y R%暗褐、ソフトローム粒、やや密
- III-1. 10Y R%灰褐、ソフトローム粒微量、やや密
- III-2. 10Y R%黄褐、暗褐土混入

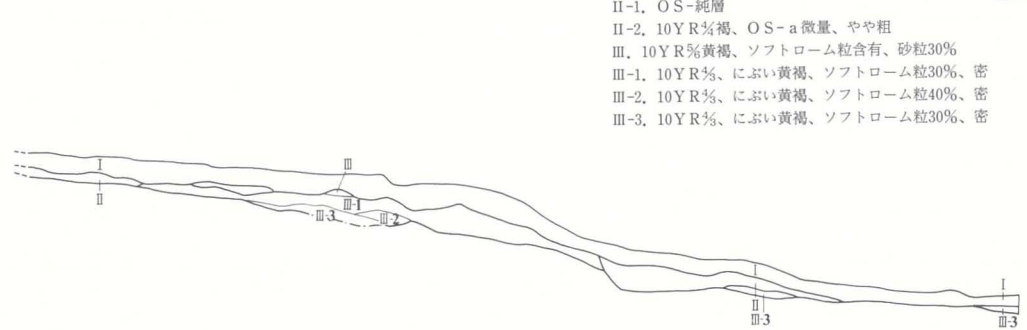
24G24
SPD 91.600m

24G19



24G14 | 24G9

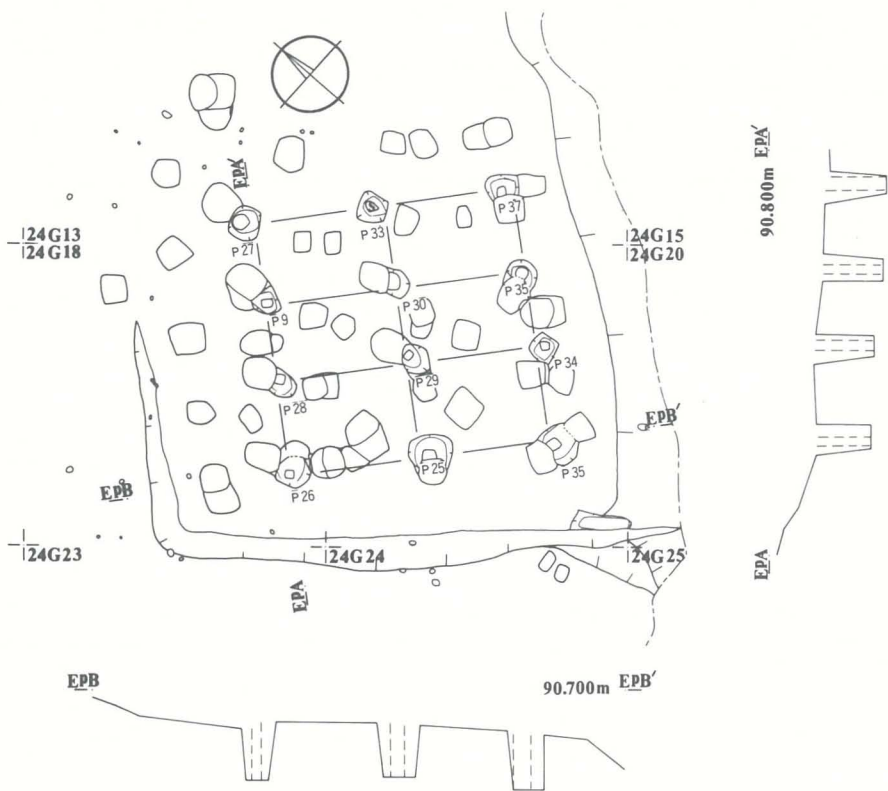
SPD



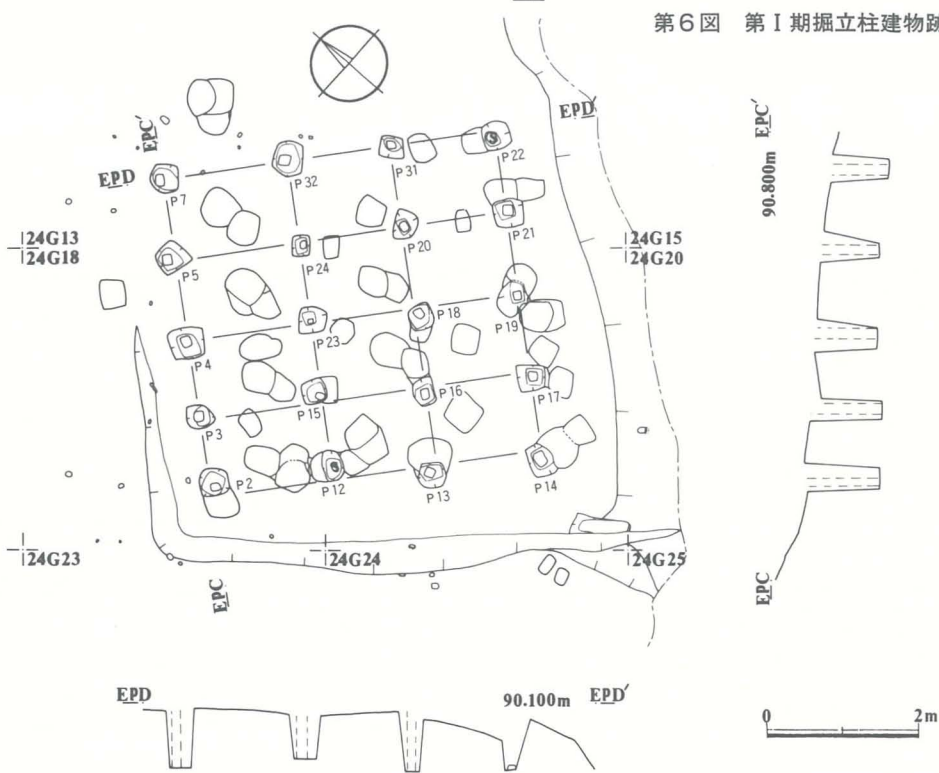
- I. 10Y R%暗褐、やや密
- II. 10Y R%暗褐、やや密
- II-1. OS-純層
- II-2. 10Y R%灰褐、OS-a 微量、やや粗
- III. 10Y R%黄褐、ソフトローム粒含有、砂粒30%
- III-1. 10Y R%、にぶい黄褐、ソフトローム粒30%、密
- III-2. 10Y R%、にぶい黄褐、ソフトローム粒40%、密
- III-3. 10Y R%、にぶい黄褐、ソフトローム粒30%、密



第5図 第14号地割面セクション図



第6图 第I期掘立柱建物跡想定図



第7图 第II期掘立柱建物跡想定図

された。14号地割面段にあたる。また24G 9区にもⅢ-1層を掘りこみ面とする地割段が確認された。17号地割面段にあたる。14号地割面は図によると24G 19区～14区にありその推積状況は24G 19区の南側の高い方を削平して北側24G 14区に盛土をして平坦面をつくりだしている。

(3) 検出遺構

a. 段 宮の沢側台地肩より北西方向へ7 m程伸び北東方向へ屈曲し3 m程伸びて削減してしまう。北西方向は最大幅40cm、標高差約20cm、北東方向は最大幅35cm、標高差約20cmである。北西方向宮の沢台地肩部分には長軸80cm、短期20cm、深さ10cm程の長方形の溝がある。段内小柱穴は北西方向に1つ南東方向に4つ不規則に認められるのみである。

b. 掘立柱建物跡 (第6図、7図)

第1期掘立柱建物跡 梁行2間×桁行3間の総柱の建物で梁行は11.4尺、桁行は11.2尺のほぼ方形を呈する。梁行柱間は西側～中央部はすべて5.7尺等間である。桁行柱間は北より3.5尺、3.5尺、4.2尺である。柱穴掘り方は方形、隅丸方形を呈する。その大きさは37.5cm～52cm×32cmで深さは55cm～81.6cm程である。柱痕跡は方形を呈する。その大きさは、11cm×10cm～20.5cm×22.5cmである。柱穴掘り方覆土、その深さ、柱痕跡覆土の状態は表2によると桁行方向に若干の規則性がみられる。柱穴掘り方覆土では東側宮の沢寄り(P37～P35)ではロームブロックが全く含まれないのに対し最も西側(P27～P26)では多量に含まれる。柱痕跡覆土では東側宮の沢寄りではO S-a純層等がありロームブロックが全く含まれていないのに対し西側では多量に含まれる。柱穴掘り方深さは東側宮の沢寄りでは70～76cmに比し西側は80cmと深い。これらのことより西側柱穴群は東側宮の沢寄り、中央部に比し深さをもつため、柱穴掘り方にロームブロックを混入することにより根固めを行なったと考えられる。

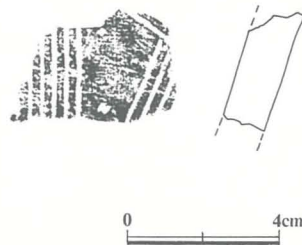
第II期掘立柱建物跡 梁行4間×桁行3間の総柱の建物で梁行14尺、桁行14.7尺である。梁行柱間は3.5尺等間、桁行柱間は東側宮の沢寄りより4.6尺、4.6尺、5.5尺である。柱穴掘り方は方形、隅丸方形である。その大きさは27.5cm×23cm～45.2cm×33.5cmで深さは61.2cm～99.2cmである。柱痕跡は方形である。その大きさは6cm×7cm～

19.5cm×15cm程である。柱穴掘り方覆土、深さ、柱痕跡覆土、太さに規則性は見られない。

尚P12、P13、P14、P17、P21柱痕跡に木質部が残存し空洞化しているものもあった。全体の構造としては東西桁行西側柱間が他の柱間4.6尺に対して5.5尺と広くやや異なる構造であると考えられ庇等の可能性もある。尚号1期、第II期掘立柱建物跡に使用されなかった柱穴には深さ26～27cmで柱痕跡のないものがある。これらのものうち建物跡と重複関係にあるものはこちらが古い。その他柱穴掘り方も深く柱痕跡もしっかりしている柱穴がありもう1時期建物跡の存在が考えられたが明確になし得なかった。

(4) 出土遺物 (第8図、P L10)

P L10の5は肥前系伊万里の皿で見込みには二条の圏線が巡りその外側には唐草文が描かれる。外面は高台裏まで施釉される。高台裏には1条の圏線が巡る。釉調は6 Y O、8.5の1 S青みの白である。P L10の1は染付碗である。文様は不明。P L10の3～5は美濃灰釉の端反り皿である。釉調は8 Y、7.5の3 Sにぶい黄である。肥前系伊万里の皿はI層よりの出土であり、17世紀～18世紀中葉である。その他は16世紀前葉～中葉である。



第8図 出土遺物

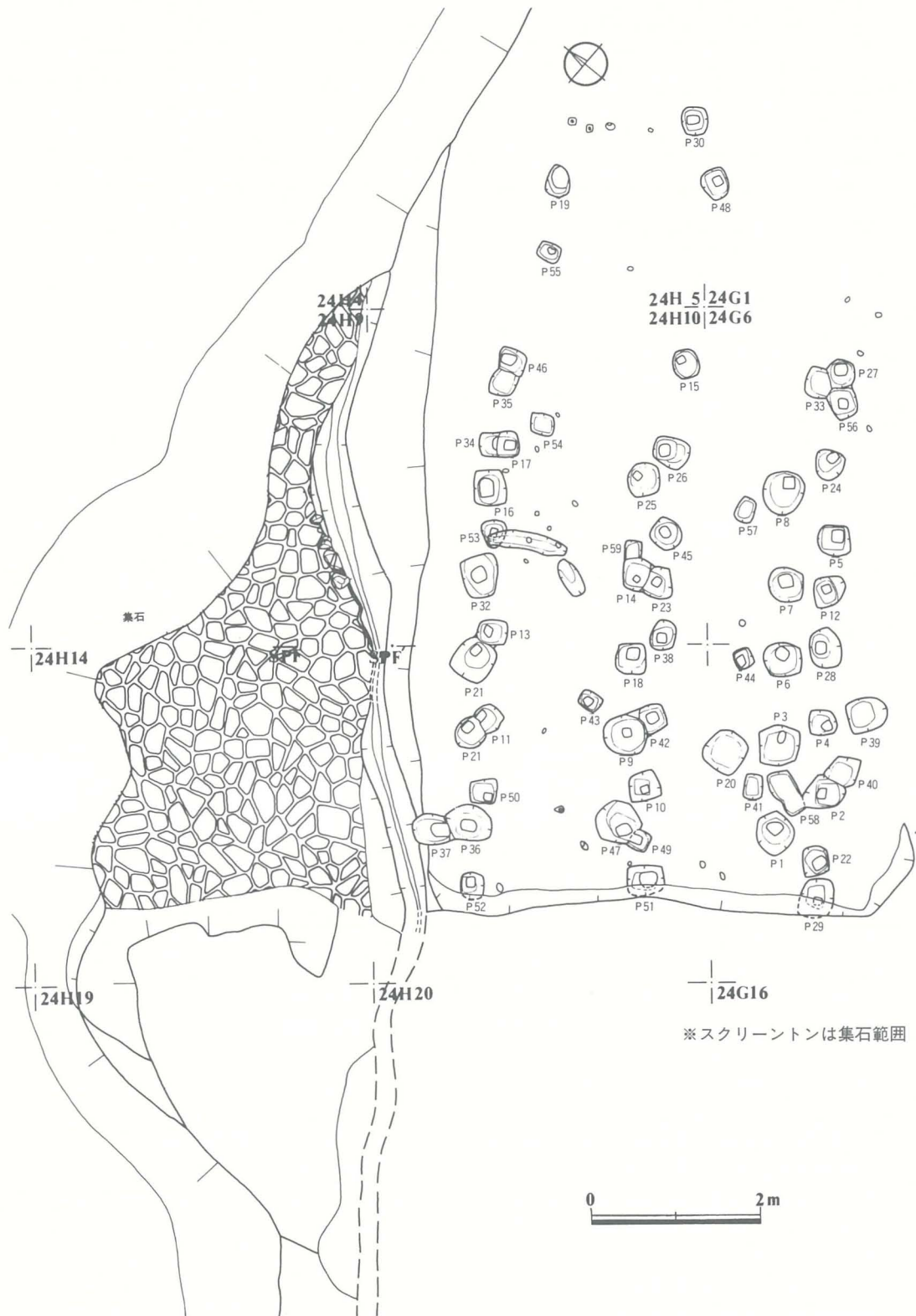
3. 15号地割面

(1) 位置、概要

24G 6、11、16区、24H10、15区標高89.2m～89.9mの緩斜面に位置する。地割面の規模は短軸5.2m、長軸9.5m、面積49.4m²である。段により区画された建物跡が2棟検出された。

(2) 層序 (第10図)

地割段と土塁の関係を把握することを目的とした。地割段は24G 11区南側でV層を掘り込み面として確認された。尚当地区にⅢ層の推積は見られない。土塁はⅡ層上に盛土をし作られているもので地割段覆土Ⅱ-1層の上にⅡ層が推積している

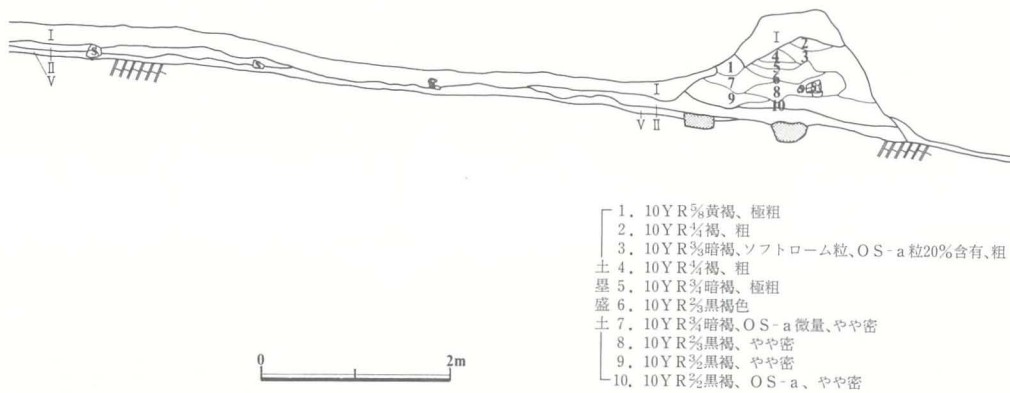


第9図 第15号地割面遺構平面図

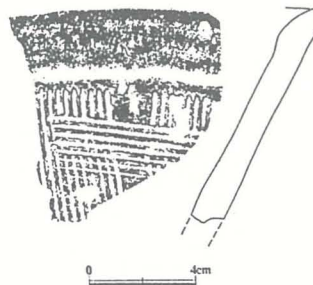
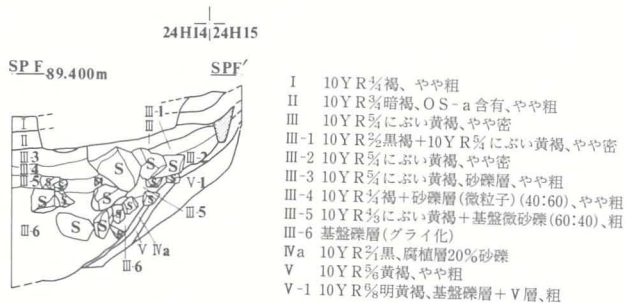


24G6|24G1

SPE



第10図 第15号地割面南北セクション図



第11図 集石セクション図・出土遺物



第12図 第I期掘立柱建物跡想定図



第13図 第II期掘立柱建物跡想定図

ことより土層は地割段よりはるかに新しい時期である。

集石及びそのセクションについて（第11図）

集石は15号地割面西部第9図上スクリーンゾーン部分、標高90.2m～88.6mの緩斜面に位置する。規模は短軸3m、長軸7mで南北に長軸をもつ。セクションは15号地割面西側の溝、及び集石の地割面との時期関係の把握を目的とした。図によると溝はⅢ層掘りこみ、集石はⅢ層内に推積しており、両者とも地割面とはほぼ同時期の所産であると考えられる。

(3)遺構

a. 段溝華の沢側台地肩より南東方向へ5.3m程伸び北東方向へ屈曲し1.2m程伸びて消滅してしまう。南東方向は最大幅20cm、標高差12cm、北東方向は最大幅25cm、標高差15cm程である。また地割段西側はほぼ南から北へ伸びる溝がある。最大幅45cm、長さ7.5m程で沢へ落ち消滅してしまう。

b) 掘立柱建物跡（第12図、第13図）

第1期掘立柱建物跡 梁行2間×桁行4間の総柱の建物で梁行は13尺、桁行は13.4尺である。梁行柱間は6.5尺等間、桁行柱間は北より3.2尺、4.2尺、3.2尺、2.8尺である。柱穴掘り方は方形、隅丸方形を呈する。その大きさは28cm×21cm～49.5cm×40cmで深さは36.2cm～72.7cmである。柱痕跡は方形である。その大きさは8.5cm×8.7cm～18.5cm×21.5cmである。柱穴掘り方覆土は殆んどにロームブロックが混入していた。深さにも特に規則性は見られない。全体の構造としては建物跡の南北両側に柱が3.5尺程離れて3本、北は5本並んでいる。南はP29、P51、P52、北はP27、P56、P15、P35、P46である。柱筋はそれぞれ通っているが柱間が建物跡内と異なること。南北とも3.5尺で規則的な事等より建物跡を構成する柱穴ではなく塀のような建物跡に附属する施設と考えられる。尚南側P29、P51、P52は地割段よりも古い時期のものである。

第Ⅱ期掘立柱建物跡 梁行2間×桁行4間の総柱の建物で梁行は12尺、桁行は13.8尺である。梁行柱間は6尺等間、桁行柱間は北より4尺、3尺、3.8尺である。柱穴掘り方は方形、不整形を呈する。その大きさは38.5cm×34cm～52.5cm×48.2cmである。柱痕跡は方形である。その大きさは7.8cm×7.8cm～16.5cm×16.8cmである。柱穴掘り方

覆土は殆んどの柱穴にロームブロックが混入している。その深さは特に規則性は見られない。柱痕跡覆土についても規則性はない。また建物跡北側にP48、P55、P19、P30、その他小ピットがある。これらは建物跡の附属施設と考えられるがⅠ期、Ⅱ期どちらに属するか不明である。尚前述にもあるように第Ⅰ期掘立柱建物跡柱穴のP29、P51、P52は地割段よりも古いため地割段はⅡ期の掘立柱建物跡に附属するものである。その他建物跡に使用されていないピットはその殆んどは深さが5cm～12cmと浅く柱痕も確認されなかった。これらのうち建物跡柱穴と切り合い関係にあるもの（P33、P59）はいずれもそれぞれⅠ期、Ⅱ期の建物跡柱穴に切られている。その用途は不明である。

出土遺物（第15図、第14図1、PL11）

第11図は越前系の播鉢で集石箇所よりの出土である。表面の色調は4rO5.5の1Sブラウンみのグレイである。最大口径が最頂部と一致し口唇断面形は鋭角をなし内削ぎ気味である。口縁下1cmの所に太い段が廻る。播し目は9条以上1単位で1.5cmの間隔で施されている。また口縁下のところで7条1単位の横走する御し目が重合している。第14図1は越前系の播鉢で表面の色調は6YO、6.5の3Sベージュである。最大口径が最頂部と一致し口唇断面形は鋭角をなし内削ぎ気味となる。口縁下6mm程の所に6mm程の凹線が廻る。播し目は8条1単位で3cm間隔で施されている。これらの播鉢は勝山館Ⅲ群に属するものである。PL11の1は白磁の端反り皿である。釉調は6YO、8.5の1S、ブラウンみの白である。勝山館Ⅱ群かⅢ群に属するものである。これらの年代は播鉢は16世紀中葉～後葉、白磁皿は16世紀前葉～中葉に属するものである。

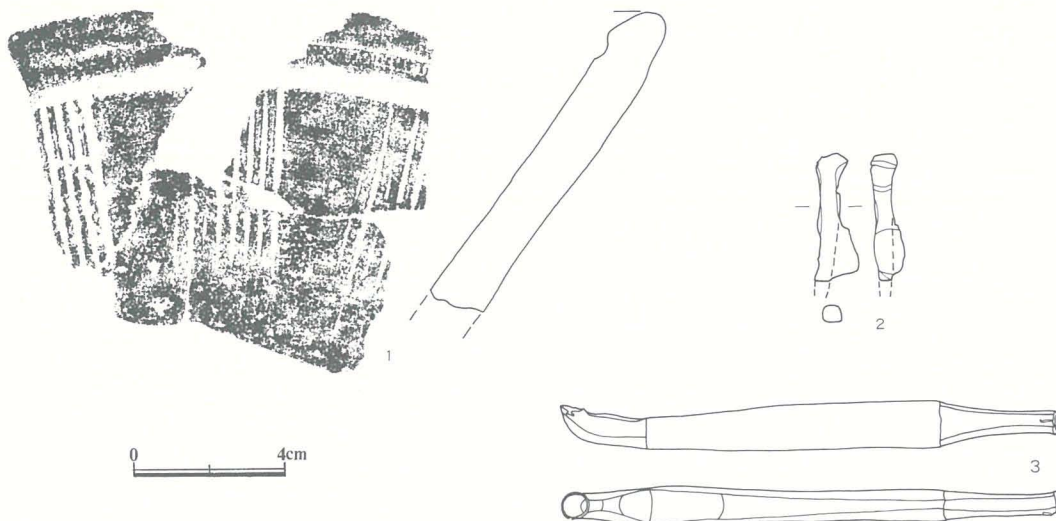
4. 16号地割面

(1) 位置、概要

15号地割面側に隣接する。24G6、7、11、12区、標高89.1m～89.9mの緩斜面に位置する。地割面の規模は短軸5.2m、長軸6.5m、面積は33.8㎡である。段により区画された建物跡が2棟検出された。

(2) 遺構

a. 段、15号地割面に隣接して南東方面へ5.2m伸び北東方向へ屈曲し2.4m伸びて消滅してしまう。南東方向は最大幅20cm、標高差7cm、北東



第14図 出土遺物

方向は最大幅10cm、標高差5cmである。

b. 掘立柱建物跡 (第16図、17図)

第Ⅰ期掘立柱建物跡 梁行2間×桁行4間の総柱の建物で梁行は10尺～10.4、桁行は13尺である。梁行柱は5尺～5.2尺等間、桁行柱間は北から3尺、3尺、3尺、4尺である。柱穴掘り方は方形、不整形を呈する。その大きさは31.5cm×28cm～43cm×41.5cmである。柱痕跡は方形である。その大きさは3.6cm×7cm～16.5cm×17.5cmである。柱穴掘り方覆土は表3によると桁行中央部分P37～P30にロームブロックが混入している。全体としては10YR 8/1にぶい黄褐～10YR 8/2黄褐を呈する。その深さは特に規則性はみられない。柱痕跡覆土にも特に規則性がみとめられない。尚P14は空洞化している。

第Ⅱ期掘立柱建物跡 梁行2間×桁行3間の総柱の建物で梁行は11尺、桁行は15尺である。梁行柱間は5.5尺等間、桁行柱間は北より5.7尺、5.7尺、3.6尺である。尚桁行中央部北側2間は中間にも柱を建てる。柱穴掘り方は方形、隅丸方形を呈する。その大きさは27cm×29.5cm～39.5cm×39.5cmである。柱痕跡は方形である。その大きさは9cm×9.5cm～15cm×13.5cmである。柱穴掘り方覆土は表3によると梁行方向南側P19、P38、P36にはすべてロームブロックが入る。また桁行方向中央部分P38～P15にもその始んどにロームブロックが入る。柱痕跡覆土には特に規則性は見

られない。尚P22は空洞化している。また14号地割面、15面で確認された深さ20cm～30cm程のピットが9基確認された。いずれも柱痕跡をもたないものである。尚建設物跡柱穴と重複しているものではいずれも建物跡柱穴に切られている。また地割段は当時期の建物跡に附属する。

(3) 出土遺物 (第14図2、PL12) PL12の1は白磁の端反皿である。釉調は6Y O、8.5の1Sブラウンみの白である。勝山館Ⅱ群かⅢ群に属するものである。年代は16世紀前葉～中葉である。第14図2は2寸釘である。

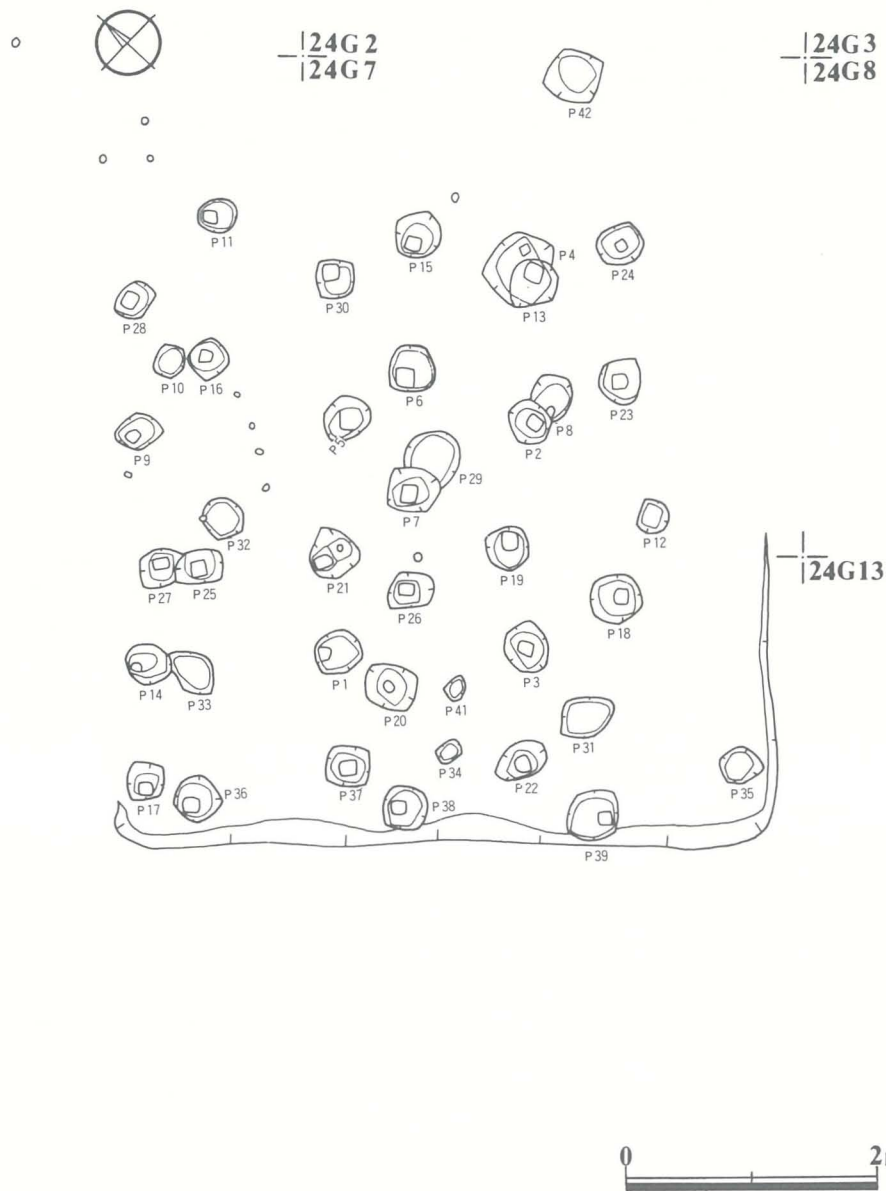
5. 17号地割面

(1) 位置、概要

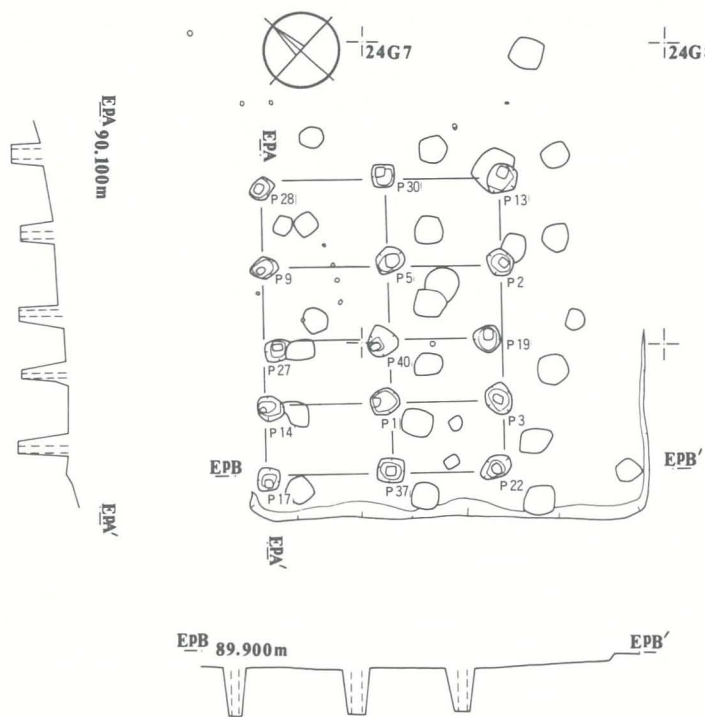
14号地割面より3m程北東側にある。24G3・4・8・9区、標高88.4m～89.4mの緩斜面に位置する。地割面の規模は短軸6m、面積は28.2m²である。段により区画された建物跡が1棟検出された。

(2) 遺構

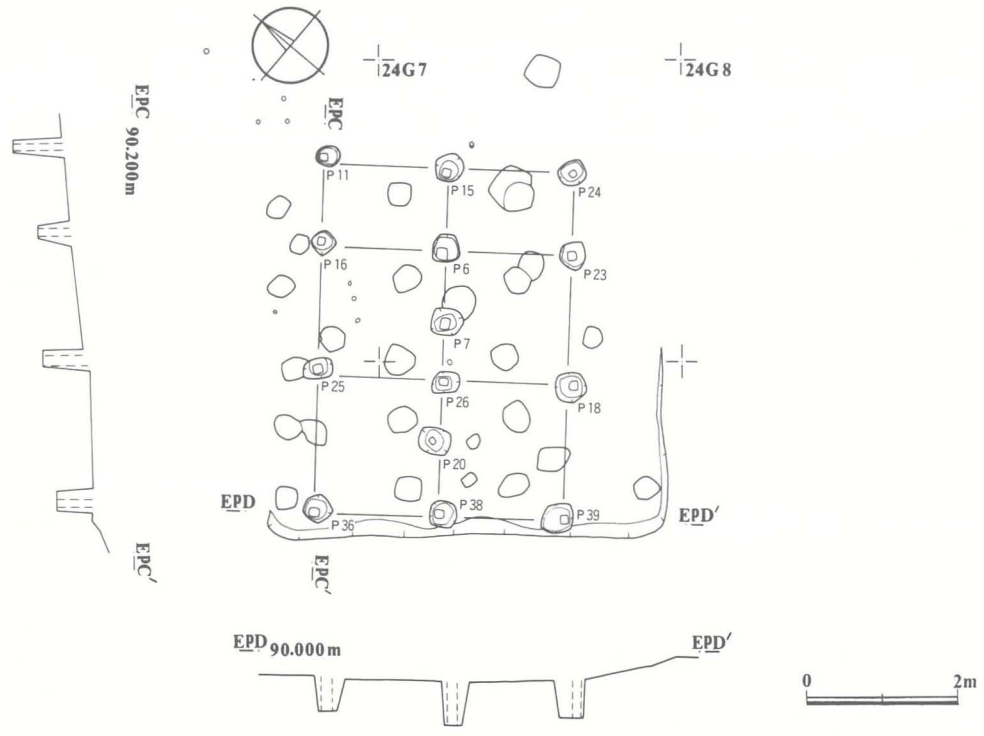
a. 段、溝 北西方向へ4.7m程伸び屈曲して北東方向へ70cm程伸びて消滅してしまう。北西方向は最大幅20cm、標高差17cm、北東方向は最大幅6cm、標高差5cmである。第5図セクション図によるとⅢ-1層を掘り込み面としている。溝は段の北東隅にあり、幅50cm、長さ110cm、深さ11cm程である。宮の沢側の先端はなくそのまま沢へ落ちる形となる。水抜き溝と考えられる。



第15図 第16号地割面遺構平面図



第16图 第I期掘立柱建物跡想定図



第17图 第II期掘立柱建物跡想定図

b. 掘立柱建物跡（第19図）

梁行2間×桁行4間の総柱の建物で梁行は10尺、桁行は10.9～11.1尺である。梁行柱間は5尺等間、桁行は2.3尺～3.5尺とばらつく。尚P21、P23、P18、P15、P19等は梁行方向の柱通りは悪いが桁行方向はよく通るので同一の建物に使用されたと考えられる。しかし前述の柱穴を除くと桁行方向は北より5尺～5.2尺、5.9尺となる。柱穴掘り方は方形、隅丸方形。大きさは表4では27.5cm×31.5cm～43.5cm×38.5cmである。深さは5.2cm～77cmである。柱痕跡は方形。その大きさは6.5cm×6.5cm～17cm×15cmである。柱穴掘り方覆土は全体としてロームブロックやO S—a等が混入するようである。その深さには特に桁行方向、梁行方向とも規則性は見られない。柱痕跡覆土にも規則性は見られない。他地割面に比し柱穴掘り方の深さ、柱痕跡の大きさはかなりばらつきがある。

(3) 出土遺物（第14図3、P L13）

第14図3は煙管である。P L13の2は梁付の皿である。内面見込みには玉取獅子が描かれる。釉調は6 Y O、8.5の1 S 青みの白である。畳付きは若干面取りされ勝山館Ⅱ群に近いがその文様構成は勝山館Ⅲ群Aのものである。Ⅱ群とⅢ群の中間形態かと思われる。P L13の3は美濃灰釉皿である。何群に属するか不明。尚染付皿は16世紀前葉～中葉の年代に属するものである。

6. 18号地割面

(1) 位置、概要

16号地割面北東部にあり土塁と重複している。23G21、22区、24G1、2区標高89.1m～88mの緩斜面に位置する。地割段の規模は短軸6m、長軸7m、面積42㎡である。段により区画された建物跡が3棟検出された。

(2) 層序（第24図）

建物跡内柱穴と土塁に附属する石列の時期関係の把握を目的とした。図上P44は第1、Ⅱ期掘立柱建物跡内柱穴でありその上面にある礫が石列の一部となる。P44はⅢ層掘り込みであり、礫はⅢ層にくいこんでおりⅢ層上面に堆積する。このことより明らかに石列は柱穴より新しい時期である。

(3) 遺構

b 段 北西方向へ6m程伸び左右の端は北東

方向へ屈曲する。左端は1m、右端は1.5m程伸び徐々に細くなり消滅してしまう。北西方向は最大幅30cm、標高差13cm、北東方向左端は最大幅16cm、標高差5cm、右端は最大幅8cm、標高差8cmである。

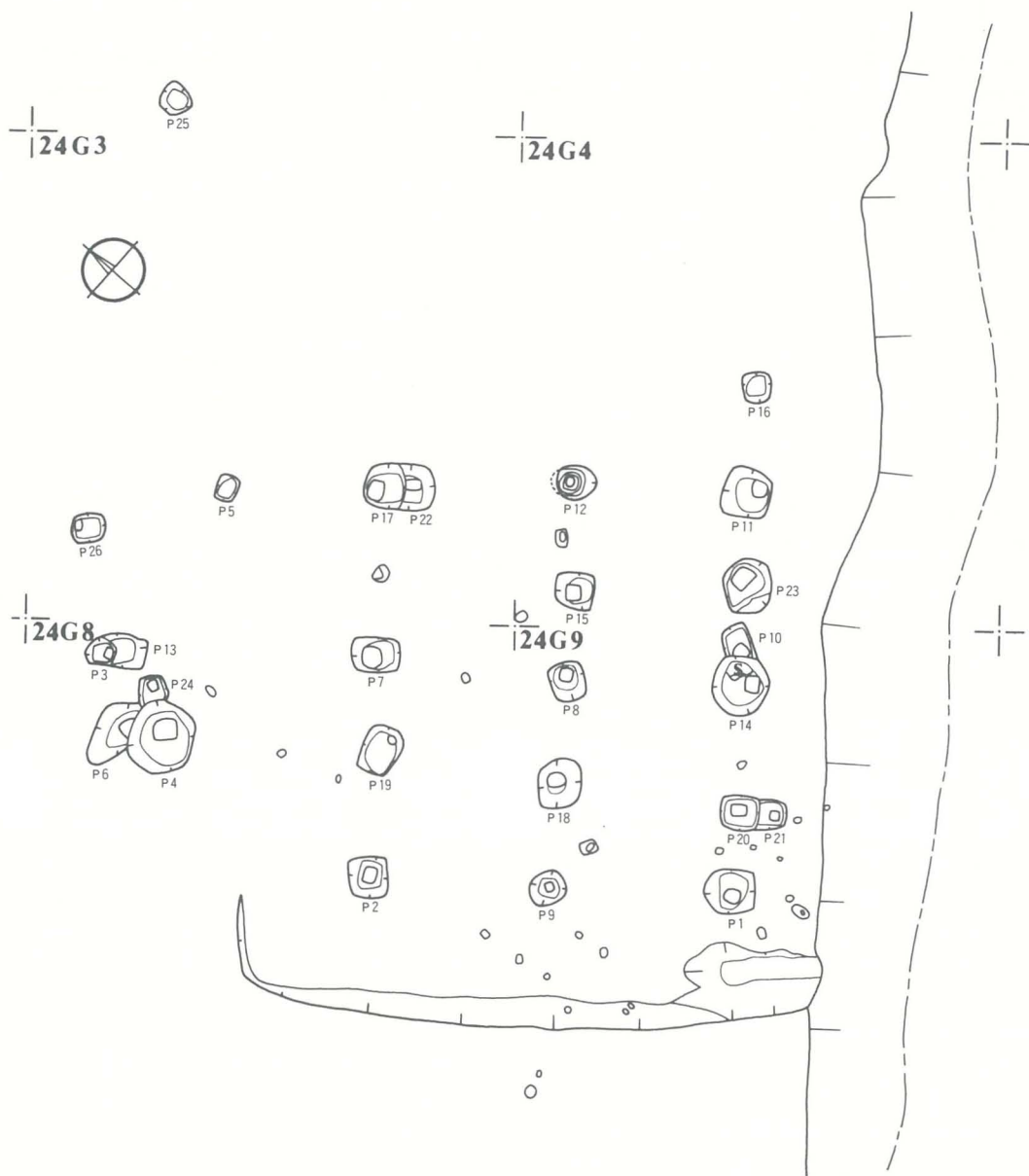
b 掘立柱建物跡

第Ⅰ、Ⅱ期掘立柱建物跡（第21図、第22図）

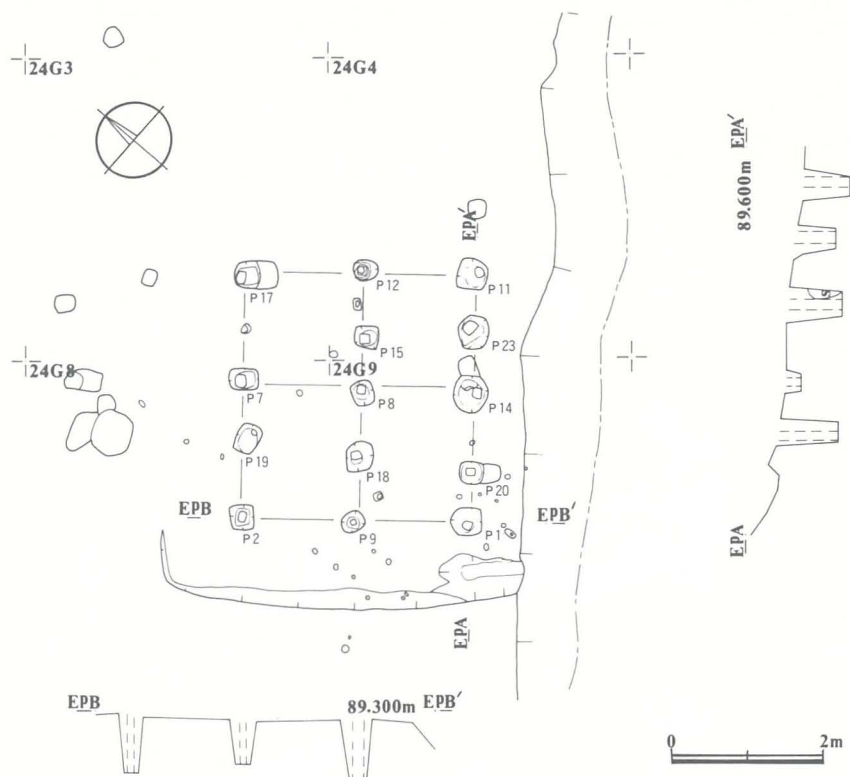
第21図は梁行2間×桁行4間の総柱でない建物跡である。梁行は10.4尺、桁行は18.7尺である。梁行柱間は5.2尺等間、桁行柱間は北より4.5尺、4.5尺、5.2尺、4.5尺である。桁行中央部分P44、P1の建物内内側にP27とP50の柱穴が使用される。それぞれ深さは24cm、11.3cmと浅い。全体としてはややいびつな形状の建物である。柱穴掘り方は方形、隅丸方形を呈する。その大きさは表5によると14cm×22.5cm～43.5cm×32cmである。深さは11.3cm～63.5cmである。柱痕跡は方形である。その大きさは9.5cm×9.5cm～13.5cm×13cmである。柱穴掘り方覆土は梁行方向、桁行方向とも規則性は見られない。第22図は梁行2間×桁行2間の総柱の建物跡である。梁行は10.7尺、桁行は11尺である。梁行柱間は北側より5.2尺、5.5尺、桁行柱間は西より5尺、6尺である。全体としてかなりいびつな形状を呈する。柱穴掘り方は方形、隅丸方形、不整形を呈する。その大きさは32cm×35.5cm～49.5cm×63.5cmである。深さは50cm～79.3cmである。柱穴掘り方覆土には特に規則性はない。尚P33は焼土の下面、P37は炭化物の下面にあり、焼土、炭化物はこの時期の建物跡よりも新しい時期のものである。これら2軒の建物跡はそれぞれの建物跡に使用された柱穴どうしが重複関係になく、その新旧関係は不明である。

第Ⅲ期掘立柱建物跡（第23図）

梁行2間×桁行3間の総柱でない建物跡である。梁行は10尺、桁行は16.2尺である。梁行柱間は5尺等間、桁行柱間は4.8尺、5.7尺、5.7尺である。全体としてややいびつな形状を呈する。第21図建物跡と梁行、桁行方向がほぼ同じ角度である。柱穴掘り方は方形、隅丸方形を呈する。その大きさは表5によると23cm×26.5cm～43cm×51cmである。深さは22.9cm～68cmとかなりばらつく。柱穴掘り方覆土は特に規則性は見られない。深さは桁行方向に規則性が見られる。南側は50cm台なのに対し、北側は30cm台と極めて浅い。



第18图 第17号地剖面遺構平面図



第19図 掘立柱建物跡想定図

c. 焼土 (第25図)

24G 2区内にあり長軸67cm、短軸28cmの不整形を呈する、第I、II期建物跡柱穴P33と切り合っており焼土の方が新しい。その覆土堆積状況より計3回の使用が考えられる。すなわち図土覆土7 (以下図上覆土を省略する) で1回、6の間層が入り、その後4、5で1回1、2、3で1回計3回である。フローテーションを行なった結果サンプルの総量は30.716kgに対し砂鉄60.65g、磁着成分292.3g、磁着する粒径3mm程の石36.8g、木炭19g、魚骨 0.1g、くるみ0.05g、ガラス0.15g、漆器皮膜0.05gである。

d. 炭化物 (第26図)

23G 21区にある。長軸1.5m、短軸70cm程の不整形である。深さは5~8cmと浅い。壁面立ち上がりは極めてゆるやかである。フローテーションを行なった結果サンプル総量34.861kgに対し砂鉄22g、磁着成分81.45g、磁着する石89.7g、木炭57.35g、骨0.2g、種子0.1g、木製品0.5gである。尚P37、P38のI、II期、III期の建物跡柱

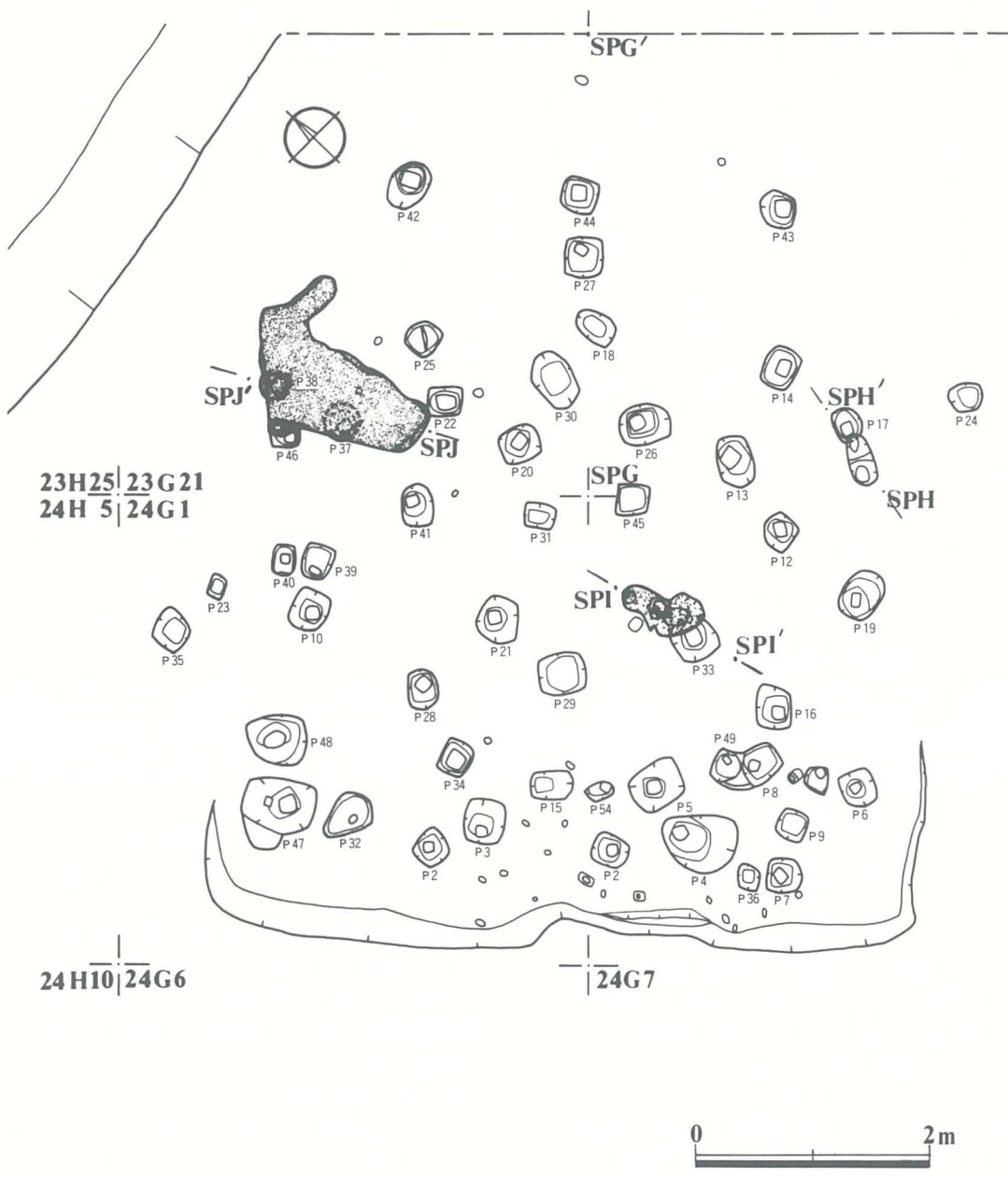
穴よりも上面に堆積していることより、地割段に附属する建物跡の時期より新しい時代のものである。

e. ロームブロック (第25図)

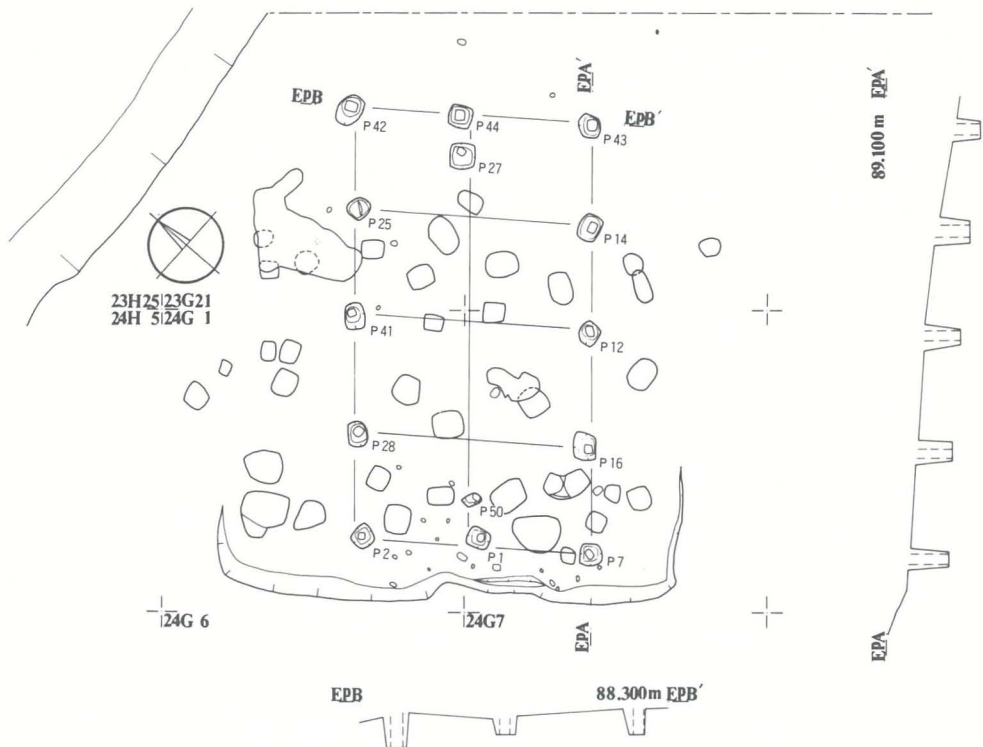
23G 22区内にあり長軸42cm、短軸20cmである。その覆土は全体として極めて密であり、炭化物等は一切含有されない。フローテーションを行なった結果総量3.867kgに対し砂鉄9.65g、磁着成分10.1g、磁着する石149.5g、木炭0.15g、0.01gである。尚P17と重複関係にある。P17は第III期建物跡柱穴であるので地割段に附属する建物跡の時期より新しい時代のものである。

出土遺物 (第27図、P L14)

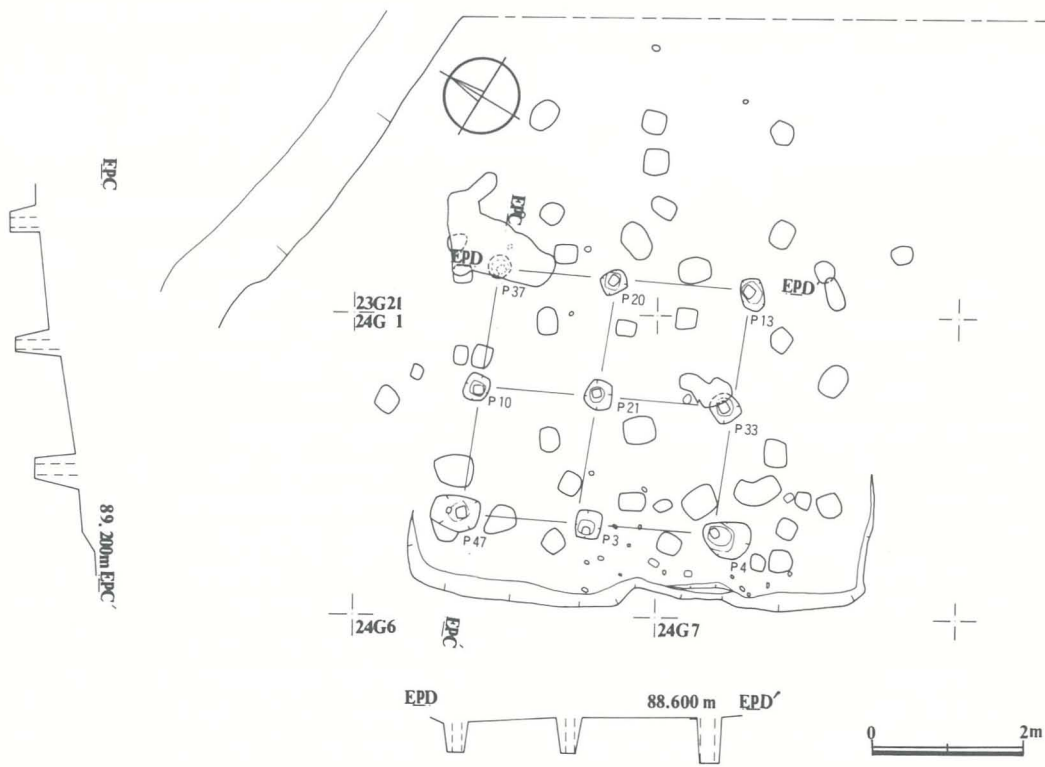
第27図は越前系播鉢である。表面の色調は6Y O、6.5の3Sページェである。最大口径部が最頂部と一致し断面形が鋭角をなし内削ぎ気味である。口縁直下に凹線が巡る。播し目は9条1単位で2cm程の間隔で施される。播し目は見込み付近まで延びるようである。また上部は播し目は凹線の上まで行かない。勝山館III群に属する。尚断面



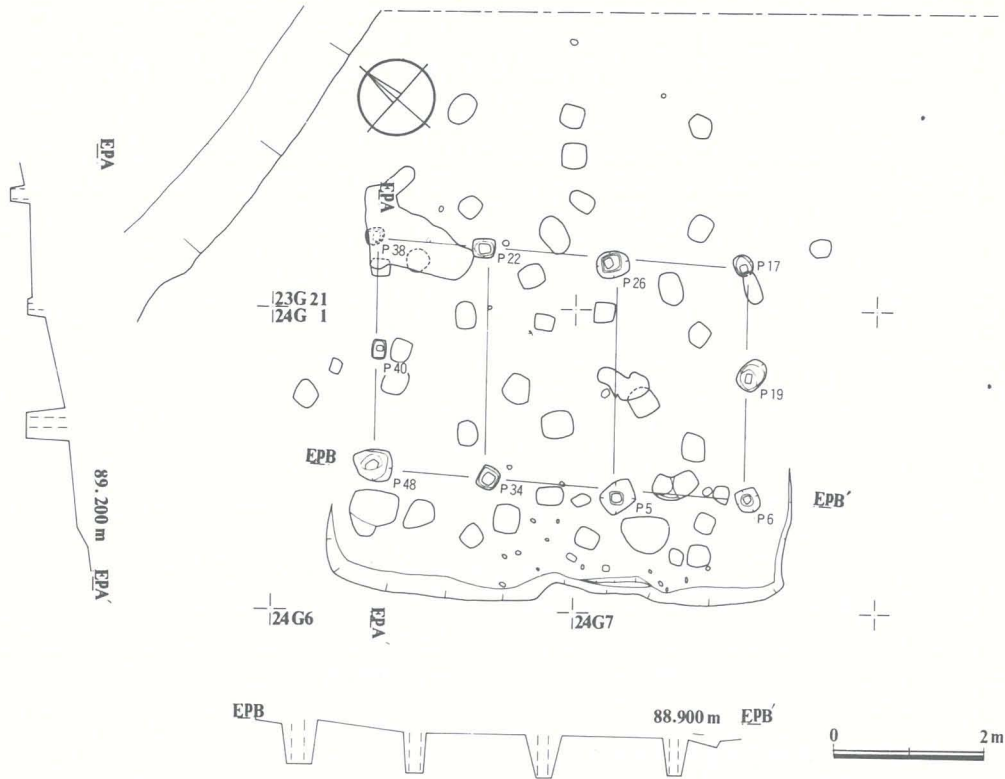
第20図 第18号地剖面遺構平面図



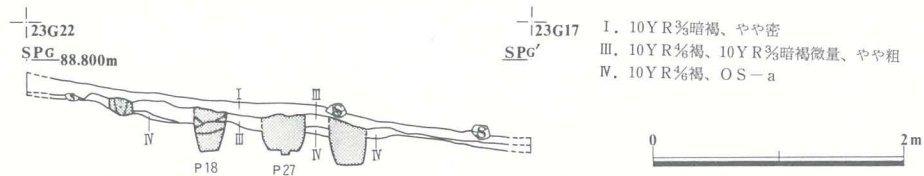
第21図 第I・II期掘立柱建物跡想定図



第22図 第I・II期掘立柱建物跡想定図



第23図 第Ⅲ期掘立柱建物跡想定図



第24図 セクション図

形は体部付近で急に外開き気味となる。P L14の1は染付の基筒底の皿で、釉は4 r O、8.5の3 S うすい緑みのスカイである。見込みには魚文が描かれその周囲には水草が描かれる。立ち上がり付近には二条の圈線が廻る。勝山館Ⅳ群に属する。P L14の2、3は染付の碗で同一個体と思われる。釉調は8 Y、7.5の3 S グレイみの黄である。小破片のためその文様構成は不明であり何群に属するか不明。擂鉢は16世紀中葉～後葉、染付（P L14の1）は16世紀前葉～中葉の年代に属するものである。

7. 19地割面

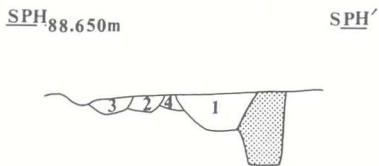
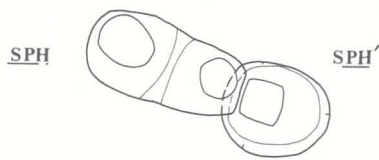
(1) 位置・概要

17号地割面の北東部にある。23G18、19、23、

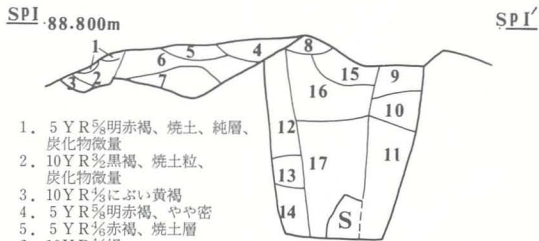
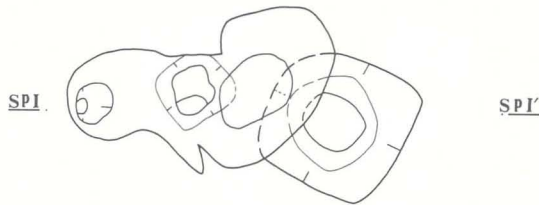
24区、24G3、4区、標高87.5～88.3mの緩斜面に位置する。地割面の規模は短軸5.8m、長軸7m、面積40.6m²である。段により区画された建物跡が2棟検出された。

(2) セクション（第31図）

P20、P36、P37は第Ⅰ期掘立柱建物跡の柱穴、P25、P26は第Ⅱ期掘立柱建物跡の柱穴である。それぞれの覆土の違いを把握することを目的とした。それによると第Ⅰ期建物跡の柱穴は第Ⅱ期建物跡の柱穴に比し掘り方覆土はロームブロックの混入が少なく小礫の混入が多くやや堅致な傾向をもつ。色調は第Ⅰ期建物跡柱穴が10Y R 5/6黄褐色～10Y R 4/6褐色に比し第Ⅱ期建物跡柱穴は10Y R 4/4褐～3/3暗褐と暗くやや湿性を帯びている。



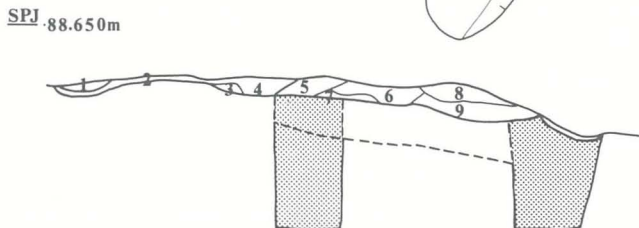
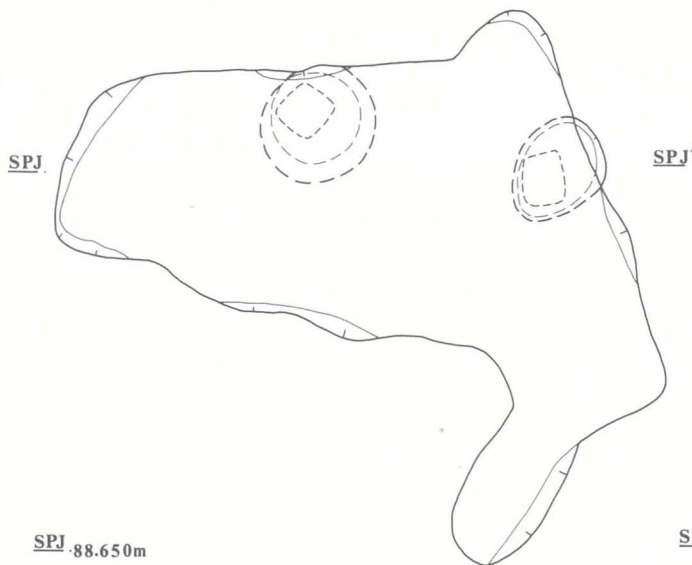
1. 10Y R%にふい黄褐+10Y R%にふい黄褐、ハードロームブロック、きわめて密、堅致
2. 10Y R%にふい黄橙、きわめて密、堅致
3. 10Y R%にふい黄褐、やや密
4. 10Y R%にふい黄橙、きわめて密



1. 5 Y R%明赤褐、焼土、純層、炭化物微量
2. 10 Y R%黒褐、焼土粒、炭化物微量
3. 10 Y R%にふい黄褐
4. 5 Y R%明赤褐、やや密
5. 5 Y R%赤褐、焼土層
6. 10 Y R%褐
7. 焼土層
8. 10 Y R%褐、やや粗
9. 10 Y R%黄褐(ソフトロームブロック)+10 Y R%褐 OS-a微量(50:50)
10. 10 Y R%暗褐、やや密
11. 10 Y R%黄褐、OS-a、やや密
12. 10 Y R%褐+10 Y R%黄褐(ソフトロームブロック)(99:1)
13. 10 Y R%暗褐、やや密
14. 10 Y R%黄褐、OS-a、やや密
15. 10 Y R%褐+10 Y R%黄褐、ソフトロームブロック、OS-a微量、やや密
16. 10 Y R%暗褐、OS-a 10%、やや密
17. 10 Y R%暗褐+10 Y R%黄褐、ソフトロームブロック

0 40cm

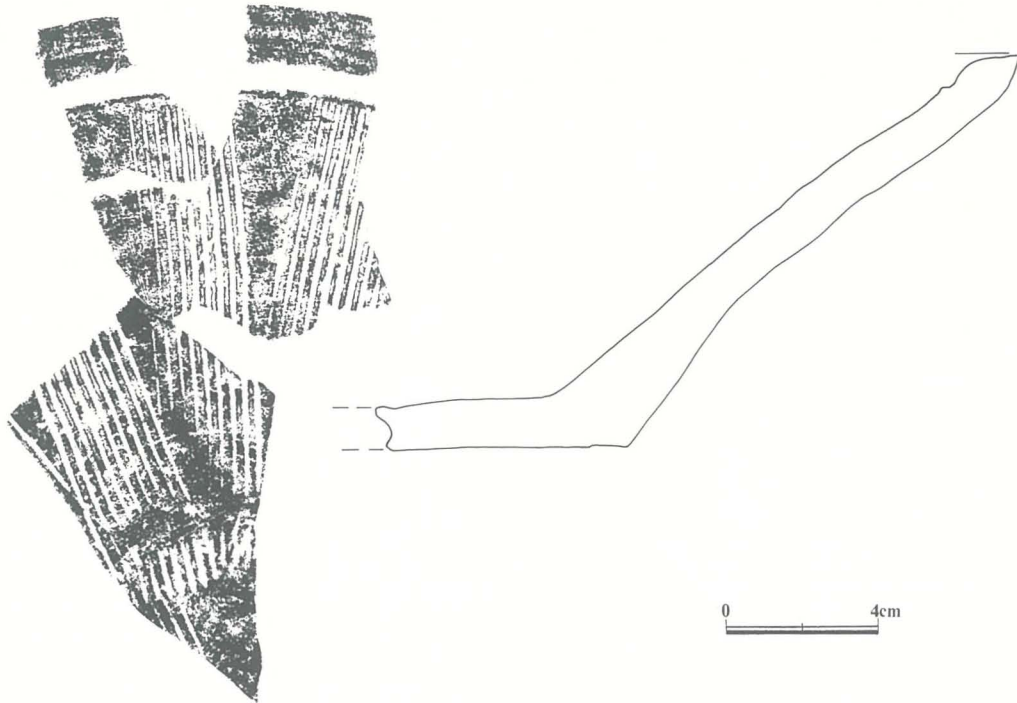
第25図 焼土・ロームブロック平面・断面図



1. 10 Y R%黒褐、炭化物、粗
2. 10 Y R%暗褐+10 Y R%褐(50:50)
3. 10 Y R%黒褐、粒状、やや粗
4. 10 Y R%暗褐+10 Y R%褐(50:50)
5. 10 Y R 1.7/1黒+10 Y R%褐、やや粗
6. 10 Y R%黒褐、やや密
7. 10 Y R%暗褐、やや密
8. 10 Y R暗褐+10 Y R%褐(80:20)
9. 10 Y R 1.7/1黒+10 Y R%にふい黄褐、にふいソフトロームブロック含有(90:10)、やや粗

0 40cm

第26図 炭化物積平面・断面図



第27図 出土遺物

(3) 遺構

a、段、溝 宮の沢側台地肩より北西方向へ5m程伸び屈曲して北東方向へ1.5m程伸び消滅する。北西方向は最大幅50cm、標高差34cm、北東方向は最大幅40cm、標高差16cm。溝は段北東隅にある。長軸2.6m、短軸2m深さ5cm程で宮の沢へ落ちる。水抜き溝と推される。P8とP38の間の溝は旧地割段の痕跡の可能性が高い。

第Ⅰ期掘立柱建物跡 (第30図)

梁行2間×桁行4間の総柱の建物跡である。梁行は10.8尺、桁行は13.8尺で第Ⅱ期建物跡と同じである。梁行柱間は5.4尺等間、桁行柱間は3.4尺～3.5尺等間である。柱穴掘り方は方形、隅丸方形を呈する。その大きさは表5によると35cm×31.5cm～42.5cm×40cmである。深さは32.4cm×76cmである。柱痕跡は方形である。その大きさは12cm×9.5cm～16.5cmである。柱穴掘り方覆土はロームブロックの含有は少なくOS-aの含有が多い。その深さは桁行方向に若干の規則性がみられる。それは中央部分P34～P9が東西西側に比し浅いことである。柱痕跡覆土はすべての柱穴を観察していないためその傾向、規則性は不明である。

る。

第Ⅱ期掘立柱建物跡 (第29図)

梁行2間×桁行4間の総柱の建物跡である。梁行は13尺、桁行は13.8尺である。梁行柱間は6.5尺等間、桁行柱間は3.4尺～3.5尺等間である。梁行、桁行方向とも柱筋はよく通る。柱穴掘り方は方形、隅丸方形、不整形円形を呈する。その大きさは表5によると29cm×34.5cm～43cm×55cmである。深さは43.8cm～85.1cmである。柱痕跡は方形である。その大きさは12.5cm×8cm～19cm×18cmである。柱穴掘り方覆土は全体としてロームブロックを全く含まないためあまり堅致ではない。その深さは桁行方向に若干の規則性が見られる。それは中央部分P27～P12が東西両側に比しやや浅いことである。柱痕跡覆土はすべての柱穴を観察していないためその傾向、規則性は不明である。

C、土壇 (32図)

23G19区、24区境界にある。長軸105cm、短軸102cm程の不整形円形を呈する。深さは32cm程で壁面の立ち上がりはやや急である。その覆土は短期間の堆積と考えられる。フローテーションを行なった結果サンプル総量71.128kgに対し砂鉄130.8

g、磁着成分221.1g、磁着する小礫1039.6g、木炭1.7g、骨0.1g、種子0.2g、ガラス0.04g、鍛造剥片0.05g、フレーク、チップ0.03gである。尚図上P14、P33は第Ⅱ期建物跡の柱穴であり土壌はそれらより新しい時期のものである。

(3) 出土遺物 (第32図、PL16)

第32図は越前系播鉢である。表面の色調は6YO、6.5の3Sページュである。口唇は断面形が鋭角をなし内削ぎ気味となる。口縁下に凹線が入る。勝山館Ⅲ群に属する。PL16の1は青磁の稜花皿である。釉調は12G、7.5の3Sあかるいグレイみの緑である。内面口縁下には3条1単位の劃線が廻る。勝山館Ⅰ群Cに属する。PL16の2は美濃灰釉の皿である。小破片のため詳細は不明。播鉢は16世紀中葉～後葉、青磁は15世紀末～16世紀中葉の年代に属するものである。

8. 20地割面

(1) 位置概要

16号地割面の南西部、調査区南端24G16、17区に位置する。Ⅲ層上面まで掘り下げ、柱穴確認作業及び柱穴覆土の表面観察のみを行なった。尚地割段はもっと南側の調査区外にあると考えられ、その規模等是不明である。

(2) 遺構 (第33図)

掘立柱建物跡 東西は6.6尺等間、南北は3.6尺等間の総柱建物跡でありその続きは南へ伸びるようである。東西、南北とも柱通りはよい。またP10、P7、P20、P17、P6で構成する総柱の建物跡がもう一軒あるらしい。

(3) 出土遺物 (第35図1、2、PL18の5・10)

第35図1は火鉢に用いるアケ掃きである。Ⅰ層よりの出土であり、新しい時期のものである。2は2寸釘である。PL18の5は染付の蓮子碗である。釉調は4YO、8.5の3Sうすい緑みのスカイである。外面には梵字文が描かれる。勝山館Ⅲ群に属する。PL18の10は染付の基筒底の皿である。釉調は4YO、8.5の3Sうすい緑みのスカイである。見込みには花鳥文が描かれる。勝山館Ⅳ群に属する。これらの染付は16世紀前葉～中葉の年代に属するものである。

9. 21号地割面

(1) 位置・概要

15号地割面の南西部24H19、20区に位置する。Ⅲ層上面まで掘り下げ柱穴確認作業、及び柱穴覆

土の表面観察のみ行なった。尚地割段はもっと南側の調査区外にあると考えられ、その規模等是不明である。

(2) 遺構 (第33図)

掘立柱建物跡 柱通りが悪く不明である。

(3) 出土遺物 (第35図3、4第36図1、2PL18の1～4、7～9、11～16)

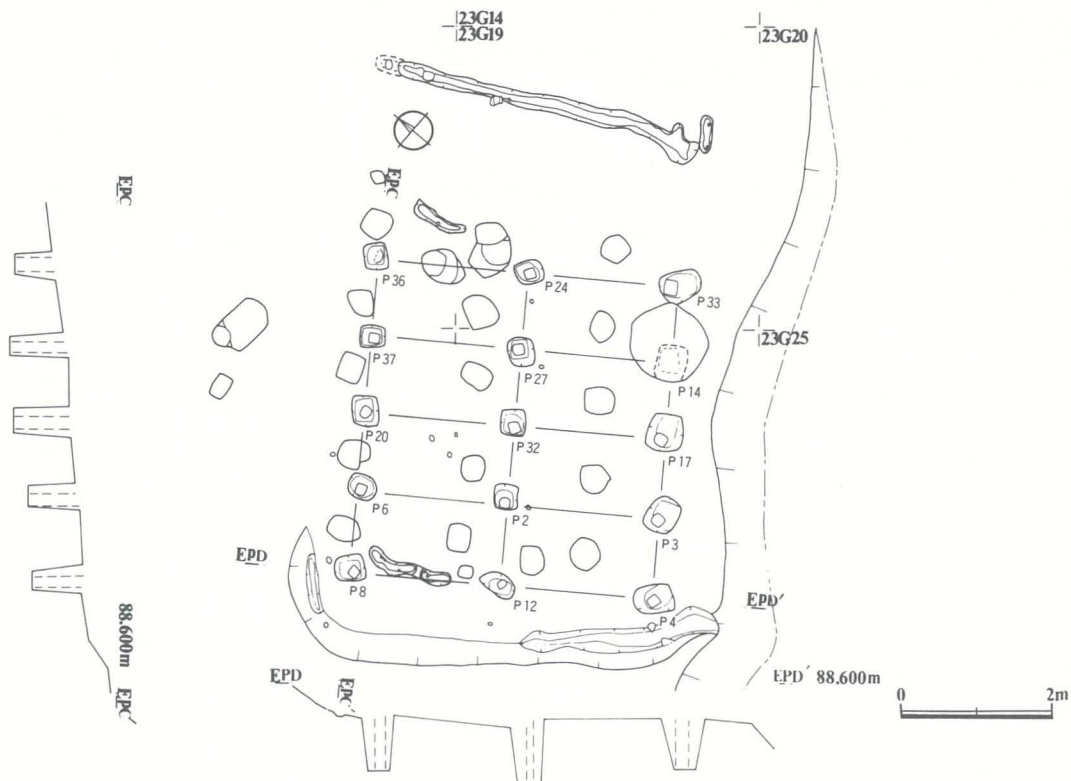
第35図3は美濃鉄釉碗で所謂天目茶碗と呼ばれているものである。釉調は12G、2.4の1Sくらい赤みのグレイである。削り出し輪高台で高台脇の削り幅は大きい。口唇は薄く作出され括れが殆んどなく直線的である。表面の高台よりやや上に鬼板が塗られる。勝山館Ⅰ群に属する。第35図4は越前系播鉢である。表面の色調は6YO、6.5の3Sページュ～6YO、6.5の1Sブラウンみのグレイである。口唇は断面形が鋭角をなし内削ぎ気味となる。内面口縁下は若干凹状に段がつく。播し目は10条1単位で3cm程の間隔をもつ。器高は8cm、直径35cmである。勝山館Ⅲ群に属する。尚第36図2は同一個体である。第36図1は越前系の播鉢である。表面の色調は6YO、6.5の1Sブラウンみのグレイである。口唇断面は鋭角をなし内削ぎ気味である。内面口縁下に7mm程の凹線が入る。播し目の間隔は2cm強である。PL18の1は染付の碗である。釉調は8Y、7.5の3Sグレイみの黄である。外面、内面口縁下に1条の圈線が廻る。小破片のためその詳細は不明である。PL18の12は美濃灰釉の端反り皿である。釉調は8Y、7.5の5Sにぶい黄である。透明感が極めて強い。勝山館Ⅱ群に属する。PL18の3は美濃灰釉の碗である。釉調は8Y、7.5の3Sグレイみの黄である。口縁直下に剣先蓮弁文を有する。勝山館Ⅲ群に属する。これらの示す年代は播鉢は16世紀中葉～後葉、美濃鉄釉碗は16世紀初頭、美濃灰釉碗、皿は16世紀前葉～中葉である。

表採品 (PL17)

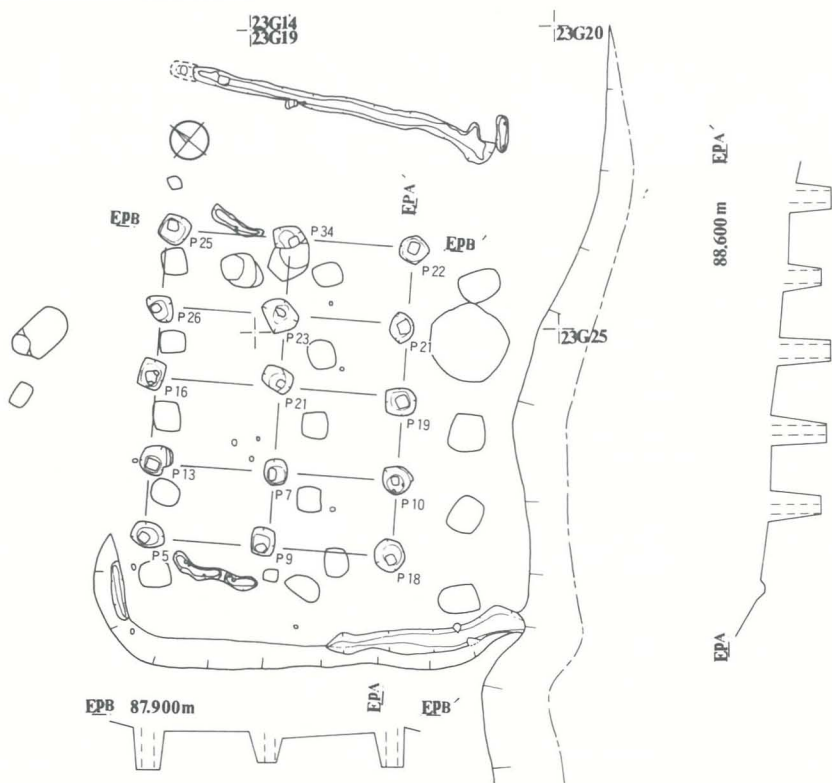
1は青磁の端反り碗である。釉調は10YG5.5の3Sグレイみのオリーブグリーンである。胎土は10YG6.5の0グレイである。勝山館Ⅰ群に属する。2は白磁の端反り皿である。釉調は白。勝山館Ⅱ群かⅢ群に属する。3は染付の皿である。釉調は8Y、7.5の3Sグレイみの黄である。口縁直下に蕉葉文を施す。何群に属するか不明。4は染付の碗か皿で内外面とも口縁に1条の圈線が



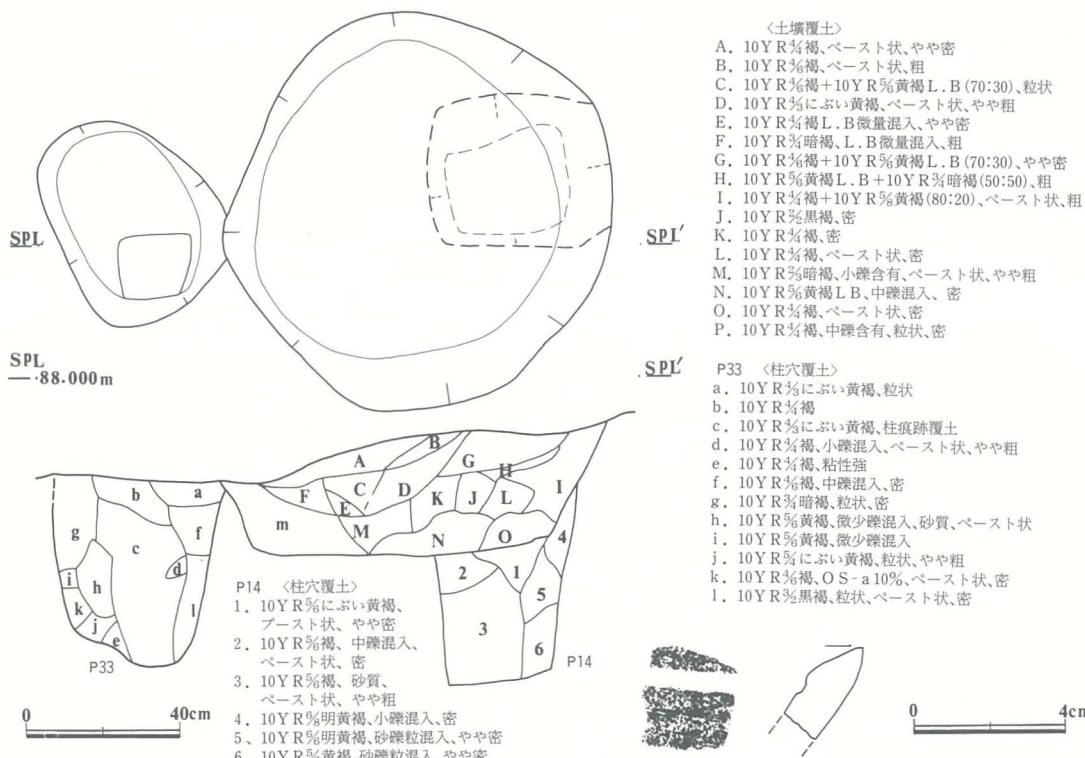
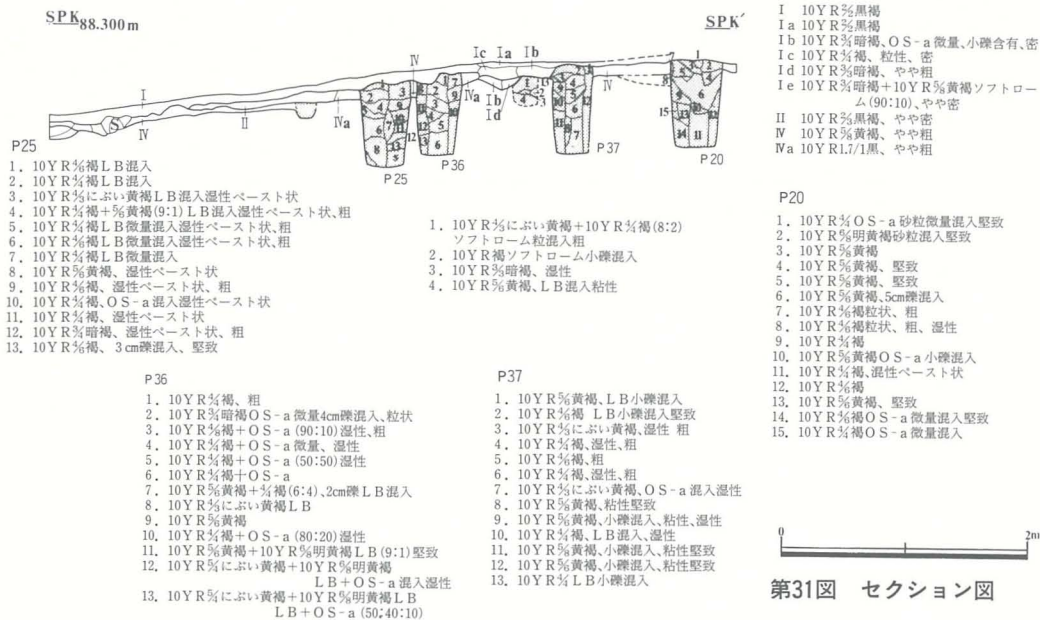
第28図 第19号地割面遺構平面図



第29图 第Ⅱ期掘立柱建物跡想定図

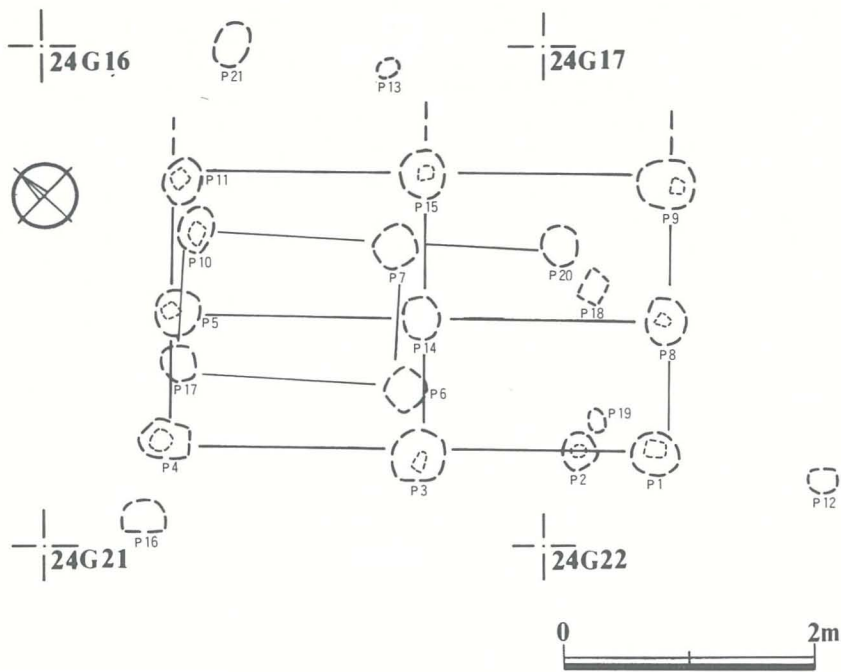


第30图 第Ⅰ期掘立柱建物跡想定図



廻る。釉調は白である。5は美濃灰釉の碗である。釉調は8Y、7.5の3Sグレイみの黄である。剣先蓮弁文が施される。勝山館III群に属する。6は美濃灰釉の端反り皿である。釉調は8Y、7.5の

3Sグレイみの黄である。勝山館II群に属する。7は美濃灰釉の皿である。釉調は10Y G 8.5の3Sうすい黄緑である。見込みには断面よりみると印花がある。これらの示す年代は青磁碗は15世紀



第33図 第20号地割面遺構平面図

後葉、白磁皿は16世紀中葉、染付は不明、美濃灰釉碗、皿は16世紀中葉である。その他に銭が3点出土している。いずれも判読不明。

小 括

(1) 建物跡

調査の結果地割段により区画された8つの地割面が確認された。そのうち6地割面の調査を行ない計12軒の掘立柱建物跡が確認された。そのうち総柱の建物跡は10軒を占め圧倒的に多い。その詳細は南北棟が9軒と多く、東西棟が1軒のみである。またその規模は2間×4間が7棟と多い。地割面積は昭和59年度調査区に比しかなり狭く10～49㎡程である。昭和59年度調査区では間仕切り炉等の施設を持つ居住空間と総柱の正方形に近い倉庫等の付属施設計2棟で1人が占有するとのことであったが今年度調査区ではその後者が大部分を占め、倉庫群が立ち並ぶ空間としてとらえることができる。

(2) その他の遺構

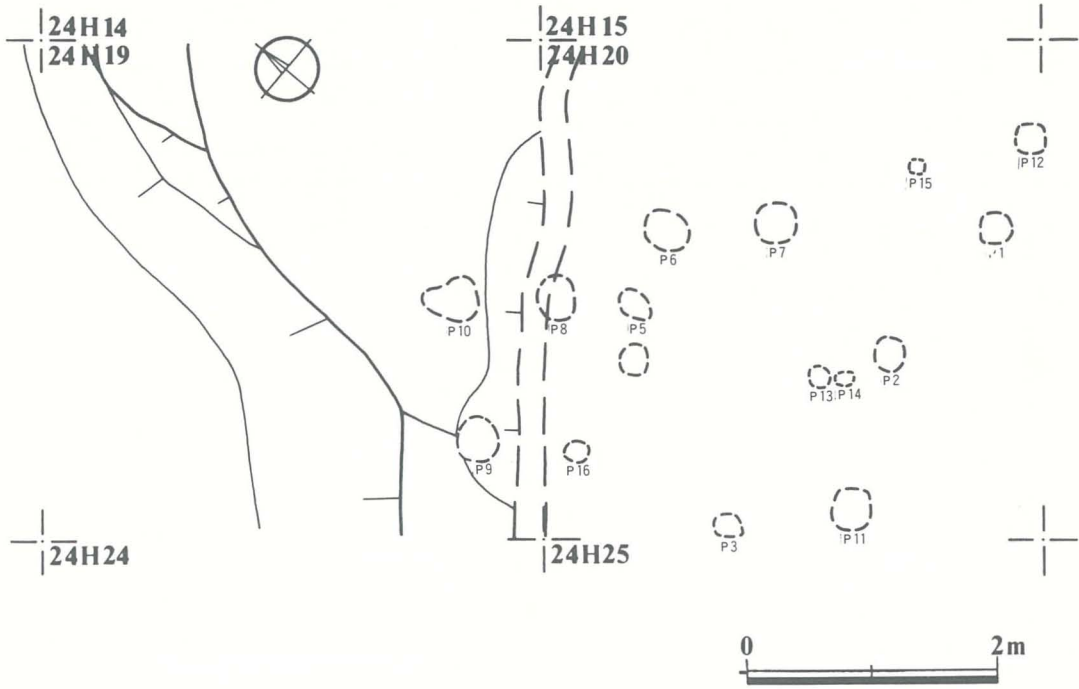
昭和59年度調査区では焼土等より鉄滓、鍛造剥片等が検出されたが今年度調査区では焼土よりそれらは見い出せなかった。また18号地割面の炭化物集積地区は建物跡柱穴との切り合い関係から見

て待屋敷跡地内建物跡廃絶後の新しい時代のものと考えられる。19号地割面土壌はその覆土より若干の鍛造剥片が見つかるが0.05gと極めて少量である。これらのことにより当地区では鍛冶を行なわなかった可能性が極めて強い。

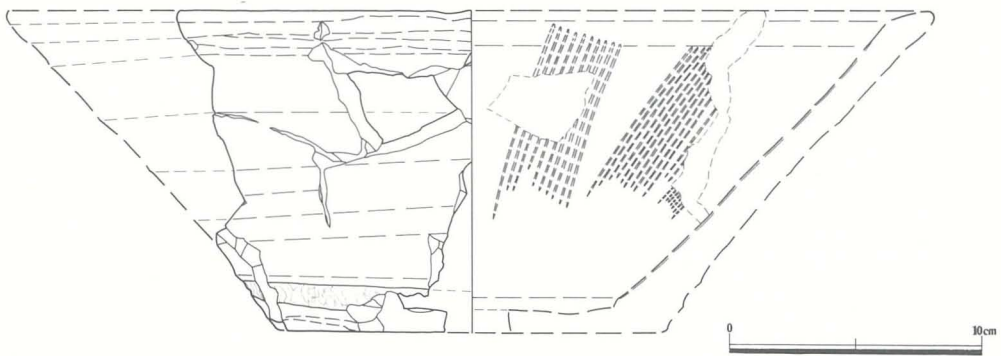
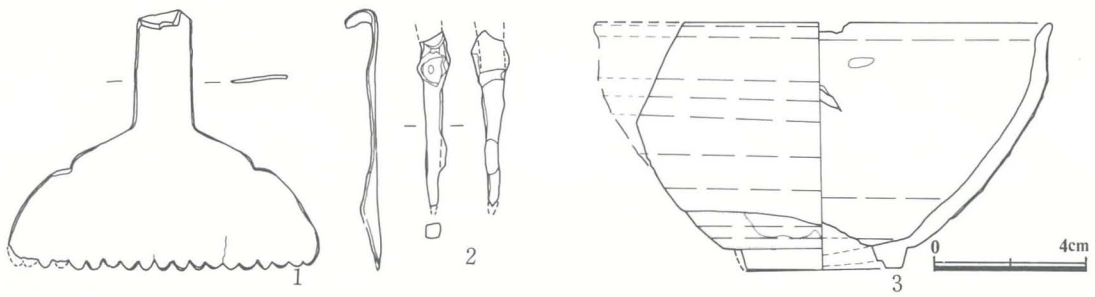
(3) 遺物

陶磁器の出土量は極めて少なく破片が圧倒的に多いその内訳は表1によると舶載品との国産品の比率は土塁、14号地割面の近世陶磁器を除くと1：1ではほぼ同じである。舶載品では青磁端反り碗、青磁稜花皿、白磁端反り皿、染付蓮子碗、染付基筒底皿、国産品では美濃鉄釉碗その他近世陶磁器が出土している。播鉢はすべて勝山館Ⅲ群の口唇が内削ぎ気味のものである。これらの陶磁器の示す年代は一部古いものもあるがその主体は16世紀前葉～後葉と考えられる。(斎藤)

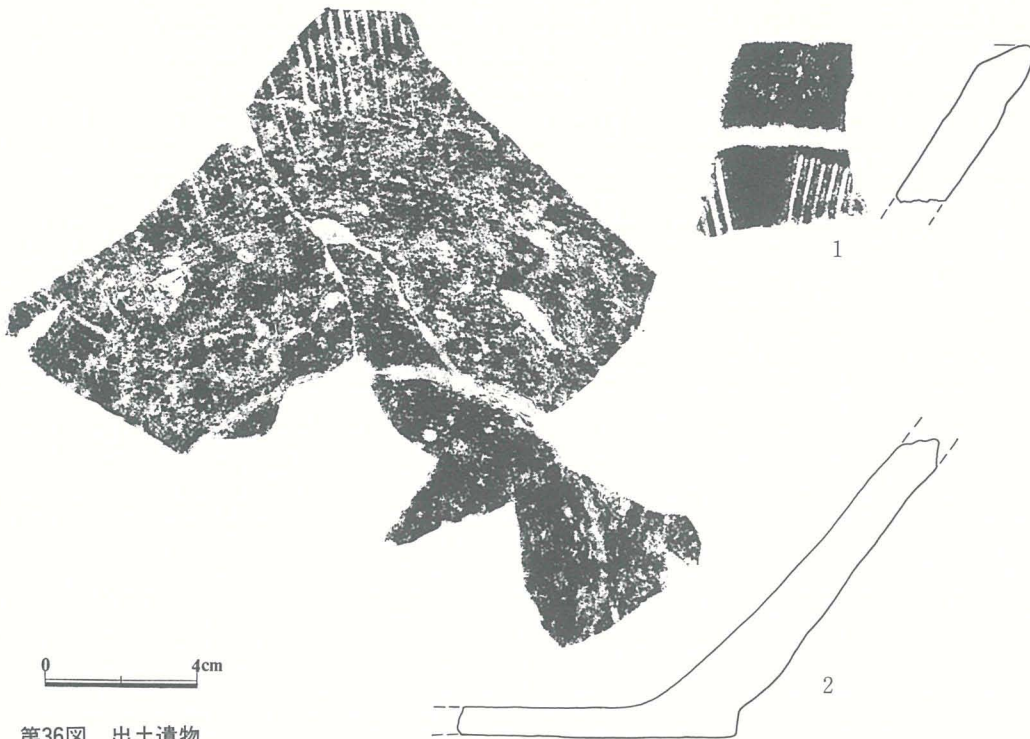
- 註 1 九州陶磁文化館 大橋康二氏に実見して頂き御教示を得た。尚14～21号地割面出土陶磁器も実見して頂き御教示を得た。
 2 土塁関係の遺構、14～19号地割面の建物跡の時期、規模等は鈴木亘先生に御教示を賜った。誤りは筆者の責である。



第34图 第21号地剖面遺構平面図



第35图 出土遺物



第36図 出土遺物

2. 地形測量

(1) 位置、目的 (附図2)

今年度調査区より北側の侍屋敷跡地内未調査区を行なった。未調査部分の地形による遺構の把握をし次年度以降調査の指針とするためである。全体は南北に伸びる通路、段、通路東側の窪地、宮の沢地内平坦部、最北端の小高い丘部分よりなる。

(2) 遺構

a. 通路 (図上A) 今年度調査区北端の台地中央部よりそのまま約75m北進し二股に分かれる1つは弧を描きながら華の沢へ落ち1つは宮の沢地内平坦部へ進み、弧を描きながらその箇所を通り抜け南東斜面を駆け上がる。前者は斜面の人工的な削除等も見当らず踏みつけ道のようなものである。後者は斜面の高い方を削り平坦面を作出する。

b. 段 (図上B) 3つの段が確認された。1つは本年度調査区北端より20mの所である。東西幅9m、標高差60cm程である。段は大きめの礫で根固めがなされている。2つ目はさらに2m北側に位置する。北側に張り出すように弧を描く。東西幅9m、標高差20cm程である。いずれの段も南

側には平坦部が作られている。3つ目は平坦な窪地に至る前の段である。北西から南東へ弧を描く東西幅約10m、標高差180cm程である。

c. 窪地 (図上C) 東西幅5m、南北幅22m、標高差1m程である。当地東側の肩に幅1m、長さ15m、標高差30cm程の土塁が巡る。この土塁を横断する形で台地肩から宮の沢地内平坦部へ至る通路が斜面上で2カ所確認された。当箇所西側を通る通路上の間には3つの窪みが確認された。

d. 宮の沢地内平坦部 (図上D) 東西最大幅7m、南北15m程の不整形三角形状である。中央部分には通路が走る。尚宮の沢川へ降りる通路が2本あり、沢の対面にはそれに続く通路が確認された。

(3) 小括

宮の沢へ降りる通路は沢を狭んで対面の旧道跡との関連を想定させ、また段・窪地には建物跡の存在が考えられる。宮の沢地内平坦部は通路の分岐点となっておりひんばんな往来が考えられる。いずれにしても侍屋敷跡地内既調査区とは様相を異にしており、侍屋敷跡地内の入口と考えられ門等の新たな遺構の出現が期待される。(斎藤)

表1 出土陶磁器集計表

器種	産地 種別	船					国										合 計					
		青磁	白磁	染付	赤絵	朝鮮	小計	美濃			肥前系	関西系	小計	碗・ 皿計	越前	珠洲		美濃	唐津	信楽	瓦質 陶器	小計
								灰釉	鉄釉	呉須絵												
14号 地割 面	碗			1			1						1								1	
	皿							2			1	3	3								3	
	掃鉢													1						1	1	
	その他																					
	計																				5	
15号 地割 面	碗																					
	皿		1				1						1								1	
	掃鉢													3						3	3	
	その他																					
	計																				4	
16号 地割 面	碗																					
	皿		1				1						1								1	
	掃鉢																					
	その他																					
	計																				1	
17号 地割 面	碗																					
	皿			1			1	1				1	2								2	
	掃鉢																					
	その他																					
	計																				2	
18号 地割 面	碗			2			2						2								2	
	皿			1			1						1								1	
	掃鉢													6						6	6	
	その他																					
	計																				9	
19号 地割 面	碗																					
	皿	1					1	1				1	2								2	
	掃鉢													2							2	
	その他																					
	計																				4	
20号 地割 面	碗			2			2						2								2	
	皿			1			1						1								1	
	掃鉢													1						1	1	
	その他																					
	計																				4	
21号 地割 面	碗			1			1	6	1			7	8								8	
	皿								1			1	1								1	
	掃鉢													4						4	4	
	その他																					
	計																				13	
土 器	碗									1	1		2	2							2	
	皿														2						2	
	掃鉢																			2	2	
	その他										1	1	1								1(袋物)	
	計																				5	
包 含 解	碗	1		1			2	1				1	3								3	
	皿		1	1			2	2				2	4								4	
	掃鉢																					
	その他																					
	計																				7	
	計	2	3	11			16	11	4	1	2	1	19	35	19						19	54

表2 柱穴観察表

PitNo	地区	掘り方	掘り方			柱痕跡	覆土	柱痕跡	備考		
			大きさ	深さ	標高					大きさ	
1	24G18	7.5YR4褐, OS-a微量	38.0×38.5	99.9	90.352	—	—	9.5×10.3	2より新	Ⅱ期	
2	24G18	10YR3暗褐, LB40%	30.5×42.5	26.1	90.303	—	—	—	1より古	—	
3	24G18	10YR4にふい黄褐, OS-a10%	31.0×37.5	93.0	90.269	OS-a純層	—	14.1×12.2	—	Ⅱ期	
4	24G18	10YR4褐, LB5%	41.9×46.0	81.7	90.212	—	—	16.0×13.5	—	Ⅱ期	
5	24G18	10YR4灰黄褐, OS-a7%	36.2×40.8	77.3	90.125	—	—	14.5×13.5	—	Ⅱ期	
6	24G13	10YR3暗褐, LB2%	46.5×50.0	81.8	90.052	—	—	16.5×14.0	27より古	—	
7	24G13	10YR4にふい黄褐, ローム質, 密	47.0×46.2	78.9	90.024	10YR3暗褐, 粗	—	15.5×12.5	—	Ⅱ期	
8	24G18	10YR4にふい黄褐, やや密	36.2×32.5	15.4	90.219	—	—	—	—	—	
9	24G18	10YR3暗褐, OS-a1%, LB7%	33.1×32.5	83.3	90.132	—	—	11.0×14.5	10より古44より新	Ⅰ期	
10	24G18	10YR4褐, LB7%	48.5×41.5	75.2	90.064	—	—	12.0×11.8	9より44より新	—	
11	24G13	10YR4褐, LB15%	41.2×35.8	84.3	89.879	—	—	16.5×14.5	58より61より新	—	
12	24G18	10YR4にふい黄褐, LB, 掘方外周に有	36.5×27.5	76.3	90.260	OS-a純層, 木質部残存	—	—	65より新	Ⅱ期	
13	24G19	10YR4にふい黄褐, LB20%, 密	34.5×35.8	88.7	90.230	空洞化, 木質部残存	—	13.5×13.5	25より新	Ⅱ期	
14	24G19	10YR4にふい黄褐, LB15%, OS-aブロック	45.2×33.5	89.9	90.202	10YR3暗褐, 粗, 空洞化がなくなってから木質部残存	—	19.5×15.5	35より52より新	Ⅱ期	
15	24G18	10YR3暗褐, OS-a, やや粗	31.3×32.4	81.0	90.217	—	—	11.5×9.0	63より新	Ⅱ期	
16	24G19	10YR4にふい黄褐, LB質, OS-a微量	37.5×27.5	81.1	90.205	10YR3暗褐, 粗, 木質部残存+火山灰純層(少々)	—	15.0×10.5	29より43より新	Ⅱ期	
17	24G19	10YR4にふい黄褐, LB25%, やや密	35.0×41.8	91.2	90.129	10YR3暗褐, 粗, 柱痕下部OS-a空洞化, 木質部残存	—	14.0×12.4	34より62より新	Ⅱ期	
18	24G19	10YR4褐, LB2%, やや粗	34.0×31.5	66.2	90.054	—	—	14.5×12.0	54より新	Ⅱ期	
19	24G19	10YR4にふい黄褐, 中礫30%, 密	33.5×42.0	82.3	90.110	YR3暗褐, 粗, 下部OS-a純層	—	12.5×11.0	36より新	Ⅱ期	
20	24G14	10YR4にふい黄褐, OS-a微量, 中礫, やや密	39.5×30.5	88.6	90.092	10YR3暗褐, 粗, 下部OS-a純層	—	14.5×11.2	—	Ⅱ期	
21	24G14	10YR4にふい黄褐, LB7%	36.5×39.0	74.6	90.017	10YR3暗褐, 空洞化, 極粗, 木質部残存, 木皮残存	—	14.0×14.5	37より新	Ⅱ期	
22	24G14	10YR4褐	38.0×36.0	65.5	89.890	10YR3暗褐, OS-a, やや粗	—	—	40より新	Ⅱ期	
23	24G19	10YR3暗褐, ローム質, 極密	34.0×36.0	72.2	90.143	10YR3暗褐, やや粗中部OS-a純層	—	6.0×7.5	—	Ⅱ期	
24	24G13	10YR4にふい黄褐, LB20%, やや密	27.5×23.0	71.4	90.109	10YR3暗褐, OS-a, やや密	—	11.0×7.5	—	Ⅱ期	
25	24G19	—	33.0×59.0	71.5	90.252	—	—	12.0×16.5	13より古	Ⅰ期	
26	24G18	10YR4にふい黄褐, LB30%	41.0×43.0	70.5	90.197	10YR3暗褐	—	11.0×10.0	45より古53より新	Ⅰ期	
27	24G13	10YR4にふい黄褐, やや密, LB30%	46.0×40.0	81.6	90.063	10YR3暗褐, LB30%	—	20.5×22.5	6より新	Ⅰ期	
28	24G18	10YR4にふい黄褐, LB30%, やや密	33.8×29.0	80.0	90.202	10YR3暗褐, LB15%, やや粗	—	13.0×13.0	42より古	—	
29	24G19	10YR4にふい黄褐, OS-a微量, 密, LB10%	39.0×35.5	71.4	90.161	—	—	12.0×11.5	43より新16より古	Ⅰ期	
30	24G19	10YR4褐, やや粗	35.5×25.8	70.4	90.068	—	—	—	41より古	—	
31	24G14	10YR3黄褐+4褐	29.0×32.5	81.8	89.995	—	—	10.8×12.5	—	Ⅱ期	
32	24G13	10YR4褐, やや粗, 中礫	48.0×39.0	64.7	90.001	10YR4褐, 粗	—	15.0×14.5	—	Ⅱ期	
33	24G14	10YR4褐, やや密	40.5×40.5	62.6	90.045	—	—	—	—	Ⅰ期	
34	24G19	10YR4褐, やや密, OS-a, 小礫	34.5×33.0	76.3	90.086	10YR3暗褐, やや粗	—	12.0×13.0	17より古	Ⅰ期	
35	24G19	10YR4にふい黄褐	52.0×32.0	80.3	90.169	—	—	14.5×14.5	14より古52より新	Ⅰ期	
36	24G19	10YR4褐, やや密	25.0×37.5	70.1	90.064	10YR4褐, OS-a微量含有	—	14.0×15.5	19より古	Ⅰ期	
37	24G14	10YR4褐, やや粗, OS-a20%	28.5×43.5	55.0	89.906	10YR3暗褐, やや粗中部OS-a純層	—	12.5×10.8	21より古66より新	Ⅰ期	
38	24G14	10YR3暗褐, LB7%, やや密	40.5×31.5	67.7	89.957	—	—	15.7×13.5	—	—	
39	24G18	10YR4褐, やや密	32.0×41.5	86.0	90.143	OS-a含有	—	12.0×9.0	59より新	—	
40	24G14	10YR4褐, やや粗, OS-a微量含有	31.5×30.5	26.0	89.855	—	—	11.0×9.5	22より古	—	
41	24G19	10YR4褐, LB10%, やや密	38.5×39.5	77.9	90.078	—	—	14.5×10.5	30より新	—	
42	24G18	10YR3暗褐, LB50%, やや密	41.0×46.0	80.2	90.192	—	—	14.5×14.0	28より39より新	—	
43	24G19	10YR4にふい黄褐, やや密	44.0×45.0	61.2	90.086	—	—	14.0×11.5	29より古	—	
44	24G18	10YR3暗褐, LB70%, やや密	49.0×17.0	67.1	90.104	—	—	—	9より10より古	—	
45	24G18	2.5YR4黄褐, 密, 木盤粒	36.5×50.0	90.5	90.222	10YR4にふい黄褐, やや粗	—	11.5×14.5	26より53より新	—	
46	24G19	10YR4にふい黄褐, LB50%, やや密	43.5×35.0	46.9	90.241	—	—	14.5×11.5	60より新	—	
47	24G19	10YR3暗褐, 密, ローム質	43.5×44.0	33.4	90.199	—	—	—	—	—	
48	24G19	10YR4にふい黄褐, 密	39.5×36.5	6.1	89.926	—	—	—	—	—	
49	24G19	10YR3暗褐, 密, ローム質	36.0×18.0	62.0	90.019	—	—	—	57より古	—	
50	24G14	10YR4褐, やや粗	27.8×20.5	19.2	89.925	—	—	—	—	—	
51	24G19	10YR4にふい黄褐, OS-a, やや密, ローム質	26.0×30.0	27.6	90.096	—	—	—	—	—	
52	24G19	10YR4にふい黄褐, やや粗, LB15%	38.5×30.5	52.5	90.067	—	—	17.5×9.0	35より古	—	
53	24G18	10YR3暗褐, LB含有	19.5×38.0	58.7	90.169	OS-a	—	5.5×13.5	26より45より古	—	
54	24G19	10YR3暗褐, 密	15.5×26.0	50.1	90.075	—	—	5.5×12.5	18より古	—	
55	24G19	10YR3暗褐, 密	39.0×24.0	16.7	90.240	—	—	—	12より60より古	—	
56	24G14	10YR3暗褐, 密	29.5×21.0	90.2	90.047	—	—	12.0×8.0	—	—	
57	24G19	10YR3暗褐, やや粗	41.0×46.0	87.6	90.078	10YR3暗褐, OS-a微量含有	—	—	15.0×12.5	49より新	—
58	24G13	10YR4褐, やや密, LB20%	46.0×23.8	79.5	89.883	—	—	15.5×9.5	11より古61より新	—	
59	24G18	10YR4にふい黄褐, やや粗	21.8×16.0	72.3	90.140	OS-a含有	—	12.5×6.5	39より古	—	
60	24G19	10YR4にふい黄褐, やや密, ローム砂粒	43.0×26.5	23.5	90.197	—	—	13.5×7.5	46より古55より新	—	
61	24G13	10YR4にふい黄褐, 粒状, 基盤粒10%	27.0×40.0	49.8	89.875	—	—	10.5×15.5	11より58より古	—	
62	24G19	—	36.5×32.5	17.5	90.053	—	—	9.0×7.0	17より古	—	
63	24G19	10YR4褐, LB15%	36.0×14.0	53.3	90.188	—	—	—	15より古	—	
64	24G18	10YR3暗褐, 密	34.5×24.5	34.0	90.202	—	—	—	—	—	
65	24G18	—	38.5×15.0	80.5	90.260	—	—	10.5×11.5	12より古	—	

表3 柱穴観察表

14号 埋設 位置	PitNo	地区	掘り方	覆土	掘り方			柱痕跡	覆土	柱痕跡	備考	
					大きさ	深さ	標高					
号 地 割 面	66	24G14			28.0×35.8	43.8	89.864			9.5× 8.5	21より37より古	—
	1	24G11	10Y R 5%明黄褐, LB, 密, 埋土		47.0×43.8	72.2	89.753	10Y R 5%暗褐, OS-a 7%, やや粗		16.5×16.8		Ⅱ期
	2	24G11	10Y R 5%明黄褐, LB+10Y R 5%褐, (50:50), 埋土		40.5×49.5	61.6	89.733	10Y R 5%暗褐, 粗		13.5×12.5	40より58より新	Ⅰ期
	3	24G11	10Y R 5%黄褐, LB, 密, 埋土		49.0×48.0	75.6	89.710	10Y R 5%褐, やや粗		13.5×11.5		Ⅱ期
	4	24G11	10Y R 5%明黄褐, LB, 密, 埋土		29.5×32.5	67.3	89.651	10Y R 5%暗褐, 粗		12.0×12.5		Ⅰ期
	5	24G 6	10Y R 5%褐, LB30%, やや密, 埋土		35.5×39.0	42.7	89.385	10Y R 5%暗褐, やや粗		16.0×13.5		Ⅰ期
	6	24G11	10Y R 5%にふい黄褐+10Y R 5%黄褐, LB30%, 埋土		39.5×45.0	75.5	89.593	10Y R 5%褐, OS-a 5%		14.5×16.5		Ⅱ期
	7	24G 6	10Y R 5%黄褐, 等, LB, やや密, 埋土		42.0×41.5	68.8	89.510	10Y R 5%暗褐, OS-a微量, やや密		15.8×17.9		Ⅱ期
	8	24G 6	10Y R 5%黄褐, LB+10Y R 5%暗褐 (OS-a微量), やや粗		52.5×48.2	65.1	89.367			12.8×14.5		Ⅱ期
	9	24H15	LB+基盤粒, 密, OS-a微量, 埋土		47.5×51.0	74.8	89.661	空洞化		10.0×10.5	42より新	Ⅱ期
	10	24H15	10Y R 5%黄褐+LB (外周) 7%		33.5×37.5	57.1	89.656	10Y R 5%褐, やや密		9.3×10.0		Ⅰ期
	11	24H15	10Y R 5%にふい黄褐, 密		32.5×27.5	58.1	89.627			16.0×11.0	31より古	Ⅰ期
	12	24G 6	10Y R 5%暗褐, やや粗, LB 5%		34.8×35.5	48.3	89.495			9.8× 9.8		Ⅰ期
	13	24H10	10Y R 5%明黄褐, LB+10Y R 5%黒褐 (70:30) やや密, 埋土		29.5×36.5	56.7	89.496	10Y R 5%にふい黄褐, やや密		12.3×11.0	21より古	Ⅰ期
	14	24H10	10Y R 5%にふい黄褐+10Y R 5%暗褐 (80:20), やや粗, 埋土		39.5×32.5	57.8	89.430	10Y R 5%黒褐, 粗		7.8× 7.8	23より新	Ⅱ期
	15	24H10	10Y R 5%にふい黄褐+10Y R 5%黒褐+10Y R 5%黄褐, ソフトロームLB (70:20:10), 基盤粒, 埋土		34.5×31.6	26.7	89.224			8.5× 8.7		Ⅰ期
	16	24H10	10Y R 5%にふい黄褐+10Y R 5%黄褐, 基盤粒, 埋土		43.2×40.5	67.9	89.404	10Y R 5%暗褐, やや粗, 10Y R 5%にふい黄褐, 基盤粒		23.0×18.5		Ⅱ期
	17	24H10	10Y R 5%にふい黄褐+10Y R 5%黄褐, LB, やや粗		31.5×27.0	57.2	89.312	10Y R 5%暗褐, やや粗		12.0×13.5	34より新	Ⅰ期
	18	24H15	10Y R 5%黄褐+LB (外周) 10%, 埋土		35.5×35.5	65.7	89.559	10Y R 5%褐		13.0×15.5		Ⅱ期
	19	24H 5	10Y R 5%灰黄褐, OS-a30%		38.0×30.0	28.2	89.113			24.5×19.5		—
	20	24G11	10Y R 5%褐, 10Y R 5%にふい黄褐, ソフトローム粒, 微量含有 (小型)		47.5×45.5	19.5	89.682					—
	21	24H15	10Y R 5%にふい黄褐, OS-a40%, やや密		48.0×46.5	72.5	89.565			15.0×11.5	13より新	Ⅱ期
	22	24G11	10Y R 5%黄褐, LB30%		35.0×31.8	52.0	89.745	10Y R 5%黒褐		15.5×17.2		Ⅰ期
	23	24H10	10Y R 5%黄褐, 基盤粒含有, やや粗, 埋土		37.2×28.3	50.4	89.468	10Y R 5%暗褐, 粗		10.5×10.5	14より古	Ⅰ期
	24	24G 6	10Y R 5%暗褐+ソフトローム粒微量, やや粗		34.5×36.0	45.8	89.344			13.5×12.2		Ⅰ期
	25	24H10	10Y R 5%にふい黄褐+10Y R 5%黄褐, LB (95:5), OS-a含有		39.5×37.5	45.9	89.382			10.0× 9.2		Ⅱ期
	26	24H10	10Y R 5%明黄褐, 基盤粒, LB やや密, 埋土		35.5×43.0	58.4	89.356	10Y R 5%暗褐, 粗		14.5×13.8		Ⅰ期
	27	24G 6	10Y R 5%にふい黄褐+10Y R 5%明黄褐, LB (50:50), やや密		35.0×32.5	43.0	89.185	10Y R 5%暗褐, やや粗		14.0×16.0	33より新56より古	Ⅰ期
	28	24G11	10Y R 5%暗褐, やや粗, OS-a微量含有		45.5×38.0	64.8	89.631			16.0×14.0		Ⅰ期
	29	24G11	10Y R 5%暗褐, OS-a微量含有, やや粗		46.5×40.5	70.2	89.831			10.0×13.8		Ⅰ期
	30	24H 5	OS-a純層 (10Y R 5%にふい黄褐, 密)		33.5×33.0	19.9	88.985			9.5×15.5		—
	31	24H15	10Y R 5%にふい黄褐, 密		38.0×34.5	7.1	89.640			15.0×11.5	11より新	Ⅱ期
	32	24H10	10Y R 5%明黄褐, LB+10Y R 5%黒褐 (40:60), やや粗, 埋土		49.5×43.0	62.9	89.485	空洞化		16.0×17.5		Ⅱ期
	33	24G 6	10Y R 5%黒褐, やや粗		46.1×31.0	18.4	89.211				27より56より古	—
	34	24H10	10Y R 5%にふい黄褐+10Y R 5%黄褐, LB (90:10), やや粗		28.0×21.0	36.2	89.330			14.0× 4.5	17より古	Ⅰ期
	35	24H10	10Y R 5%にふい黄褐+10Y R 5%黄褐, LB (80:20) (ソフトローム), やや粗		31.0×32.0	42.1	89.272				46より古	Ⅰ期
	36	24H15	10Y R 5%褐, やや密		43.0×48.5	83.9	89.705	10Y R 5%褐, やや粗		13.5×18.0		Ⅱ期
	37	24H15	10Y R 5%褐, やや密		37.0×43.5	38.8	89.688			16.0×21.0		—
	38	24H10	10Y R 5%にふい黄褐+LB 20%		34.5×29.0	51.0	89.549	10Y R 5%暗褐, やや粗		11.0×11.0		Ⅰ期
	39	24G11	10Y R 5%にふい黄褐+10Y R 5%暗褐 (80:20), OS-a10%, やや密		40.5×48.0	15.5	89.644					—
	40	24G11	10Y R 5%にふい黄褐, C含有, 密		33.0×36.0	16.8	89.672				2より古	—
	41	24G11	10Y R 5%にふい黄褐, やや密		30.5×21.5	5.0	89.695					—
	42	24H15			32.5×27.5	67.9	89.622			13.0×14.0	9より古	Ⅰ期
	43	24H15	10Y R 5%黄褐, 密		25.5×20.0	23.6	89.558	10Y R 5%暗褐, OS-a, やや粗		10.5×10.8		—
	44	24G11	10Y R 5%にふい黄褐, C, やや密		24.0×21.5	28.4	89.560			12.5×10.5		—
	45	24H10	10Y R 5%にふい黄褐+LB 10%, やや粗		38.0×37.0	47.9	89.434	10Y R 5%暗褐, OS-a, やや粗		14.0×13.5		Ⅰ期
	46	24H10	10Y R 5%にふい黄褐, やや粗		28.0×32.0	56.8	89.335			14.0×17.0	35より新	Ⅰ期
	47	24H15	OS-a純層 (10Y R 5%にふい黄褐, 密)		49.5×48.0	83.8	89.745			17.0×14.0	49より新	Ⅱ期
	48	24G 1	10Y R 5%にふい黄褐, OS-a 7%		37.0×31.5	22.6	89.047			12.5×11.0		—
	49	24H15	10Y R 5%暗褐+10Y R 5%にふい黄褐, LB (60:40), やや密		22.5×22.5	75.6	89.722			11.5×14.5	47より古	—
	50	24H15			21.5×31.5	63.5	89.649			9.0×11.0		Ⅰ期
	51	24H15	基盤礫		36.0×44.5	83.8	89.851			18.5×21.5		Ⅰ期
	52	24H15	基盤礫+暗褐色土		32.5×26.0	70.2	89.791			13.5×10.0		Ⅰ期
	53	24H10			33.0×31.5	72.7	89.443			13.0×11.5		Ⅰ期
	54	24H10			26.0×27.5	17.6	89.242					—
	55	24H 5			22.0×27.0	13.0	89.174			6.0× 9.5		—
	56	24G 6			36.5×32.5	42.8	89.244			12.0×11.5	27より33より新	Ⅰ期
	57	24G 6			29.0×21.5	13.8	89.392					—
	58	24G11			56.5×30.0	14.9	89.730					—
59	24H10			20.5×19.5	8.8	89.422					—	
16号 地 割 面	1	24G12	10Y R 5%にふい黄褐+10Y R 5%明黄褐, LB (60:40), OS-a微量, やや密		34.5×38.5	63.8	89.656	10Y R 5%にふい黄褐, やや粗		11.5× 9.5		Ⅰ期
2	24G 7	10Y R 5%黄褐, やや密		31.5×35.5	53.4	89.514	10Y R 5%にふい黄褐+10Y R 5%暗褐, やや粗		10.0×11.5	8より新	Ⅰ期	
3	24G12	10Y R 5%黄褐, LB, 基盤粒+10Y R 5%にふい黄褐, 密		36.5×34.0	64.3	89.677	10Y R 5%褐		11.0×13.0		Ⅰ期	
4	24G 7	10Y R 5%暗褐+10Y R 5%明黄褐 (99:1), C'		51.0×41.0	35.7	89.338			9.0× 7.0	13より古	—	
5	24G 7	10Y R 5%にふい黄褐+10Y R 5%明黄褐, LB (70:30), やや密		39.5×34.0	40.0	89.555			16.5×17.5		Ⅰ期	

表5 柱穴観察表

PitNo	地区	掘り方	掘り方			柱痕跡覆土	柱痕跡		備考	
			大きさ	深さ	標高		大きさ	備考		
18号地割面	3	24G1	10Y R 弱暗褐, やや密	37.5×35.0	68.7	88.828	OS-a	9.0×11.0	I, II期	
	4	24G2	10Y R 弱暗褐, やや密	49.5×63.5	78.6	88.858		13.0×12.5	I, II期	
	5	24G2	10Y R 弱褐, OS-a10%, やや密	37.5×47.0	57.2	88.731		12.2×15.5	III期	
	6	24G2	10Y R 弱暗褐, OS-a微量, やや粗	31.5×31.0	50.3	88.712		9.5×11.0	III期	
	7	24G2	10Y R 弱暗褐, OS-a 5%, やや粗	29.5×30.5	54.4	88.825		12.0×10.0	I, II期	
	8	24G2	10Y R 弱暗褐, OS-a 5%, やや粗	29.0×35.5	46.0	88.723		9.5× 9.0		
	9	24G2	10Y R 弱暗褐, OS-a10%, やや粗	25.5×24.5	28.5	88.797				
	10	24G1	10Y R 弱黒褐+10Y R 弱にふい黄橙, LB (70:30), やや粗	35.5×31.5	61.6	88.671	OS-a20%	12.0×13.0	I, II期	
	11	24G2	10Y R 弱暗褐, OS-a 5%, やや粗	21.0×21.5	27.0	88.719		8.5× 8.5		
	12	24G2	10Y R 弱暗褐+10Y R 弱明黄褐, ソフトLB (90:10), やや密	29.0×28.0	47.8	88.598		13.5×10.5	I, II期	
	13	23G22	10Y R 弱暗褐+10Y R 弱明黄褐(80:20), やや密	44.0×30.5	63.2	88.493		15.5×14.3	I, II期	
	14	23G22	10Y R 弱暗褐, LB+10Y R 弱(60:40), やや密	36.0×29.5	46.5	88.457	10Y R 弱暗褐, やや粗	13.5×12.0	I, II期	
	15	24G1	10Y R 弱にふい黄褐, OS-a15%, やや粗	23.5×36.5	14.0	88.766				
	16	24G2	10Y R 弱褐, OS-a微量, やや粗	36.5×30.5	47.5	88.708		11.5×11.0	I, II期	
	17	23G22	10Y R 弱にふい黄褐+10Y R 弱明黄褐(80:20), やや密	29.0×24.0	34.0	88.452	10Y R 弱褐, やや粗	11.0×10.8	III期	
	18	23G22	10Y R 弱黒褐+10Y R 弱にふい黄褐ソフトLB (90:10)	35.5×24.0	28.4	88.334				
	19	24G2	10Y R 弱暗褐+10Y R 弱にふい黄褐(90:10), やや粗	44.5×32.5	50.5	88.646		11.0× 9.0	III期	
	20	23G21	10Y R 弱黒褐+10Y R 弱暗褐+10Y R 弱明黄褐(20:70:10), やや密	32.0×35.5	50.0	88.491	暗褐, OS-a50%, やや粗	15.5×13.0	I, II期	
	21	24G1	10Y R 弱にふい黄褐+10Y R 弱ソフトLB (90:10), やや密	41.5×36.0	79.3	88.723		11.5×12.5	I, II期	
	22	23G21	10Y R 弱褐+10Y R 弱にふい黄褐, LB (80:20), やや密	24.0×30.0	36.3	88.473	10Y R 弱にふい黄褐, やや粗	12.5×17.0	III期	
	23	24G1	10Y R 弱暗褐+OS-a (70:30), やや粗	19.0×13.5	14.0	88.641				
	24	23G22	10Y R 弱灰黄褐, LB, 密	24.2×29.5	11.4	88.344				
	25	23G21	10Y R 弱褐+10Y R 弱明黄褐, ソフトLB+10Y R 弱黒褐(50:20:30), やや粗	29.0×27.0	36.5	88.473			I, II期	
	26	23G22	10Y R 弱にふい黄褐	34.0×34.5	33.2	88.389		13.0×12.5	III期	
	27	23G21	10Y R 弱暗褐, やや粗	34.0×33.5	24.0	88.246	OS-a	9.5×12.0	I, II期	
	28	24G1	10Y R 弱暗褐+10Y R 弱明黄褐(60:40), OS-a10%, やや粗	34.0×27.0	45.3	88.696	OS-a50%, 粗	13.5×13.0	I, II期	
	29	24G1	10Y R 弱にふい黄褐, OS-a15%, やや粗	36.5×41.5	24.6	88.711				
	30	23G21	10Y R 弱にふい黄褐+10Y R 弱暗褐+OS-a (70:20:10), やや粗	51.4×34.0	22.1	88.394				
	31	24G1	10Y R 弱褐, ソフトLB微量, やや粗	15.5×27.0	13.0	88.472				
	32	24G1	10Y R 弱にふい黄褐, やや密(角礫多)	46.0×33.0	9.6	88.890		7.0× 5.5		
	33	24G2	10Y R 弱にふい黄褐+OS-a(80:20), やや粗	37.0×36.0	68.1	88.709		15.5×14.0	I, II期	
	34	24G1	10Y R 弱にふい黄褐+10Y R 弱(50:50), OS-a微量, やや密	30.5×26.5	57.8	88.786	10Y R 弱にふい黄褐, やや粗	16.5×16.3	III期	
	35	24G1	10Y R 弱暗褐, OS-a 3%, やや粗	30.5×30.8	36.9	88.820				
	36	24G2		20.5×19.5	11.3	88.833				
	37	23G21	10Y R 弱黒褐, やや粗	30.0×30.8	42.0	88.399		12.0×12.3	I, II期	
	38	23G21	10Y R 弱黒褐, OS-a微量, やや粗	23.0×26.5	25.6	88.321		13.0×12.0	III期	
	39	24G1	10Y R 弱にふい黄褐, やや粗	29.0×24.5	—	88.519		6.5×10.5		
	40	24G1	10Y R 弱にふい黄褐, やや粗	24.8×19.5	22.9	88.530	10Y R 弱黒褐+10Y R 弱明黄褐(微量), 粗	7.5× 9.0	III期	
	41	24G1		37.0×28.0	23.8	88.434		10.0×11.0	I, II期	
	42	23G21		43.5×32.0	47.6	88.165		15.0×16.0	I, II期	
	43	23G22		30.0×29.5	37.2	88.223		17.0×14.0	I, II期	
	44	23G21		30.0×32.0	28.0	88.142		14.5×14.0	I, II期	
	45	24G2	10Y R 弱にふい黄褐, やや粗	27.0×28.5	9.1	88.427				
	46	23G21		22.8×26.5	26.0	88.434		11.0× 9.5		
	47	24G1		45.0×62.0	58.4	88.924		14.5×14.8	I, II期	
	48	24G1		43.0×51.0	56.0	88.862		15.0×13.0	III期	
	49	24G2		26.0×26.5	55.5	88.721		8.0× 5.5		
	50	24G2		14.5×22.5	11.3	88.756		8.5×10.0	I, II期	
	19号地割面	1	23G24	10Y R 弱黒褐+10Y R 弱暗褐+10Y R 弱明黄褐(60:30:10), C, やや密	38.0×32.0	30.7	88.116			
		2	23G24	10Y R 弱暗褐, OS-a微量, C, やや密	33.5×31.0	62.1	88.008		14.8×15.5	II期
3		23G24	10Y R 弱褐, やや密	50.5×41.5	68.4	88.086	10Y R 弱暗褐, やや粗	15.5×15.5	III期	
4		23G24	10Y R 弱暗褐+10Y R 弱褐+OS-a (50:40:10), C, やや密	38.0×54.5	68.5	88.141		13.0×16.0	II期	
5		23G23	10Y R 弱にふい黄褐+10Y R 弱明黄褐+OS-a (60:30:10), C, やや密	33.5×45.5	76.8	88.130		12.5×13.8	I期	
6		23G23	10Y R 弱暗褐+OS-a(60:40), やや密	32.5×38.0	73.7	88.107		14.5×14.2	II期	
7		23G24		35.0×31.5	47.1	88.034		17.5× 9.5	I期	
8		23G23	10Y R 弱暗褐+OS-a(80:20), やや密	35.5×42.0	74.8	88.183		14.0×13.5	II期	
9		23G24	10Y R 弱にふい黄褐+10Y R 弱暗褐(60:40), OS-a微量, C, 密	37.0×32.0	75.1	88.071	10Y R 弱明黄褐+10Y R 弱(40:60), やや粗	13.0×12.5	I期	
10		23G24	10Y R 弱褐, OS-a微量	37.5×39.5	73.3	88.023		12.0× 9.5	I期	
11		23G24	10Y R 弱暗褐+10Y R 弱褐+OS-a(50:40:10), やや密	41.5×32.0	67.1	87.910		11.5× 9.5	I期	
12		23G24	10Y R 弱明黄褐+OS-a (90:10), 密	48.5×28.5	85.1	88.148	10Y R 弱褐+10Y R 弱暗褐(60:40), OS-a微量, 粗, 空洞化	12.5× 8.0	II期	
13		23G23	10Y R 弱暗褐+10Y R 弱明黄褐+OS-a(70:20:10), 密	39.5×42.5	75.5	88.060		17.8×16.5	I期	
14		23G24	10Y R 弱暗褐+10Y R 弱明黄褐(60:40), やや密	48.5×40.5	68.6	87.856			II期	
15		23G23	10Y R 弱黒褐+10Y R 弱(60:40), やや密	32.5×24.5	10.5	88.051				
16		23G23	10Y R 弱にふい黄褐+OS-a (60:40), C, やや密	39.5×32.8	76.2	87.990	10Y R 弱暗褐, やや粗	20.0×14.5	I期	
17		23G24	10Y R 弱褐, やや密	51.5×48.0	77.5	88.003	10Y R 弱暗褐, やや粗	16.5×17.0	II期	

表6 柱穴観察表

PitNo	PitNo	地区掘り方覆土	掘り方			柱痕跡覆土	柱痕跡 大きさ	備考	
			大きさ	深さ	標高				
19	18	23G24	10Y R 3/4暗褐+10Y R 1/2黄褐+10Y R 1/4黄褐 (70:20:10), やや密	42.5×40.0	69.3	88.067	—	12.8×11.8	I期
	19	23G24	10Y R 1/2黄褐, やや密	38.0×40.3	73.1	87.966	10Y R 1/2黄褐, 粗	16.5×16.5	I期
	20	23G23	10Y R 1/2黄褐, やや密	40.0×36.0	64.1	88.002	10Y R 3/4暗褐+OS-a (70:30), やや密	15.0×14.0	II期
	21	23G19	10Y R 3/4暗褐+10Y R 1/4黄褐 (50:50), やや密	41.5×32.0	52.4	87.855	10Y R 1/2黄褐, やや粗	17.5×17.0	I期
	22	23G19	10Y R 1/2黄褐+10Y R 3/4暗褐+10Y R 1/4黄褐 (60:30:10), やや密	34.5×35.5	55.2	87.771	10Y R 1/2黄褐+OS-a (70:30), やや粗	16.5×13.0	I期
	23	23G19	10Y R 3/4暗褐+OS-a (90:10), やや密	45.5×39.5	32.4	87.874	—	—	I期
	24	23G19	10Y R 1/2黄褐+10Y R 1/4黄褐 (80:20)	32.5×38.5	56.2	87.788	10Y R 3/4暗褐, やや粗	14.0×14.0	II期
	25	23G18	—	38.5×37.5	55.4	87.742	—	14.5×14.0	I期
	26	23G18	—	35.5×32.5	54.3	87.751	—	11.8×12.5	I期
	27	23G24	10Y R 1/2黄褐, OS-a微量, 密	38.5×36.5	65.3	87.887	10Y R 3/4暗褐, やや粗	14.5×14.5	II期
	28	24G19	10Y R 3/4暗褐+10Y R 1/2黄褐 (90:10), やや密	29.0×39.0	37.1	87.605	—	7.5× 8.5	34より古29より新
	29	24G19	10Y R 3/4暗褐+10Y R 1/2黄褐 (90:10), やや密	21.0×41.0	31.2	87.805	—	11.0×16.5	28より34より古
	30	24G18	10Y R 3/4暗褐+10Y R 1/2黄褐 (90:10), OS-a微量	34.0×31.5	38.1	87.844	—	—	31より新
	31	24G18	10Y R 1/2黄褐+10Y R 3/4暗褐 (60:40), OS-a微量	44.5×21.5	25.5	87.849	—	7.5×12.5	30より古
	32	23G24	—	35.5×35.5	51.9	87.943	—	15.5×15.0	II期
	33	23G19	10Y R 1/2黄褐+10Y R 3/4暗褐 (60:40)密	43.0×55.0	43.8	87.687	—	14.0×16.5	II期
	34	23G19	—	29.5×38.5	40.2	87.684	—	12.0×14.0	28より29より新
	35	23G18	—	17.5×16.5	10.2	87.655	—	—	I期
	36	23G18	—	36.0×33.0	68.9	87.792	—	19.0×18.0	II期
	37	23G23	—	29.0×34.5	66.6	87.960	—	13.5×14.0	II期
38	23G24	—	16.5×21.0	7.9	88.107	—	—	—	
39	23G23	—	28.0×23.0	15.9	87.988	—	—	40より新	
40	23G18	—	65.0×48.5	19.4	87.978	—	—	39より古	
20	1	24G17	10Y R 3/4暗褐+10Y R 1/2黄褐+10Y R 1/4黄褐+OS-a (40:30:20:10), C, 密	34.5×36.0	—	90.604	10Y R 3/4暗褐+OS-a (70:30), やや粗	15.0×18.0	—
	2	24G17	10Y R 3/4暗褐+OS-a (70:30), 密	28.5×29.5	—	90.636	10Y R 1/2黄褐, OS-a微量, やや粗	11.0×11.5	—
	3	24G16	10Y R 1/2黄褐+10Y R 1/4黄褐 (60:40), 小礫, C, OS-a微量, 密	41.0×41.5	—	90.660	10Y R 3/4暗褐+10Y R 1/2黄褐 (80:20), OS-a微量, やや粗	14.5× 9.0	—
	4	24G16	10Y R 1/2黄褐+10Y R 1/4黄褐 (50:50), 小礫, やや粗	34.5×35.0	—	90.567	10Y R 3/4暗褐, やや粗	18.5×16.5	—
	5	24G16	10Y R 1/2黄褐+10Y R 1/4黄褐+10Y R 1/4黄褐+OS-a (50:40:10), 小礫, やや粗	35.5×35.5	—	90.520	10Y R 3/4暗褐, 粗	18.5×16.5	—
	6	24G16	10Y R 1/2黄褐+10Y R 1/4黄褐, LB (80:20), C, 密	34.5×31.0	—	90.602	—	—	—
	7	24G16	10Y R 1/2黄褐, C, やや粗	39.0×34.5	—	90.517	—	—	—
	8	24G17	10Y R 1/2黄褐+10Y R 1/4黄褐+10Y R 1/4黄褐+OS-a (60:30:20:10), 礫, 密	38.0×33.0	—	90.569	10Y R 1/2黄褐+OS-a (90:10), 密	12.5×11.0	—
	9	24G17	10Y R 3/4暗褐+10Y R 1/2黄褐+10Y R 1/4黄褐+OS-a (60:30:10), 密, C	38.5×48.0	—	90.488	10Y R 3/4暗褐, 粗	13.5×12.0	—
	10	24G16	10Y R 1/2黄褐+10Y R 1/4黄褐+10Y R 1/4黄褐+OS-a (60:30:10), C, 密	37.0×29.5	—	90.495	10Y R 1/2黄褐, C, 粗	14.0×12.0	—
	11	24G16	10Y R 3/4暗褐+10Y R 1/2黄褐+10Y R 1/4黄褐+OS-a (70:20:10), C, やや粗, 礫	35.5×29.5	—	90.418	10Y R 3/4暗褐, C, やや粗	12.5×12.5	—
	12	24G17	10Y R 3/4暗褐+OS-a (90:10), C, やや密	20.0×23.0	—	90.562	—	—	—
	13	24G16	10Y R 1/2黄褐+OS-a (60:40), やや粗	19.0×17.0	—	90.207	—	—	—
	14	24G16	10Y R 1/2黄褐+10Y R 1/4黄褐 (70:30), C, 礫, やや密	34.5×31.0	—	90.557	10Y R 3/4暗褐, C, 粗	12.0×11.8	—
	15	24G16	10Y R 1/2黄褐+10Y R 1/4黄褐 (80:20), C, 礫, やや粗	39.5×35.5	—	90.460	10Y R 3/4暗褐+OS-a (90:10), 粗	11.0×12.0	—
	16	24G16	—	24.5×36.0	—	90.579	—	—	—
	17	24G16	10Y R 1/2黄褐, C, やや粗	29.0×28.0	—	90.511	—	—	—
	18	24G17	—	25.5×19.0	—	90.488	—	—	—
	19	24G17	—	32.5×31.5	—	90.143	—	—	—
	20	24G16	—	36.5×27.5	—	90.339	—	—	—
21	1	24H20	10Y R 1/2黄褐+10Y R 1/4黄褐, LB+OS-a (60:30:10), 密	26.0×26.5	—	90.374	—	—	—
	2	24H20	10Y R 3/4暗褐+OS-a+10Y R 1/4黄褐, ソフトローム, (70:20:10), やや粗	25.5×24.5	—	90.500	—	—	—
	3	24H20	10Y R 3/4暗褐, 粗	16.5×17.3	—	90.487	—	—	—
	4	24H20	10Y R 1/2黄褐+OS-a (80:20), やや粗	24.5×24.5	—	90.450	—	—	—
	5	24H20	10Y R 3/4暗褐+OS-a (90:10), C, 粗	30.0×21.0	—	90.461	—	—	—
	6	24H20	10Y R 3/4暗褐+OS-a (70:30), 粗	37.5×33.0	—	90.291	—	—	—
	7	24H20	10Y R 1/2黄褐+10Y R 1/4黄褐+10Y R 1/4黄褐+OS-a (70:15:15), やや密	30.5×33.5	—	90.405	—	—	—
	8	24H20	OS-a+10Y R 3/4暗褐, ソフトローム (90:10), 密	36.5×32.0	—	90.251	—	—	—
	9	24H19	OS-a+10Y R 1/2黄褐+10Y R 3/4暗褐, (40:30:30), やや密	39.0×33.5	—	90.242	—	—	—
	10	24H19	OS-a+10Y R 3/4暗褐, ソフトローム (90:10), 密	36.0×44.5	—	90.145	—	—	—
	11	24H20	10Y R 1/2黄褐+OS-a (90:10) 粗, やや密	32.5×29.5	—	90.596	—	—	—
	12	24H20	10Y R 3/4暗褐+OS-a+10Y R 1/4黄褐, LB, (80:15:5), やや密	22.0×24.5	—	90.229	—	—	—
	13	24H20	10Y R 3/4暗褐, やや密	15.5×22.0	—	90.666	—	—	—
	14	24H20	10Y R 3/4暗褐+OS-a (80:20), 粗	14.0×15.5	—	90.474	—	—	—
	15	24H20	10Y R 3/4暗褐, やや粗	13.5×13.5	—	90.251	—	—	—
	16	24H20	—	17.5×19.5	—	—	—	—	—

III ま と め

昭和59年度に“伝侍屋敷跡”の遺構確認調査を実施し、総柱南北棟と身舎東西棟の組み合わせからなる建物群を検出した。これらに伴って、碗皿等の汁器類、漁具、武具等が少量出土し、小鍛冶作業を想わせる遺構と遺物が検出された。総じて“侍屋敷”とは伝えられ乍ら下級の階層の集住が想定された。

61年度は地内中央やや北半に鉤の手状に整然と築かれている土塁とこの建物群との関連性を明らかにすることを大きな目的とした。

調査の結果、1741年降灰の渡島大島火山灰(Os-a)を含むⅡ層の上位に構築され、幕末～明治の陶磁器を伴うこと、下位に掘立柱建物跡の遺構面が残存すること等から勝山館の廃絶後の遺構であることが明確になった。

本地区は別に“棟方屋敷”とも呼称され、昭和初期迄の土地所有者は棟方氏であった。棟方家の由緒^{註2}によれば幕末勤皇の志士として活躍した棟方多門が明治維新とともに野に下り渡道し上ノ国に居住したのだという。

土塁頂部に塀を設け入門部に冠木門もしくは棟門^{註3}を建て、更に土塁の形状に併せて石列を配しその間には砂利を敷くという構えはかなり手の込んだものである。実際にこの地内に棟方氏が居住したことを示す遺構は59、61年の調査では検出されていないが、59年度出土遺物中に19世紀のイギリス陶器の存在が判明し、国内に於ける遺存例もまたあるとのことは“棟方屋敷”の背景を示す1例であろうか^{註4}。

館形成時の遺構は6地割面から12棟の建物跡を検出した。1～3回の建替えが行われている^{註5}。

南側の高い方を削り落し、東西とコの字状に段を作りその中の平坦面に掘立柱の建物を立てるのは、59年度調査区同様でありその規模にも大差はない。2～3度の建替えが行われているが、その都度若干の段のつくりかえ、地割りの変更も行われるようである。59年度調査でも述べた所であるが、現存する段・地割りが最末期のものであり、その中におさまりの良いのがその時の建物であろう^{註6}。19号地割面の南半で検出された東西に走る溝状の凹みは、第Ⅰ期の地割段直下の溝の痕跡と思われる。

16号地割面西側に集石部分があった。その堆積はOs-a降灰以前であり、勝山館形成期として良いであろう。既報でも述べた如く、本地内は東西両側の小川の沈濫原であるのか、大量の礫が散在しているが、地割・段の形成時にはそれ以上に礫が多く、柱穴の掘り上げも容易でなかったと推される。本調査で検出された集石部分は、上に柱等を立てる余地が全くない程に密集しており、又この部分が特に川の流路にあたり、崩壊を防ぐために補強を必要とする部位でもない事から、地割・段の形成、柱穴の掘り上げに際して除かれた礫を集積した跡と解される。

16号地割面で中央に柱のある総柱建物跡が検出されたが、59年調査区、5、6号地割面にも同様の遺構が検出されており、一つの様式として存在していたものと推される。又、14号地割面で3間×4間総柱の建物跡が検出されたが、これは本例がはじめてである。

この2棟をはじめ検出された建物跡は、その殆んどが総柱の南北棟であり、他は2間×4間身舎南北、2間×3間身舎東西各1棟である。しかも2棟とも第18号地割面での検出であり、6地割面のうち5地割面には常に総柱の建物が立ち、時には6地割面全てに総柱建物が立ち並んでいたとさえ考えられる。

総柱の建物は床下を強固にする、荷重のかかる建物であり倉庫等を想定するのが一般的であろう。本地内に於てはその全てが南北棟であり、身舎の建物跡が東西棟に集中する傾向と好一対である^{註7}。

18号地割面で検出した2棟の身舎建物跡は南北棟の方が古い。もう1棟の総柱の建物跡とこの南北棟の前後関係は明らかではないが、総柱の建物が中間に入るとするよりは、総柱の建物から同じ軸線の身舎の建物となり更に東西棟に変化したとするのが自然かと思われる。

検出された焼土もこの東西棟に伴うものと推されるのであり、居住用の建物として使用されたのであろう。

各地割内から若干の陶磁器等が出土しているが、59年度調査で相当の距離を移動していることが判明しており、必ずしも出土地点が当時の使用

場所とすることはできない。

59年度調査区と61年度調査区の間には約400㎡の空間がありそこにも6～9地割面が存在することが推測される。又、61年度調査区の北にも4～6地割面の存在し得る空間がある。この地区については建物群の先端がどこにあるか見定める事が必要であるがこれより北及び59年度調査区以南は地形が大きく改変されており、本調査区内と同一の建物群が設けられる可能性は少ない。

地形測量の項でも述べられているように本建物群を総括するような施設等の存在も予測されるところである。これらから本地内に18の掘立柱建物を伴う地割面が検出され、更に10～15の地割面が存しその半数は総柱の建物群である事が想定される。

61年度調査の結果、身舎、総柱の建物二者一対一単位とする安易な想定は廃さなければならないところとなった。逆に言えば倉庫や、その中に納められる物が個人に帰属する性質のものではない事を示す証左であろう。59年度検出の建物跡について再検討することが必要と思われるが、現時点で少くとも5棟を総柱建物跡とすることができる。

3,000㎡弱の面積に30棟前後の建物が立ち半数が総柱のそれであるこの地域を館全体の中にどう位置づけるかは、本館跡の性格にも関連する大きな課題である。総柱建物跡が館主体部からは検出されず、竪穴遺構が逆に本地内から検出されていないこと、地割面積が主体部8～10号地割面では96～140㎡であるのに対し、侍屋敷地内では10～98㎡であり、その大半は50㎡以下であること、建物の規模は、主体部9、10号地割面では26.36、43.49㎡の面積であるのに対し、侍屋敷地内では、59年検出の身舎建物でも22～30㎡であり61年度検出の建物跡に至っては全て20㎡以下であることな

ど極立った特徴があり、出土遺物に差のあることも既述したところである。

又59年度調査で検出された小鍛冶関係遺構や遺物の存在は61年度調査区内では明瞭でない。身舎の建物が1棟と居住空間としての使用が僅かである事と関連するのではあろうが、先の両建物一組一単位の想定とともに、本地内を小鍛冶集団の集住地区とする事も今一度検討しなければならぬ。

これらを踏まえ各地の調査例等も参考にし乍ら更に細かに検討を重ねこの性格解明に迫りたく思うところである。(松崎)

註

- 1 鈴木亘先生のご教示による。
- 2 棟方家系譜図 1971 小寺巖 尚、同書によれば明治6年頃棟方多門は上ノ国へ来、225番地に住したという。同番地は現在の国道沿い市街地で、本調査区区内にはあたらない。
- 3 註1に同じ。
- 4 大橋康二氏を通じ神戸市立博物館学芸員岡泰正氏の調査により英国スタッフォードジャー窯1834～1859年のものと判明したのご教示を頂戴した。又、国内では長崎グラバー園内に同種のものがあるという。記して御礼申し上げる。(史跡上之国勝山館跡Ⅴ PL45 中左)
- 5 調査区内の建物跡の想定復原については鈴木亘先生の御指導を頂戴している。最終的には調査時の諸資料等を含めて前後関係その他を想定しており、誤り等の責は筆者等に帰する。
- 6 史跡上之国勝山館跡Ⅵ 1985
- 7 註 6に同じ。

IV 保在処理

(1) 意義

近年、道内特に道南では中近世の遺跡の発掘調査が増加傾向にありその主体を占める陶磁器と共に木製品、鉄製品、銅製品等が多数出土している。この時代の遺跡では陶磁器を除いた殆ど遺物が保存処理の対象といっても差し支えない。特に鉄製品、木製品が多数出土し保存処理の主対象となる。遺跡では遺構と共に出土する遺物、遺構外より出土する遺物があり、前者はレベル、層の把握等によりその遺構の年代を決める一つの手助けとなる。後者は遺跡の存続期間等がわかる。これは主に陶磁器等の編年が来ているものについてであり、金属製品等については今のところ該当しないと考えられる。しかしそれだからといって出土したものに処理を施さずそのまま置いておく本体に錆が増殖し最終的には粉々になり粉末状と化してしまう。調査し出土した遺物を後世に残していくのが責務であり、その方法として保存処理が必要不可欠なものになるのである。出土した鉄製品、木製品は土中に埋蔵された一定の環境の中でも劣化は進んでいる。発掘作業により取り上げ空気中にさらすと周囲の環境の激変等によりその劣化は加速度的に早まると推される。木製品は水浸状態に近い埋蔵環境に残存し、過飽和の状態で水を含んでいるものが多い。出土後その乾燥・収縮を防ぐ意味で水浸状態にし放置したところ、まず水の腐敗が始まりその後木製品表面にもカビ等の大発生がみられる。肉眼で観察できなくてもカビ等により木製品表面の劣化が進行しつつあると言ってしまう過言ではない。漆器では前述の劣化もさることながら漆皮膜と漆器木質部の間に水が浸入し漆皮膜等の剥離が進む。また内面が赤塗りの漆器では出土後空気にふれると色調は赤から褐色へ徐々に変化していく。出土後水浸状態にしても水の中に酸素がどんどん供給されていくためその色調はさらに褐色化していく。鉄製品ではその埋蔵環境が木製品程に限定された環境でなくてもある程度もちこたえられる。しかしその出土地により腐食の進行具合等が全く違う。勝山館では昭和57・58年遺物廃棄場所より出土した遺物はあまり腐食が進んでおらず比較的良好な状態であったこれは木製品も残存するような水浸状態でありな

がら地表面より深さがあり、空気中の酸素の供給が行なわれなかったためと考えられる。

昭和57・58年館神八幡宮跡附近から出土した遺物は地表より深さもないため地表面の乾湿がそのまま遺物に影響したと思われ残存状態はやや悪く腐食が著しかった。

(2) 今年度の処理

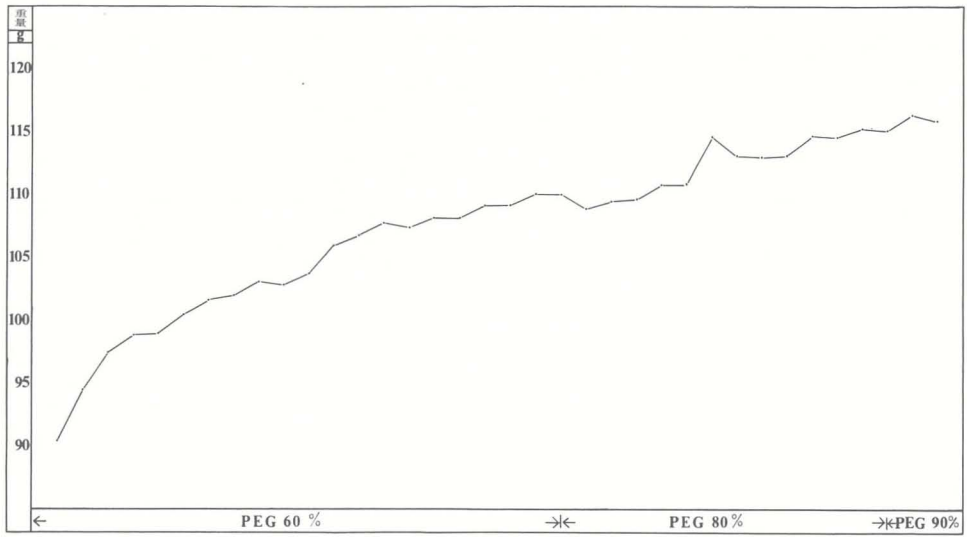
a. 木製品 今年度は恒温水槽により1200点、昨年度より処理中のもの40点の恒温含浸を行なった。恒温水槽で行なった遺物は昨年度までPEG40%浸漬中のものであるPEG60%、80%、90%の順で行なった第37図、38図は木製品の重量変化グラフである。恒温水槽内の4隅の任意の木製品を抽出してその重量変化を観察した。これらより見るとその推移は1は90gから116g、2は140gから180g、3は99gから109g、第38図では119gから127gへとそれぞれ1.06~1.28倍位の重量増加がみられる。またそれらの含浸完了時期は1はPEG80%後半、2は尚増加中、3はPEG80%後半、図38はPEG80%直後と考えられる。それぞれ材質、形状により異なる。処理後木製品はPEGが表面に附着しロウが固化したような感じになる。そのままでは展示等には耐えられないのでぬるま湯にひたした雑布等で表面のPEGをふきとったりしていたが、今年は処理後の木製品の表面をエタノールをかけふきとると表面の色調も木材本来の色となり木目等も良く見えた。^{註1}

b. 漆器 アルコール、キシレン樹脂法により20点の処理を行なった。今までの問題点として皮膜と本体の剥離がある。これについては来年度その補修を重点として行なって行きたい。^{註2}

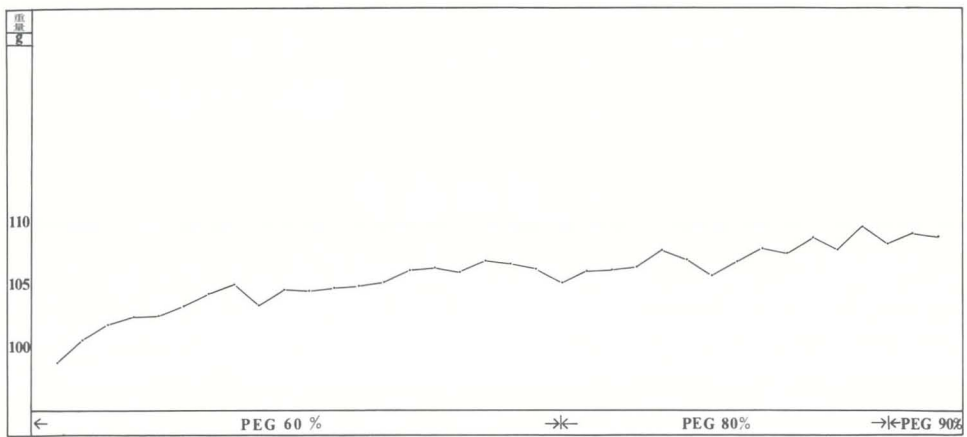
c. 鉄製品 従来通りパラロイドNAD-10のナフサ溶液による減圧含浸を行ない600点の処理を行なった。昭和58年度遺物廃棄場所にて出土した黒漆で覆われた7~8連結の小札はメタノールにて脱水を行ってきたが錆が表面に附着し始めて来たためEDTA 2Naによる錆除去を行なっている。^{註3}(斉藤)

註 1、2 元興寺文化財研究所 内田俊秀氏の御教示を得た。

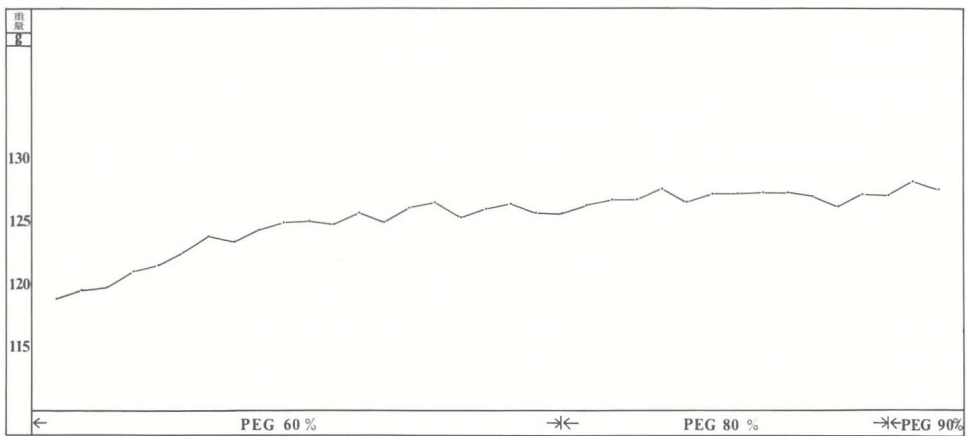
3 元興寺文化財研究所 松田隆嗣氏の御教示を得た。



1

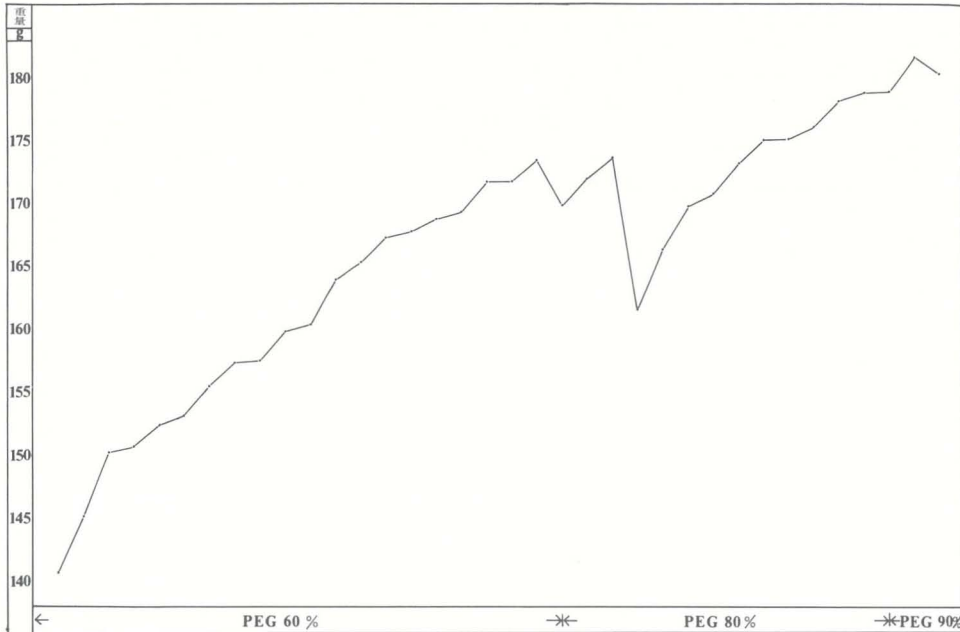


2



3

第37図 木製品重量変化グラフ



第38図 木製品重量変化グラフ

V 環境整備

1 環境整備工事

昭和61年度の整備事業は、昭和56～58年に発掘調査された寺の沢用水施設跡を中心に行なった。寺の沢用水施設跡整備のほかには、すでに遺構整備の完了している空壕跡、土葬墓群等について、説明板、表示板の整備をし、館神八幡宮とそれらの遺構を結び寺の沢用水施設跡に至る園路の整備を行なった。以下、工事の概要を述べる。

2. 全体の構成

寺の沢用水施設跡

寺の沢用水施設跡は、館神八幡宮跡の南側背後に掘られた空壕が寺の沢川に切り落とされている付近に位置する。遺構は空壕端部に寺の沢川の水を溜めた貯水地を始め、木製の置樋、溜井戸、木杭列からなる。まわりからは箸、串、漆塗椀、下駄などが出土しているほか、ソバ、ドクダミなど、栽培種の花粉もみついている。このように寺の沢用水施設跡は、勝山館での生活を知るうえで重要な遺構といえる。

木製の遺構は沢の湿地に埋まっていたこともあり保存状態が比較的良く、復元が可能と判断され

た。木樋は1本の丸木の四面を落とし成形したものをコの字断面にくり抜いて作ったものである。長さは4.9m、幅40cmほどで溝の深さは先端にいくにしたがい浅くなる。下に土台材を敷いてゆるい傾斜をつけ川の中央からやや斜に固定されていた。発掘された樋は1基であるが、川と貯水池の位置関係から2～3本連結して空壕跡の末端に水を落としていたと思われる。井戸は、自然石を基礎に木の柱と貫で1.7×2.3mの長方形に井型を組み、板で囲んだもので深さは80cm余りである。

さらに7本の木杭列が川の流に平行して井戸に向って打ち込まれていたが用途を確定する手掛かりはみつからなかった。

整備にあたっては、木樋、井戸、木杭列の復元をおこない各々寺の沢川から通水し、遺構とその使用された状況を視覚的にわかりやすく表現した。また周辺は芝張りで整備し、空壕跡の整備で行なった芝張りに連続するようにした。また遺構全体は「寺の沢用水施設跡」とし説明板と表示板の整備を行なった。

空壕跡

昭和59年度作成の整備計画で空壕跡としてまとめてあつかった空壕3箇所と、土葬墓群および遺物廃棄場所は、その後の発掘調査により空壕に関連して橋跡が見つかるなどしたため、空壕と橋跡一帯を「搦手の構え」とし、土葬墓群および遺物廃棄場所は「土葬墓群・室町期貝塚」として2分し説明板、表示板の整備を行なった。

園路

園路は勝山館を縦断している自然研究路の「搦手の構え」の南端を取り付き口として、「土葬墓群・室町期貝塚」を経由し「寺の沢用水施設跡」に至るまでを整備し整備箇所を見学できるようにした。

3. 各遺構の整備

木 樋

木樋は発掘されたものをもとに2基復元し、発掘場所から寺の沢川の方に連ね、傾斜をもたせて設置した。材料はヒバを使用し大まかな形を切り出した後、手斧で仕上げをした。設置は、流出を防止するため各種の台木下2箇所コンクリート基礎を設けボルトで固定したのちコンクリート部が見えないように埋め戻した。

また樋に寺の沢川の水を引くために、川を樋が交差する地点まで盛り土をし川に落差を作り、樋が水をうけやすくなるようにした。

井 戸

井戸は、発掘されたものをもとに復元したが、地下遺構との関係や復元強度などを考慮し次の点を変更した。

①井戸の深さは発掘調査によると80cmに推定されるが、復元工事で地下遺構を傷つけないように60cm深さにとどめた。

②井戸を囲む板は四隅の柱をつなぐ貫に支えられているが、地表面が傾斜しているために最も土圧が大きくなる南側の面を補強する必要があると判断された。従って土に埋まる部分に貫を1本増し外見的にはわからないように補強した。

③井戸に水を常に溜めるために、井戸をつつみ込むように防水シートを埋め保水性を高めた。

使用した材料はヒバで部材の形状は発掘されたものの最大寸法のひとまわり大きい値とした。

木杭列

寺の沢川に平行してもうけられた木杭列も一部

復元した。材料はヒバを使用した。

説 明 板

説明板は、黒御影石バーナー仕上げの石板に、ステンレスヘアライン仕上の名板に地図と説明文をシルクスクリーン印刷したものを取り付けた。

表 示 板

表示板は、白御影石割り肌仕上げの石板に名板部を磨き仕上げし、遺構名を彫り込んだ。

園 路

園路は幅員1.6mとし、玉石の緑石をもうけ路面は不陸整正の後、転圧した。なお、園路が雨水で流出するのを防止するために張り芝側溝を設け、寺の沢川に排水するようにした。

また、園路の勾配が25%以上になるところには階段を設けた。階段はマツの焼き丸太で土どめし、路面を転圧した。

園路が寺の沢川を横断するところには木橋をもうけた。木橋は、幅1.5m長さ4mの丸太組とした。材料はヒバを使用し、部材の寸法は周囲の環境や遺構のスケールに調和するよう配慮した。

(柳田・石塚建築計画事務所 石塚雅明)

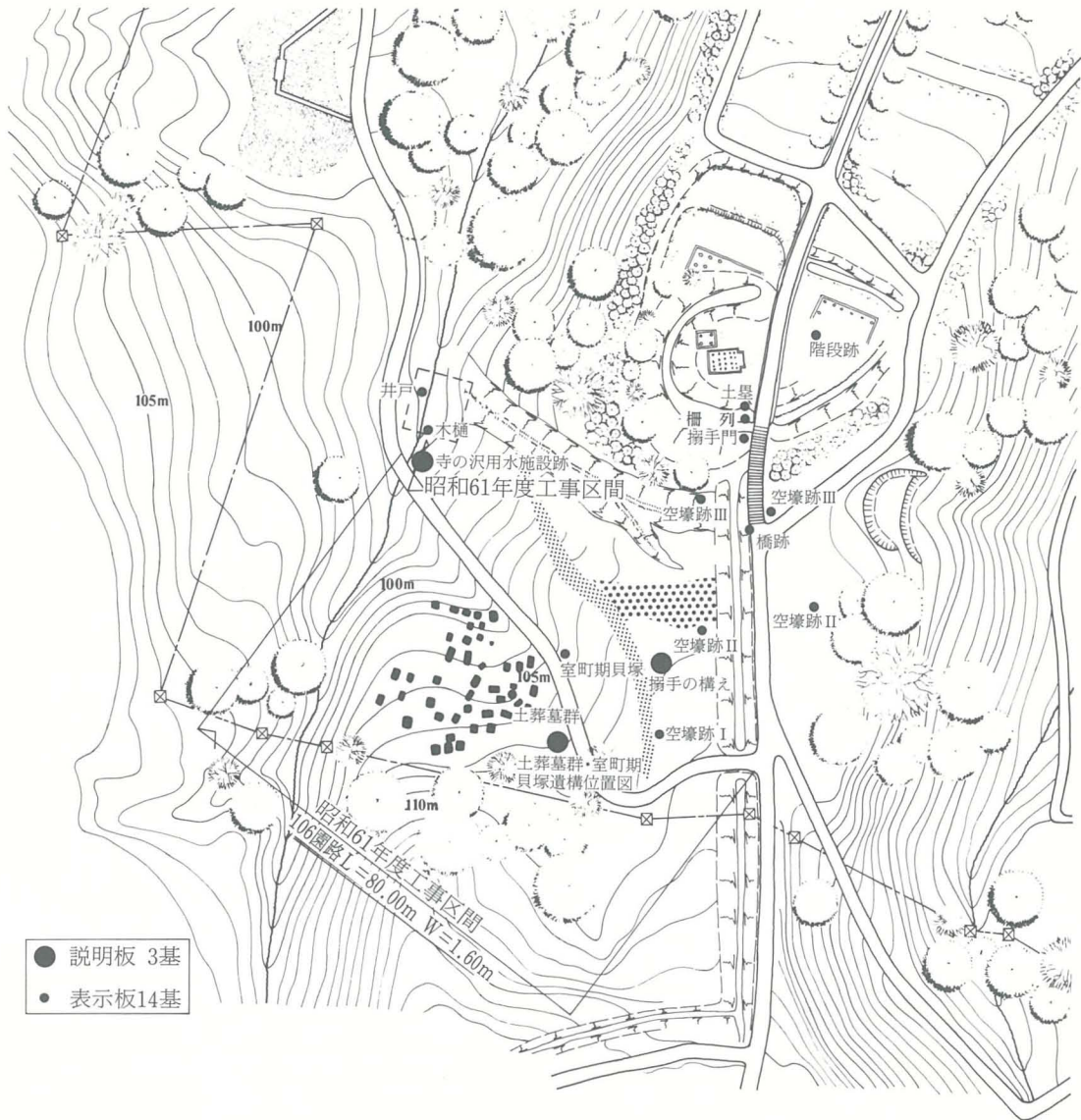
4. 仮整備

勝山館跡は自然の地形を巧みに利用した山城の形態をとっており、その景観を視覚で把握できる事も整備の重要な要素である。

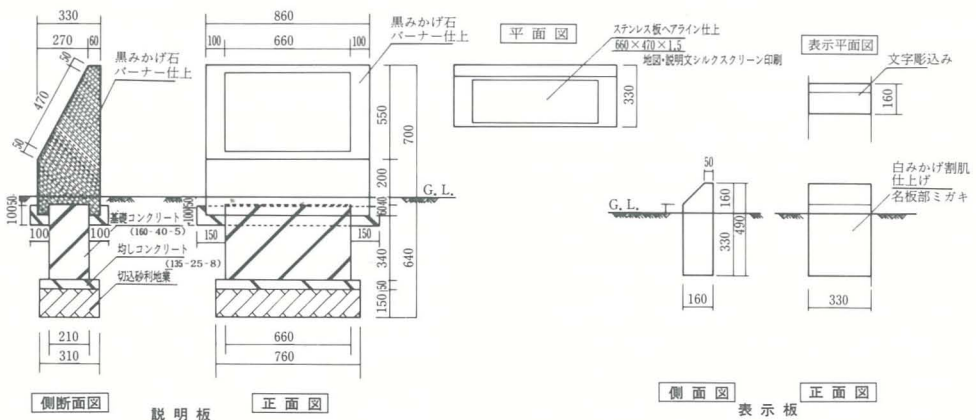
文化庁の強いすすめもあり館主体部を中心に伐採、伐開作業を実施し、仮整備とするとところとなった。61年度は、昭和30年代後半から館主体部前面に植樹された人工林の伐木を実施した。

この結果、館主体部西半斜面が直線的に寺ノ沢川に切り落されている事が明瞭になった。

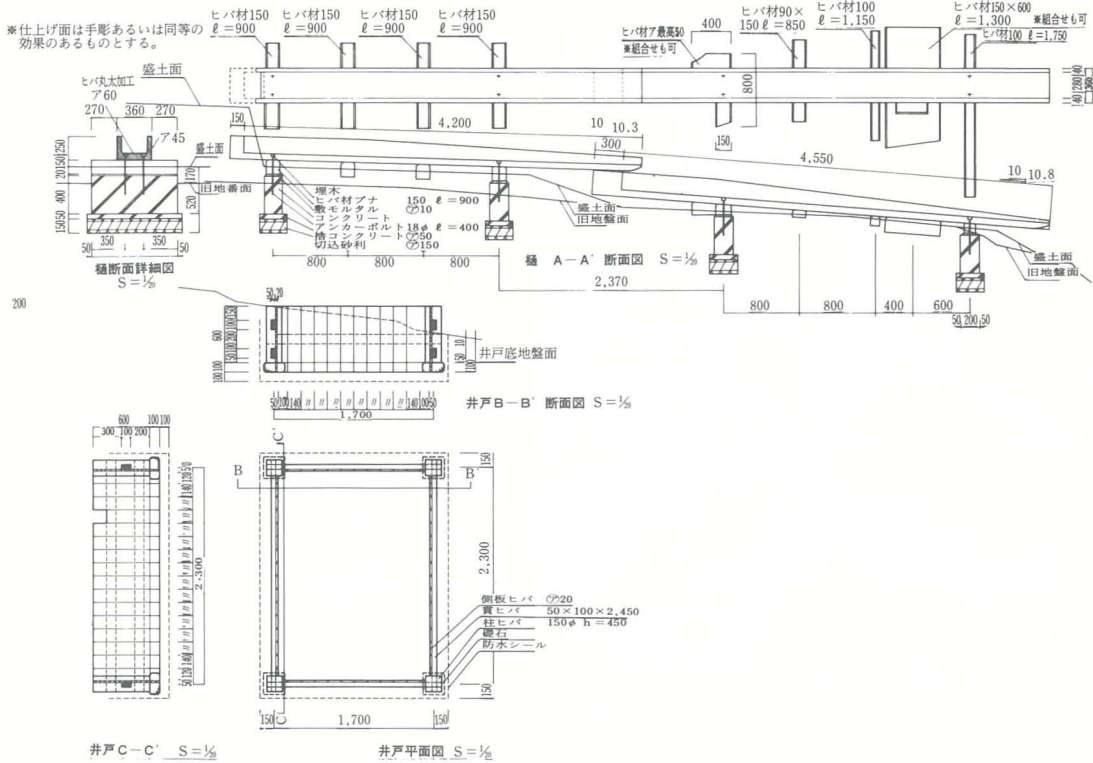
正面北半に作られていた5～6mの高低差を持つ大きな段が中央園路を挟んで東西両方に出現し景観を一新した。更にその東側段直下は凹みが認められ空壕跡の存在が予測されるところとなり、文献に現われる「館の大手云々」の位置が推されるところとなった。館跡の本格的整備を行うにはその前の遺構確認調査も必要であり、容易に短日時に完成できるものではない。その為こうした仮整備を進めながら往時の景観を甦えさせ、来訪者の視覚に訴えさせる事は有用である。又、整備の手順を組み立てる上でも、大いに役立つと思われる。未だ、踏査すら敵わない地区も指定地内であり継続して実施する予定である。(松崎)



- 説明板 3基
- 表示板 14基



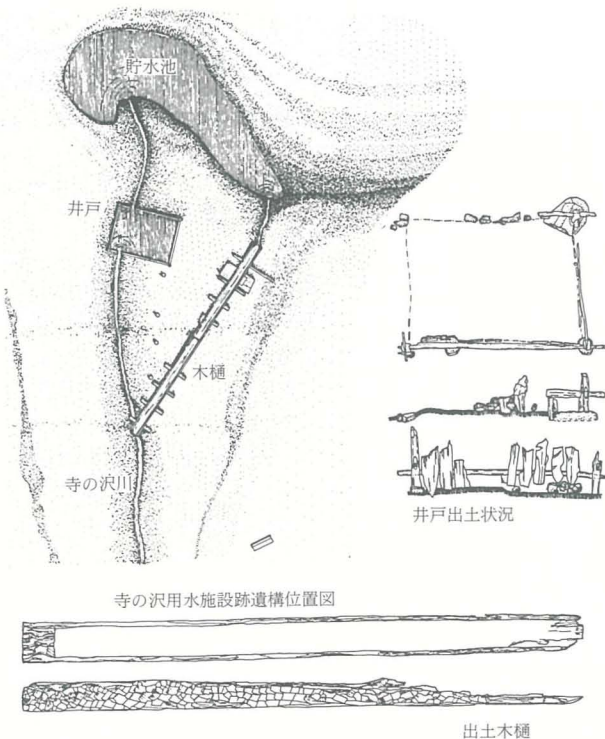
第39図 環境整備概要、表示板説明板正・側・平面図

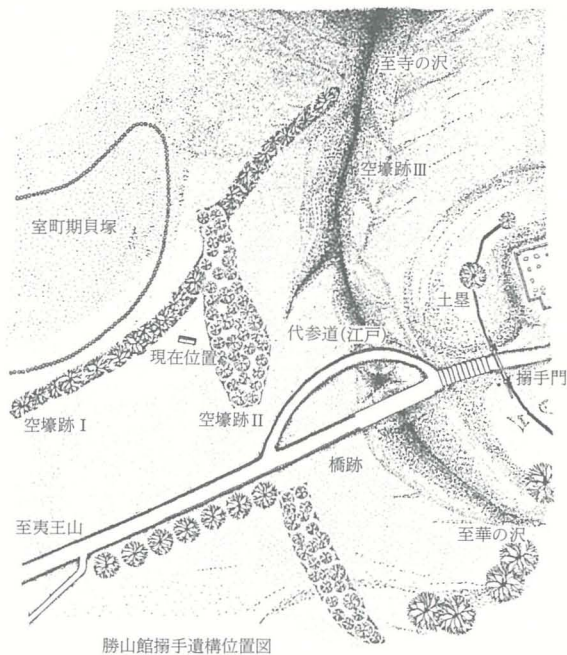


寺ノ沢用水施設跡

山城にとって、「水は生命」といわれるほど重要であった。井戸を掘ったり、河川、湧水、雨水などあらゆる水源を活用してその確保を図った。中世の合戦では水源を断つことが有効な攻撃方法の一つとされ、城内では水不足を隠すために米を水のようにまき散らして敵の目をあざむいたりした。勝山館の内部にも井戸や池などの用水施設が設けられ、寺ノ沢川の中央には木樁を組んだ「溜め井戸」が据えられていた。川の水を引く樋もI基発掘されている。2~3本連結して空壕跡Ⅲの末端に水を落したと思われる。まわりから箸、串、漆塗椀、下駄などが出土した。ソバ、ドクダミなど栽培種の花粉も見つかっている。又掘底は通路に利用したが、そこから侵入される事も多かった。

第40図 説明板詳細・木樋井戸復原
正・側・平面図



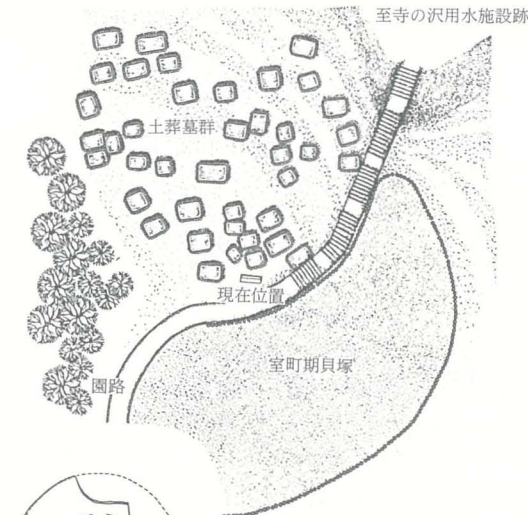


勝山館搦手遺構位置図

搦手の構え

城の表口を大手といい裏を搦手という。勝山館の大手と両翼は寺ノ沢と宮ノ沢に深く刻まれた天然の要害になっている。

搦手は自然の地形に手を加え守りを固めている。尾根の細くなつたところを掘り切つて壕を作り、壕の内側に高く土壘を築く。さらにその上には柵をめぐらし、一層堅固なものとしている。土壘の中央には門を構え、壕には橋がかかっていた。壕は断面V字形の「薬研堀」で水のない空壕である。両端は寺ノ沢と華ノ沢に切り落とされている。使用年代は16世紀である(空壕跡III)。この外側から断面U字形の「毛拔堀」(空壕跡II)、「箱薬研堀」(空壕跡I)が発掘されている。外側ほどその時代は古く空壕跡Iの年代は15世紀の末頃と推測される。



土葬墓群・室町期貝塚遺構位置図

土葬墓群・室町期貝塚

夷王山墳墓群に接して41基の土葬墓群が発見された。1.6×1.2mほどの土拵のなかに座棺が納められ、六道銭、漆塗椀などが副葬されていた。中には釣針を持たされた人もいる。漁師でもあったのであろう。火葬墓はないが、いずれも仏教に帰依していた人達のものと思われる。

空壕跡Iとその北西の沢地を埋めて、白く貝殻が散らばっている。鳥獣魚骨や貝殻が層をなし、汁器、武器、狩猟具、茶器・文具・装飾品、鍛冶製鉄関係品などをまじえ4mにも達している。発掘面積は全体の1/4余、出土した点数約1万点勝山館の生活の一端がうかがわれる。この中から犬や馬、鹿の骨にまじって壮年の身分の高い本州系の男性の骨が出土した。隣接する墓地には埋葬してもらえないわけがあったのであろう。



出土陶磁器(染付、中国製)

第41図 説明板詳細

VI 結

史跡整備事業として着手された本事業はその事業費の中で整備の前提となる遺構確認調査とその結果に基づく整備工事を進めて来た。

その前半は、遺構確認の為の発掘調査に多くを費した。非力な筆者等の調査は、明確な成果を呈し得ず、幾度となく、お叱りやご指導を頂戴した。

昭和59年度、整備実施設計書を策定し、これに基づき既出の遺構等を本格的に整備すること、未発掘地区については、仮整備という方法で、その景観を明らかにし、本格的整備に備えること、遺構確認調査は、その間「伝侍屋敷跡」を継続して実施することなどを基本方針とし、本事業の後半が開始された。

実施設計書に基づく本格的整備は第2年目となり館後方、空壕外側の整備が行われた。

寺ノ沢地内用水施設跡には木樋、井戸等が復原され、これに到る園路が整備され、土葬墓群、貝塚、空壕跡等の遺構を示す表示板、説明板が設置された。

館神八幡宮跡から南の部分の主な整備が進められた事になる。空壕跡Ⅱの東半の植栽による表示が残されているがそれとは別に空壕Ⅲを渡る橋部分、それに続く搦手門跡の整備方法が今後の大きな課題である。

館神八幡宮跡北部に未整備の8～10号地剖面が続いている。未だ資料整理の途中であるが、竪穴遺構と掘立柱の建物とで構成されており、これらの性格付けを行い、この地区の整備を実施できるように進めたい。

文化庁の強い勧めに従い仮整備を実施した所、勝山館跡の景観が一新するところとなった。一見して大がかりな造成工事の手を加えている事が明らかとなり、改めてこの館の規模の大きさ、重要性等を知らされることとなった。大手部分が推定され、空壕の存在も予測される等、今後の整備方

び

法をも再検討する必要があるであろう。

侍屋敷跡の遺構確認調査は59年度に続いて2回目である。

屋敷跡の門跡かと思われた土塁は明治期の構築と判明し期待は裏切られた。が、それとは逆に侍屋敷地内の建物群が延々と続いていた事は予想外のことであった。更に北へと続くものと思われ、往時のこの地内の景観を想像すると全く驚く外ない。

61年度の調査の結果、59年度の調査後に想定した事を改める事も必要となった。61年度調査区内の居住用建物は1カ所のみで、他は倉庫様の建物であり、倉庫と住居が1組、一単位を構成するとは言えないことが明らかとなった。倉庫様の建物やその中に納められる物が個人に帰属するものではないことが推測された。

鍛冶関連遺構・遺物も明瞭には検出できず、この種集団の集住地区の内容を更に検討することが、必要のようである。

北端部の地形測量を実施した結果、石積み、段、平坦面、古道跡等が明らかとなり、侍屋敷の出入口部分に関連する遺構の存在も予想されることとなった。

これらについては引き続き調査を行い解明に努める所存である。

整備工事や仮整備がすすめられ、勝山館の姿が眼前に次々と提示されてきている。関係諸機関、各位のご指導とご尽力の賜物にはかならない。

遺構確認調査は、又も予測の誤りであった事を知らせ、筆者等の詰めの甘さ、追求の不足を露呈させるところとなった。通例のことではあるが後悔と自責の念を深くするところである。

関係機関、諸先生、諸先学には一層の御指導と御叱正をお願い申し上げますとともに、微力ながら努力を重ねたく思うところであります。(松崎)

図 版

PL. 1 園路・用水施設跡整備状況





発掘調査状況

PL. 2
用水施設跡
整備状況

整備状況



PL. 3

仮整備



平坦面



段



段及び
平坦面



PL. 5
出土遺物

陶磁器



播鉢



美濃鉄釉碗



播鉢



PL. 6 勝山館跡遠景



東より



中景(中央部分侍屋敷跡)



南西より



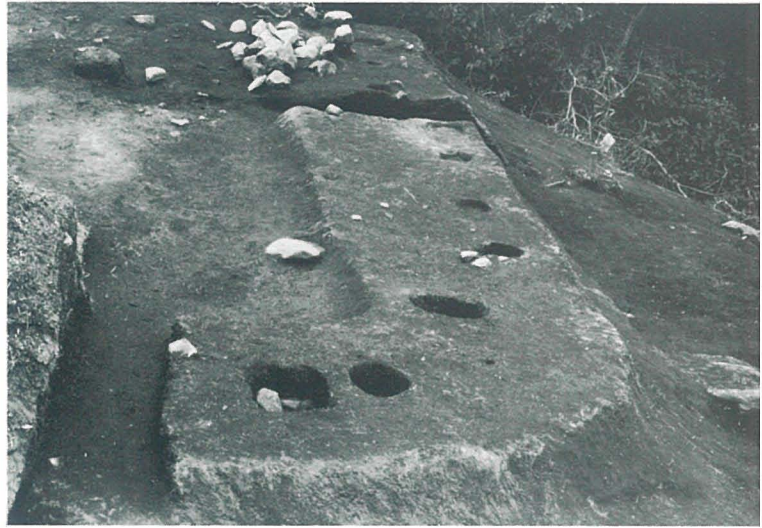
土塁調査前

PL. 8 土塁調査 (土塁セクション他)

(土塁セクション)



土塁柱穴列と集石



門柱穴



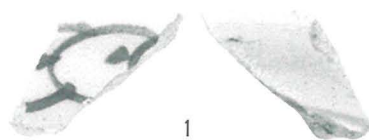
PL. 9 土壘調査
 (土壘下部集石・出土遺物)



土壘下部集石



鉤状石列



1



2



3

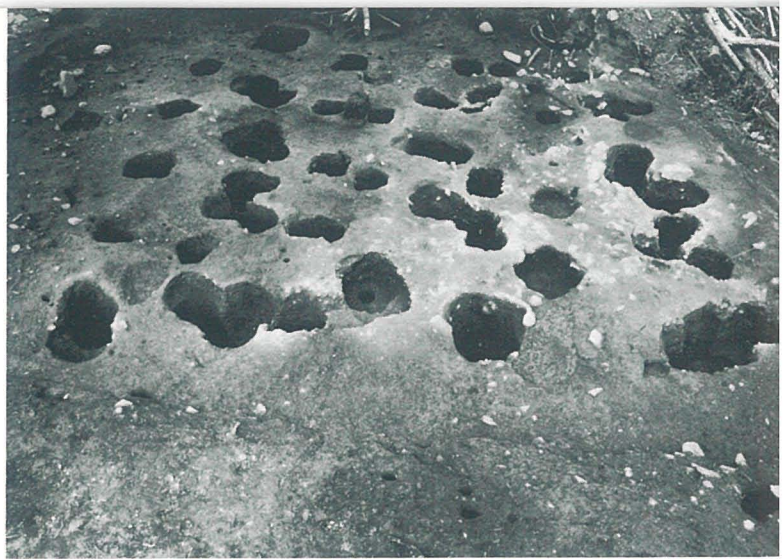


出土遺物 4

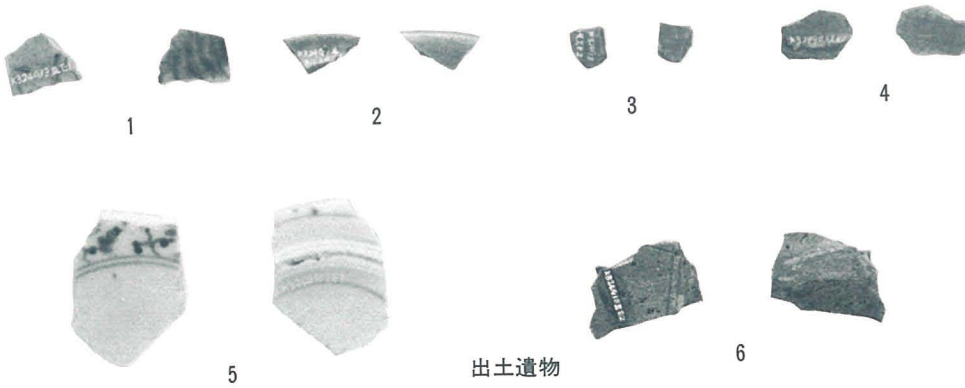
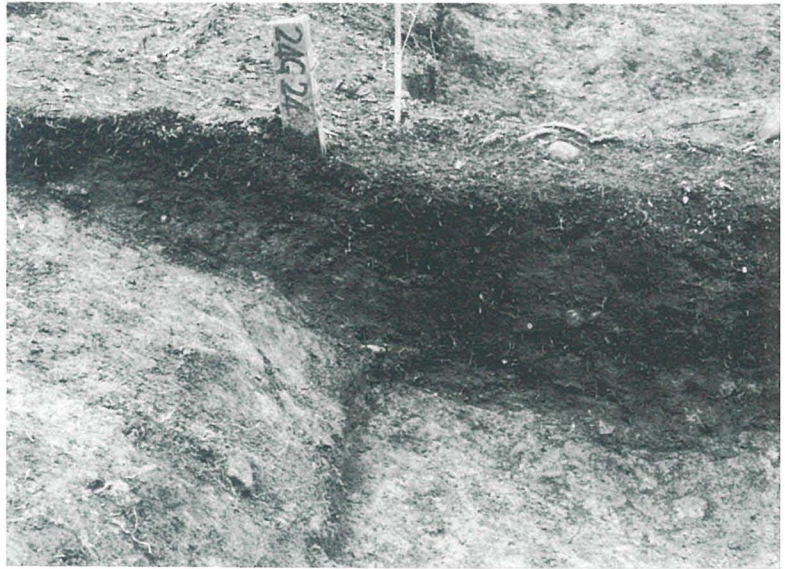


5

第14号地割面
南より



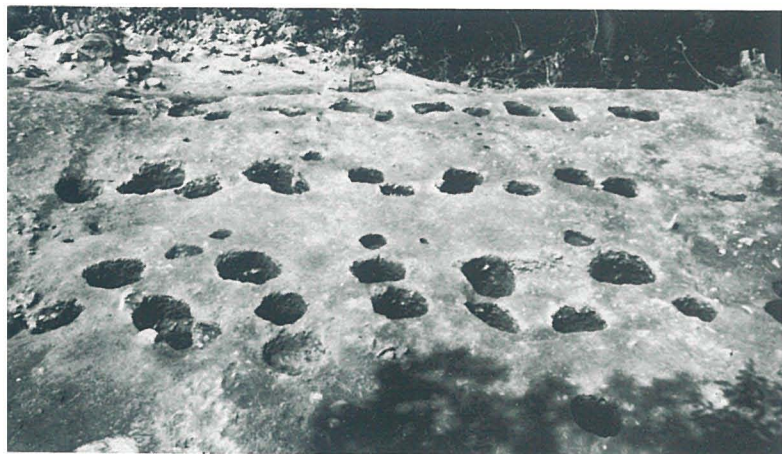
地割段セクション



第15号地割面
南より



東より



集石箇所セクション



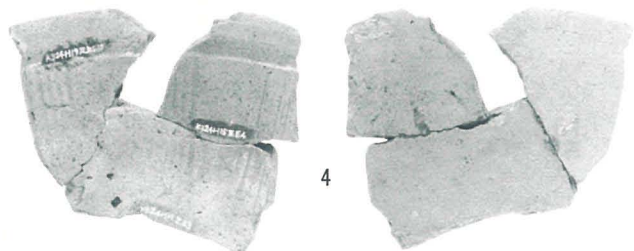
1



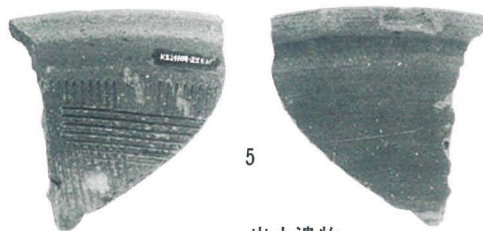
2



3



4



5

出土遺物

PL.12 第16号地割面・出土遺物

第16号地割面
北より



西より



1



2

出土遺物

PL.13 第17号地割面・出土遺物

第17号地割面
南より



西より



1



2



3

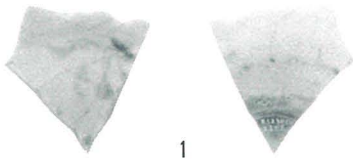


出土遺物

第18号地剖面
南より



東より



1



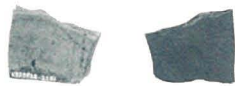
2



3



4

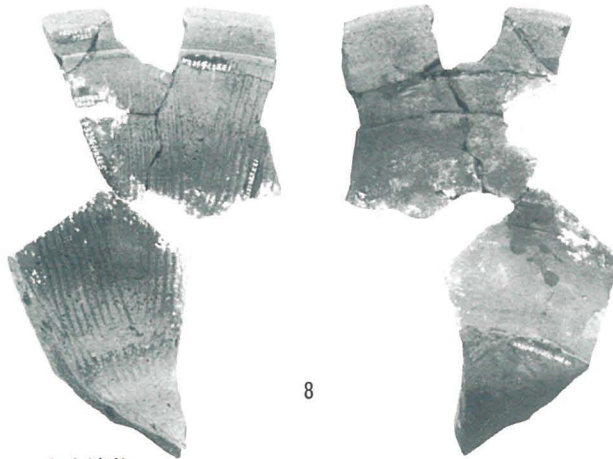


5



6

7



8

出土遺物



砂鉄



磁着する石
(×0.5)



木炭
(×0.5)



磁着成分



骨(×0.8)



?(×0.8)



漆器皮膜(×0.8)



種子(×0.8)



?(×0.8)



ガラス(×0.8)



くるみ(×0.8)



砂鉄



木炭(×0.5)



木製品(×0.8)



磁着成分



磁着する石(×0.5)



骨(×0.8)



種子(×0.8)

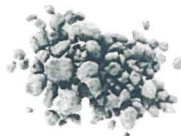
炭化物集積出土遺物



砂鉄



磁着成分



磁着する石



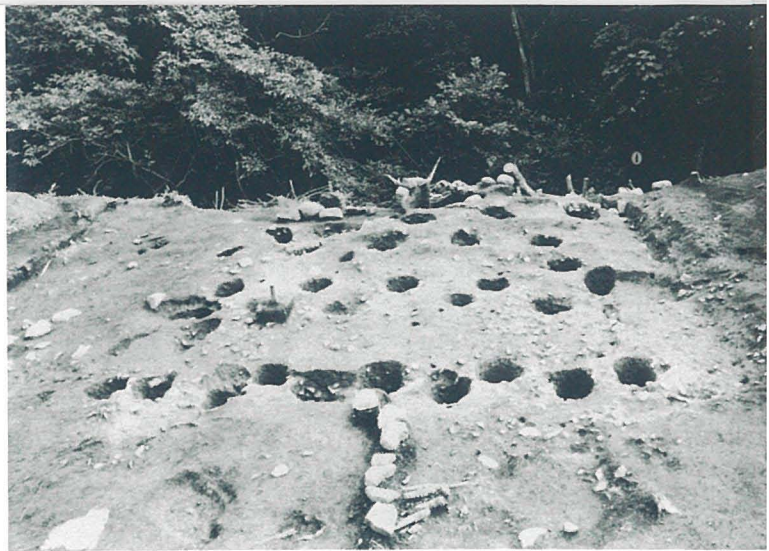
木炭(×0.8)



?(×0.8)

ロームブロック出土遺物

第19号地割面
西より



北より



1



2



3



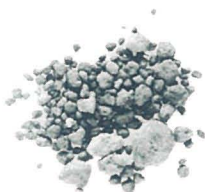
4



出土遺物



磁着成分



磁着する石(×0.5)



砂鉄



木炭(×0.5)

土壌出土遺物



フレーク(×0.8)



チップ(×0.8)



鍛造剥片(×0.8)



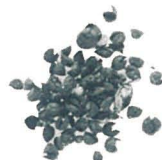
?(×0.8)



?(×0.8)



骨(×0.8)



種子(×0.8)



1



2



3



4



5



6



7



昭和61年度調査区表採品



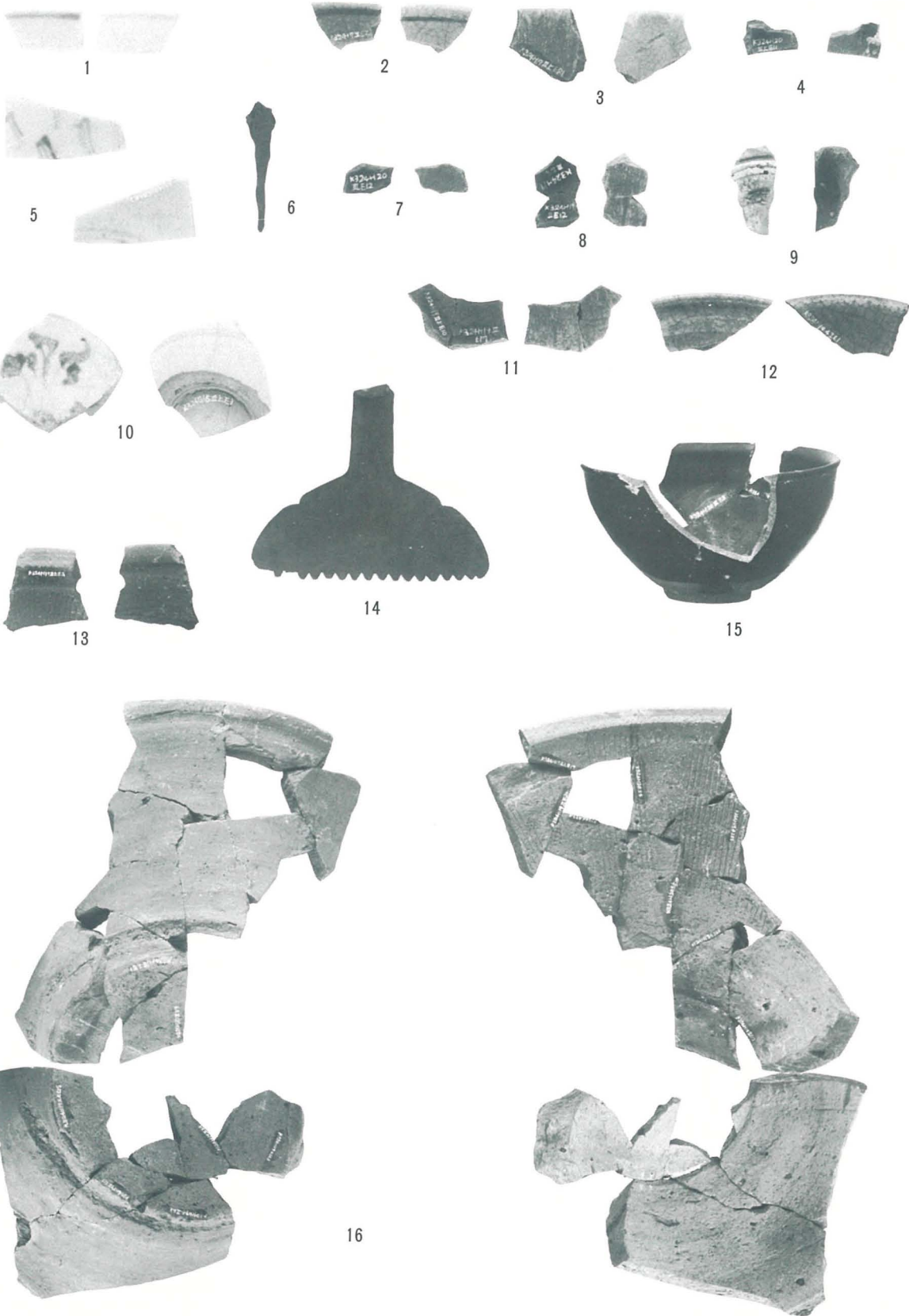
8



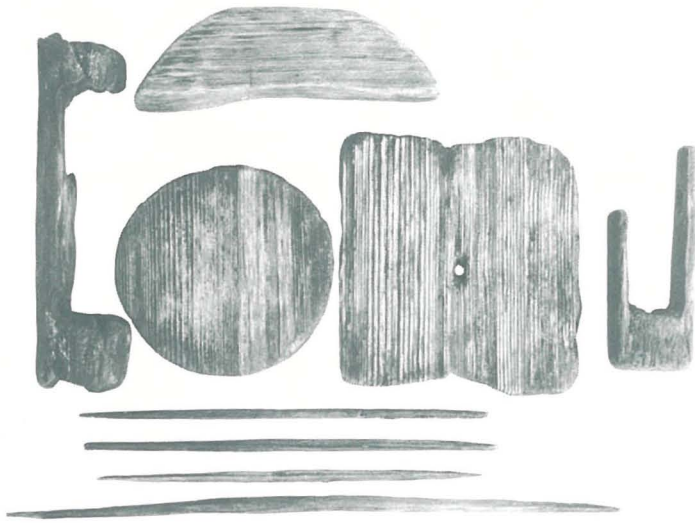
9



10



PL. 19 保存処理完了遺物



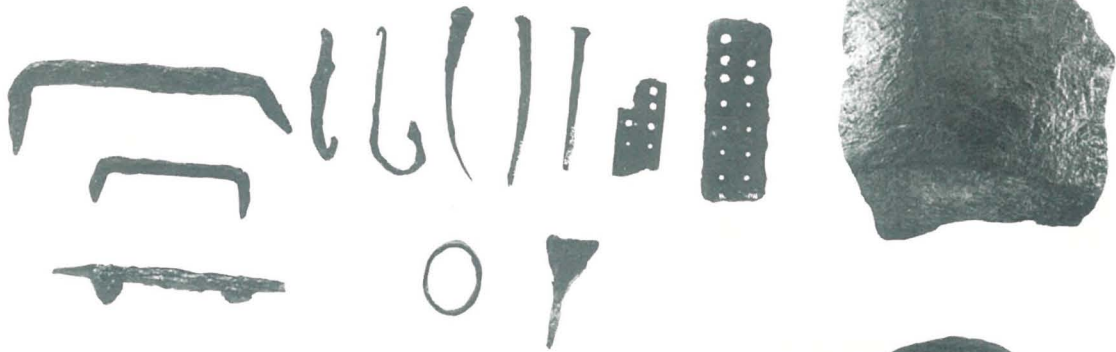
木製品(下駄、笥、曲物の底等)
(×0.4)



漆器(×1.0)



漆器(×1.0)



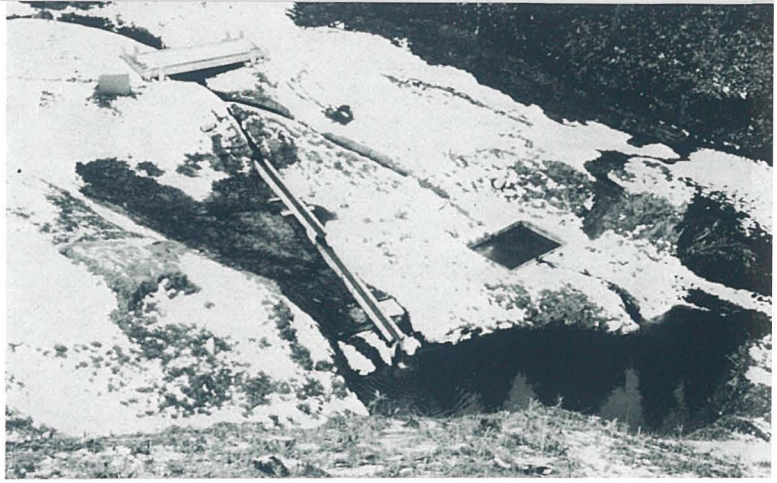
鉄製品(釘、鋸、小札、小柄、鍋等)



PL.20 環境整備(用水施設跡・園路)

用水施設跡整備状況

(東より)



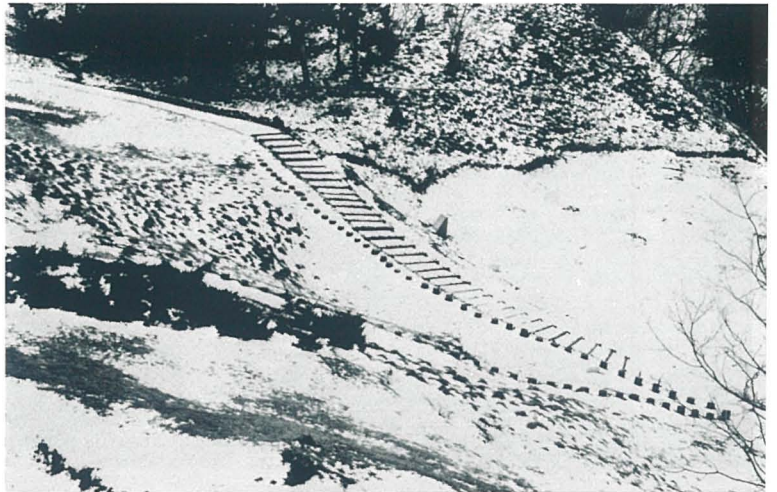
用水施設跡整備状況

(西より)



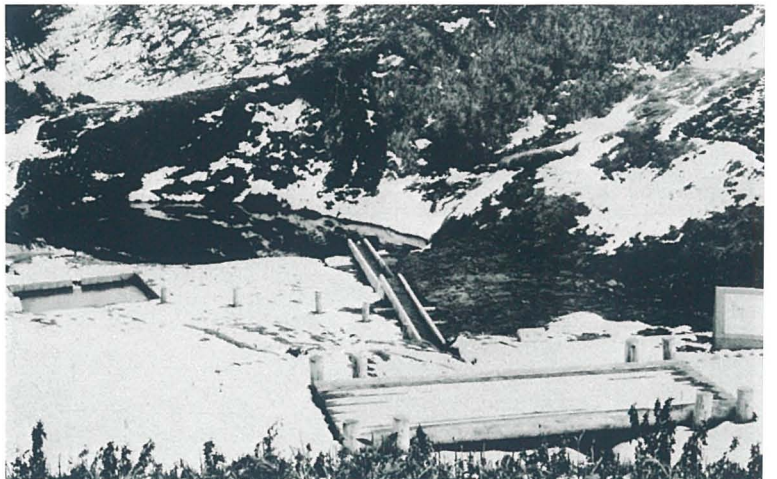
園路整備状況

(北より)



用水施設跡整備状況

(南より)



大手推定地



大手前方平坦面と空壕
(南より)



大手前東空壕



大手前方西側平坦面



史跡 上之国勝山館跡 VIII

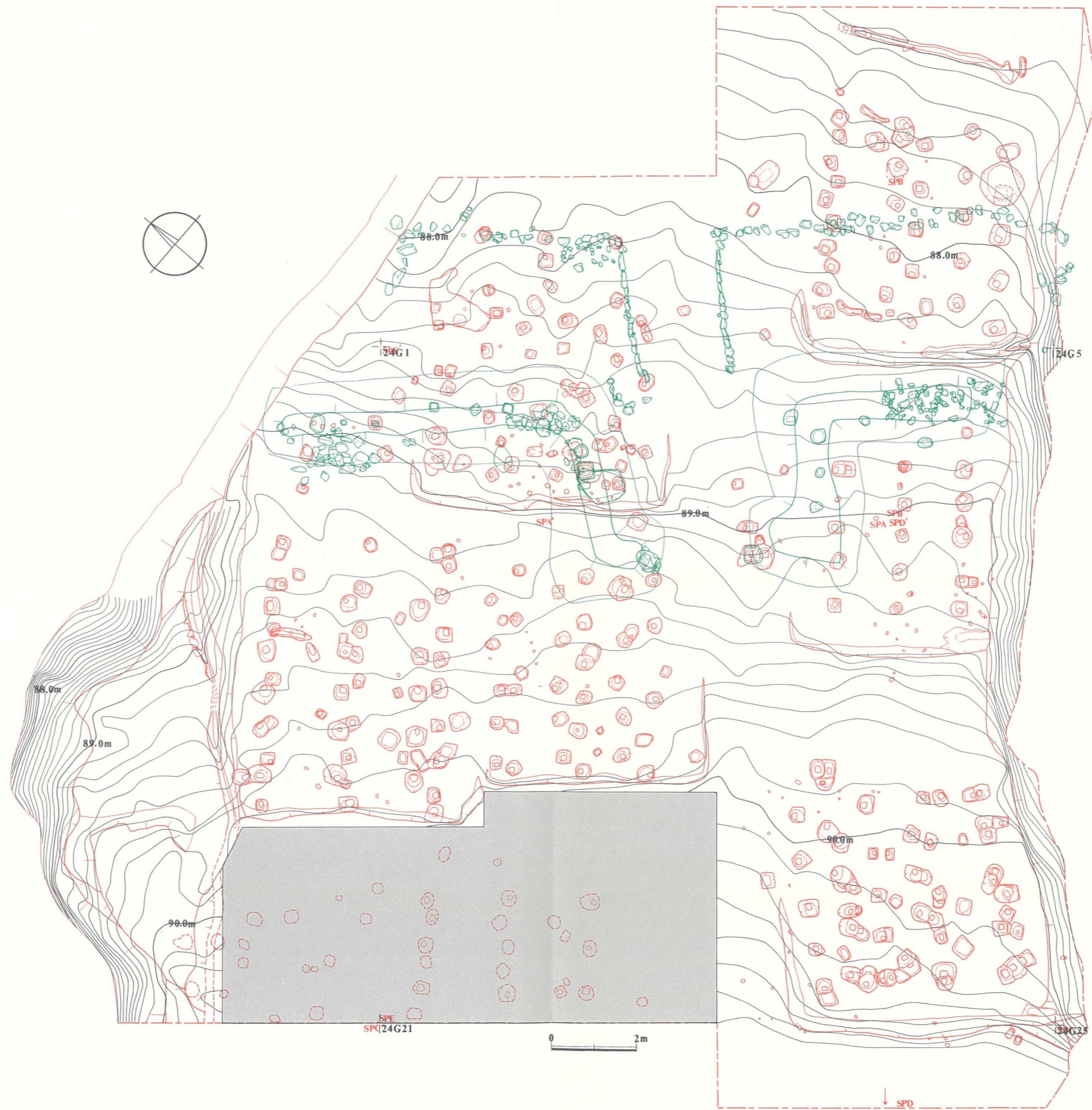
—昭和61年度発掘調査環境整備事業概報—

発行 上ノ国町教育委員会
北海道檜山郡上ノ国町大留100

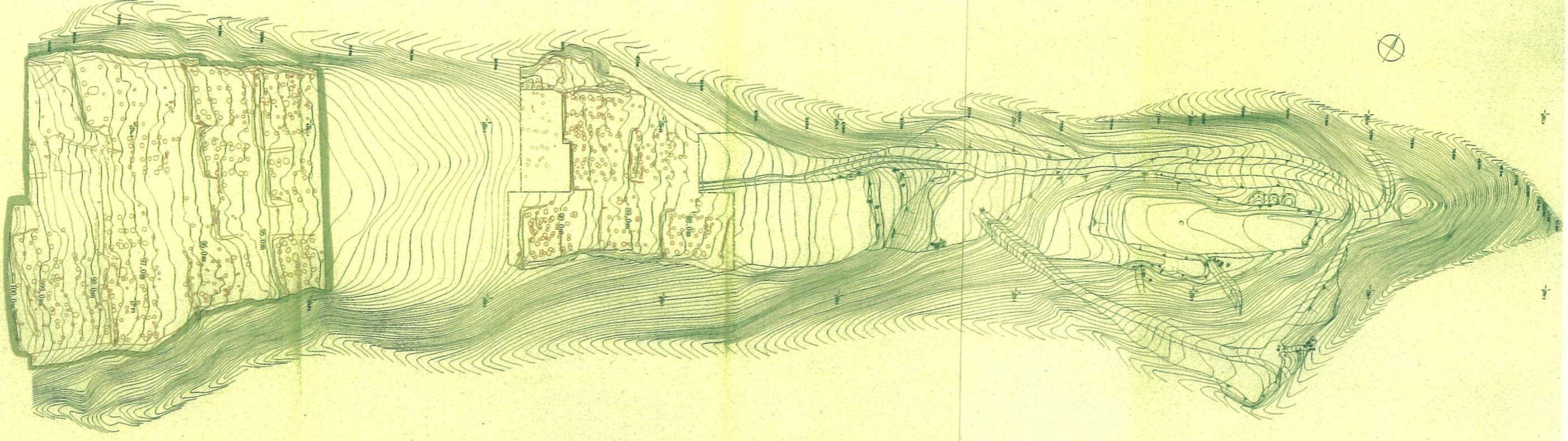
印刷 昭和62年3月25日

発行 昭和62年3月31日

印刷所 (株)北海道機関紙印刷所



附図1 侍屋敷跡地内昭和61年度調査区地形遺構配置図



附圖 2 神農架地形圖

1:100,000
1959年測繪區